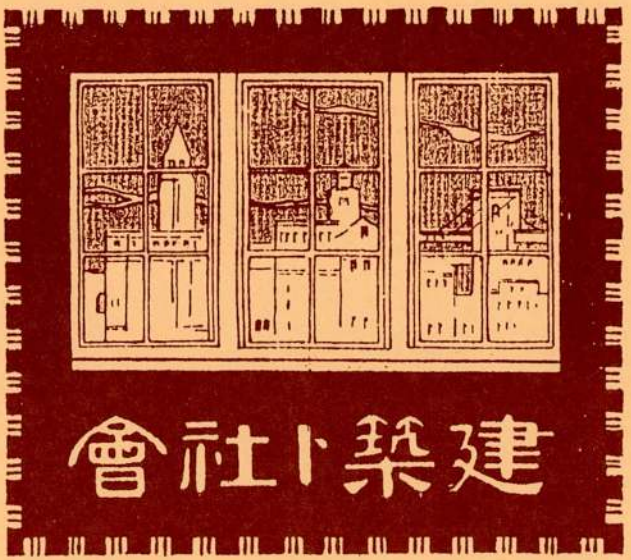


第七輯 第十二号

日本建築協會

大正十三年十二月一日

日本建築協會々則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ發實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク
地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ入會ノ資格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス
會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス
會員タラントヲ希望スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會ニ於テ之ヲ決ス

第五條　本會ハ前條ノ目的ヲ遂成シ事業ヲ援助スル者ヲ賛助員トス
賛助員ヲ分チテ左ノ四種トス
一　名譽賛助員―地位又ハ事業アル名譽家
二　終身賛助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家
三　特別賛助員―建築ニ關係スル特種ノ技術家又ハ事業家ニシテ本會ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者
四　普通賛助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者
賛助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各賛助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽賛助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス
終身賛助員ハプログラムヲ送リ本會ニ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決ス
特別賛助員ハプログラムヲ送リ本會ニ申込書及賛助員プログラムヲ送リ本會ニ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決ス
普通賛助員ハプログラムヲ送リ本會ニ申込書及賛助員プログラムヲ送リ本會ニ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ決ス

第七條　會員ハ會員ノ中ヨリ第十九條ニ關スル權利ヲ有ス
會員ハ會員ニ於テ缺ケル其ノ盲行ニ付負擔外ニ於テ責ヲ任セサルコトヲ得
名譽賛助員ハ本會ノ總會及第十九條ニ基キ相當ノ利益ヲ受ク
終身賛助員、特別賛助員及普通賛助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其ノ他各相當ノ利益ヲ受ク
賛助員ノ權利ヲ行フニハ會員ニシテ脫會セサルモノヲ經由スルヲ要ス

第八條　會員ニシテ脫會セントスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申込ムヘシ
前項ノ規定ハ賛助員ニシテ本則ノ規定ニ違背又ハ本會ノ名譽ヲ毀損スルノ行爲アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其ノ賛助員ノ權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

第九條　本會ハ會員ニシテ本則ノ規定ニ違背シ又ハ本會ノ名譽ヲ毀損スルノ行爲アリト認メラルル者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其ノ會員ノ權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得
前項ノ規定ハ賛助員ニ之ヲ準用ス

第十條　脫會其ノ他ノ事由ニ依リ會員タルノ資格ヲ失ヒタル者ハ既納會費ノ返還ヲ求メ又ハ其ノ債務ヲ免カルルコトヲ得ス

第十一條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一　會頭　一名
二　副會頭　一名
三　理事長　一名
四　理事　十名（理事長タル副會頭ヲ含ム）

會頭ハ會務ヲ總攬シ本會ヲ代表ス
副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス
理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ理事會ヲ代表ス
理事ハ會務ヲ總攬シ本會ヲ代表ス
副會頭ハ會務ヲ總攬シ本會ヲ代表ス

第十二條　役員ハ會員ノ中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選舉ス但シ會頭副會頭理事長ハ理事ノ互選ニ依ル
役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス
理事ノ改選ハ每年半數トス但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク
一　主記　二名
二　會計　二名
三　幹事　若干名

主記ハ總務、主記ノ事務ヲ掌リ、理事ノ命ヲ受ケ、經過ノ概要ヲ記錄シ會計ハ理財ニ、幹事ハ會務ノ一般ニ付キ各〻分擔シテ之ヲ處理ス

第十四條　主記、會計ハ理事之ヲ互選ス
第十五條　幹事ハ理事之ヲ選任ス
幹事ハ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員長ヲ設ケ各部ニ委員若干名ヲ置キ委員長ハ理事中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ會務ニ關シ理事會ニ出席シ意見ヲ述フルコトヲ得

第十六條　委員長ハ常設委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ指定委員會ノ決議ニ依リ委員其ノ職務ヲ代理ス
委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス
委員會ノ調査研究報告ハ委員會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ決議ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ每月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ報告シ、講演會、討論會又ハ講演會ヲ催スヘシ但シ理事會ハ必要ト認メルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得
例會ニ於テハ議案其ノ他ノ事項ニ付テハ他ノ限ニ在ラス
緊急事項ニ付テハ前項ノ規定ニ拘ハラス

第十八條　本會ノ事務ニ關スル詳細ノ事項ハ別ニ之ヲ定ム

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ
一　建築ニ關スル講演會ノ開催
二　建築ニ關スル研究報告ノ發表
三　建築ニ關スル重要事項ノ調査研究
四　建築ニ關スル意見書ノ公開
五　建築ニ關スル展覽會ノ開催
六　建築ニ關スル圖書ノ刊行
七　建築ニ關スル調査ノ實施
八　建築ニ關スル懸賞
九　建築ニ關スル視察
十　建築ニ關スル有志者ノ懇親會
十一　其ノ他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ納出スル但シ例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス
一時ニ金五圓以上ヲ納出スルトキハ前項ノ會費ヲ免ス
會員タルノ承認ヲ得タル日ヨリ初年度ノ會費ハ入會金五圓ノ外ニ附加スヘシ
特別賛助員ハ特別賛助員年額金拾圓ヲ、普通賛助員ハ普通賛助員年額金六圓ヲ本會ニ納出スヘシ但シ其ノ以後ノ分納ヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金其ノ他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第二十二條　本會ノ財產ハ理事長之ヲ管理ス
本會ノ財產ハ理事會ノ決議ニ依リ之ヲ處分スルコトヲ得
本會ノ財產ハ每年一月例會ニ於テ報告ス
本會ノ收支ハ理事會ノ決議ヲ經テ每年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會ノ會計ハ每年一月ニ始マリ十二月ニ終ル

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

高級昇降機

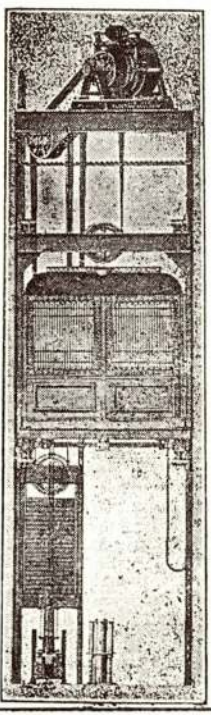
エー・ビー・シー

▼現在ノ最大建築ニ使用サレ！

▼今後ノ高層建築ニ採用サレントス！

最近御採用先御報告

丸ノ内ビルデンク	十一臺
日本郵船	八臺
日本興業銀行	四臺
中外商業新報社	一臺
特許局	一臺
阪急電鐵	一臺
泉尾土地會社	二臺
大學病院	二臺
松竹キネマ座	二臺
神戸商船ビルヂング	四臺
明治海運ビルヂンク	四臺
淺野物産	一臺
村井銀行神戸支店	一臺
プラナモンド社	二臺
內田ビルヂング	三臺
明治屋	二臺
其ノ他	拾臺



A.B.See!

ELECTRIC ELEVATOR CO.

220 Broad Way New York

ESTABLISHED IN 1883



Esteemed enquiries solicited!

東洋總代理店

內田商事株式會社機械部

東京　神戸　大阪

建築と社會　第七輯第十二號目次

口繪

日本建築協會及建築學會の神戸市に於ける講演會の狀景
日本建築協會主催鐵筋混凝土工講習會に於ける修了證書授與式の光景

◉卷頭……唯此一事

論說

「住」……工學博士　佐藤功一・二
郊外の土地區劃整理に就いて……加藤善吉・一四
建築と社會……工學士　中尾保・一九

研究

大阪源流考……田中清志・三
——都市計畫の見地より——

住宅

主として婦人の立場より觀たる住宅……工學士　葛野壯一郎　三三
住宅雜考……大塲草太郎・四四

資料

象島見物═開路市役署……工學博士 天沼俊一・五〇
——續埃及遊記——

漫錄

帝展雜感……青山居人・五九
比叡山……文學士 黑田鵬心・六四
建築饒舌……泉綠郎・六六

創作

都會の黃昏……別所悌一・七三

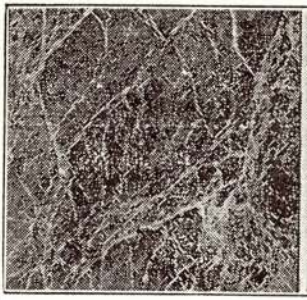
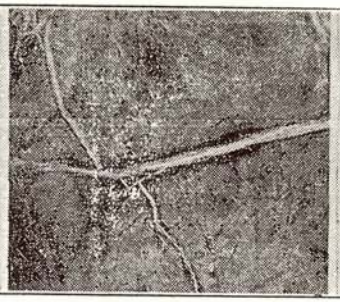
時報

建築界の最近重要記事……八五

會報

大日本建築協會十一月中記事……

大和錦（A）　白瀧（A）　白瀧（B）


錆色青磁色ニ白模様　薄青磁色ニ濃青磁色並ニ白模様　青磁色ニ白模様

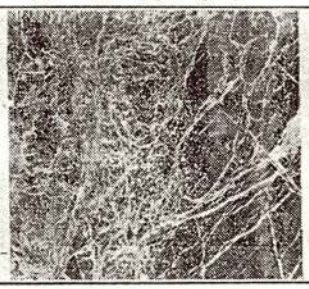
本　店　鳥取市立川町一ノ五九
東京販賣所　東京市日本橋區小網町三ノ二四（電大手七一一六）
大阪販賣店　大阪市北區芝田町一〇六番地電話北一六七〇
採掘地　鳥取縣八頭郡若櫻町字赤松

旭大理石商會

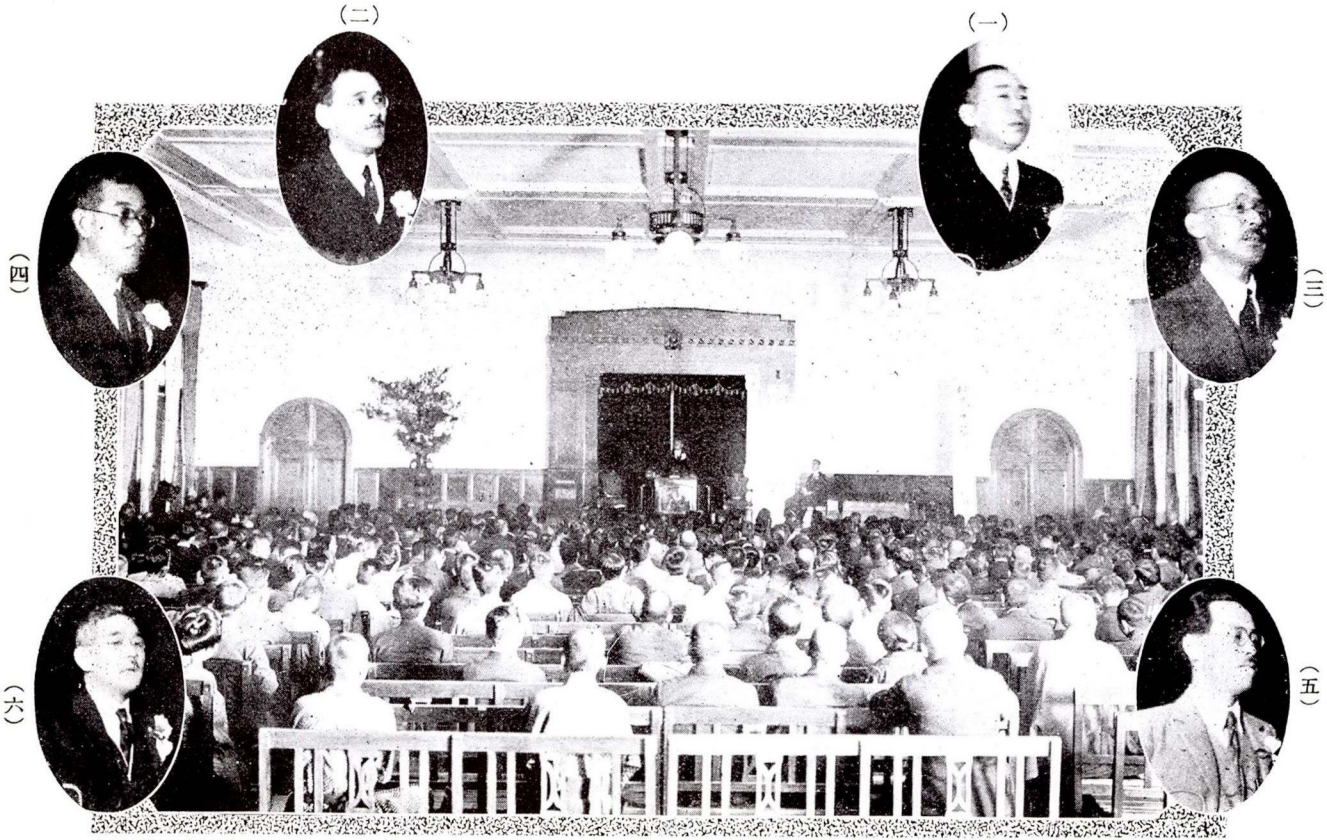
蛇紋石

礦量豐富　大材採取
耐火　耐酸　價格低廉

若櫻　大和錦（A）　若櫻


濃青磁色ニ朱色模様　錆色青磁色ニ白模様　濃青磁色ニ朱色模様



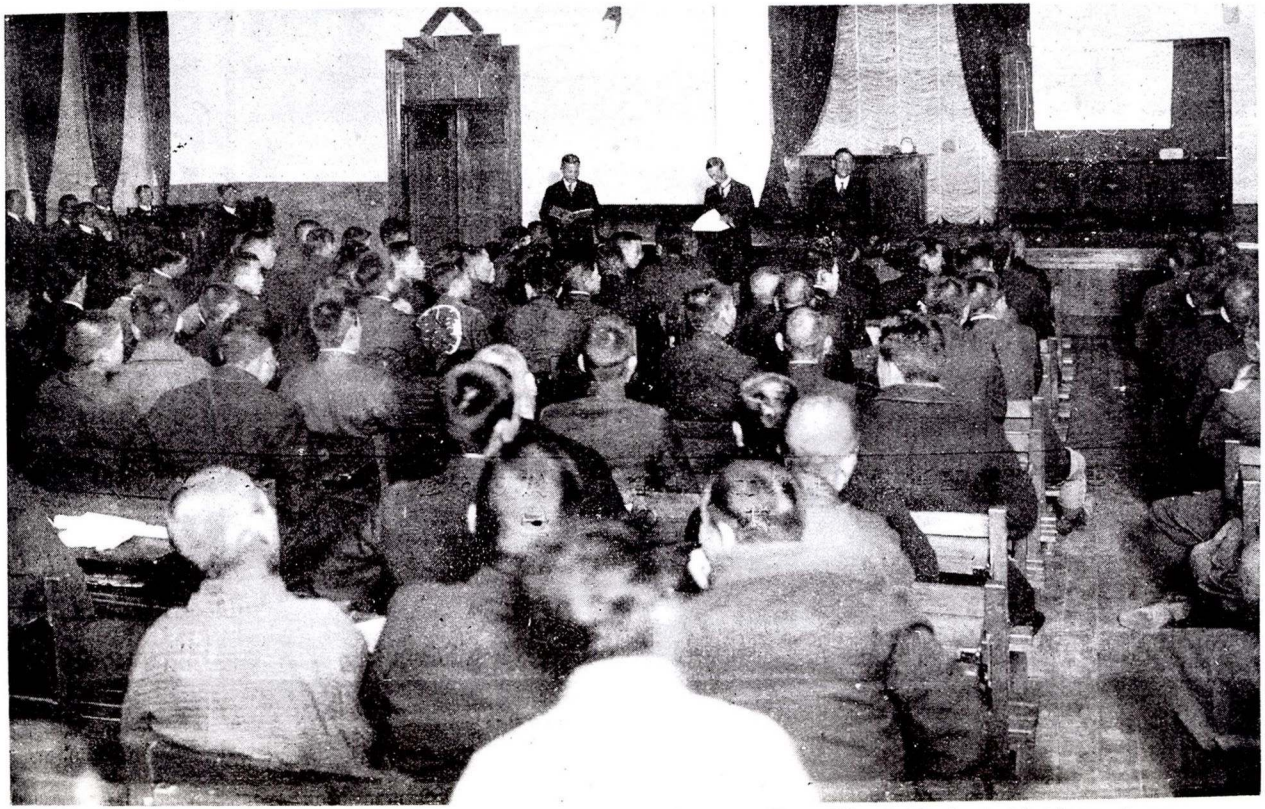
(一)片岡安博士　(二)佐藤功一博士　(三)天沼俊一博士　(四)松井清足工學士　(五)葛野壹工學士　(六)古宇田實教授

日本建築協會及建築學會の神戸市に於ける聯合通俗講演會の狀況

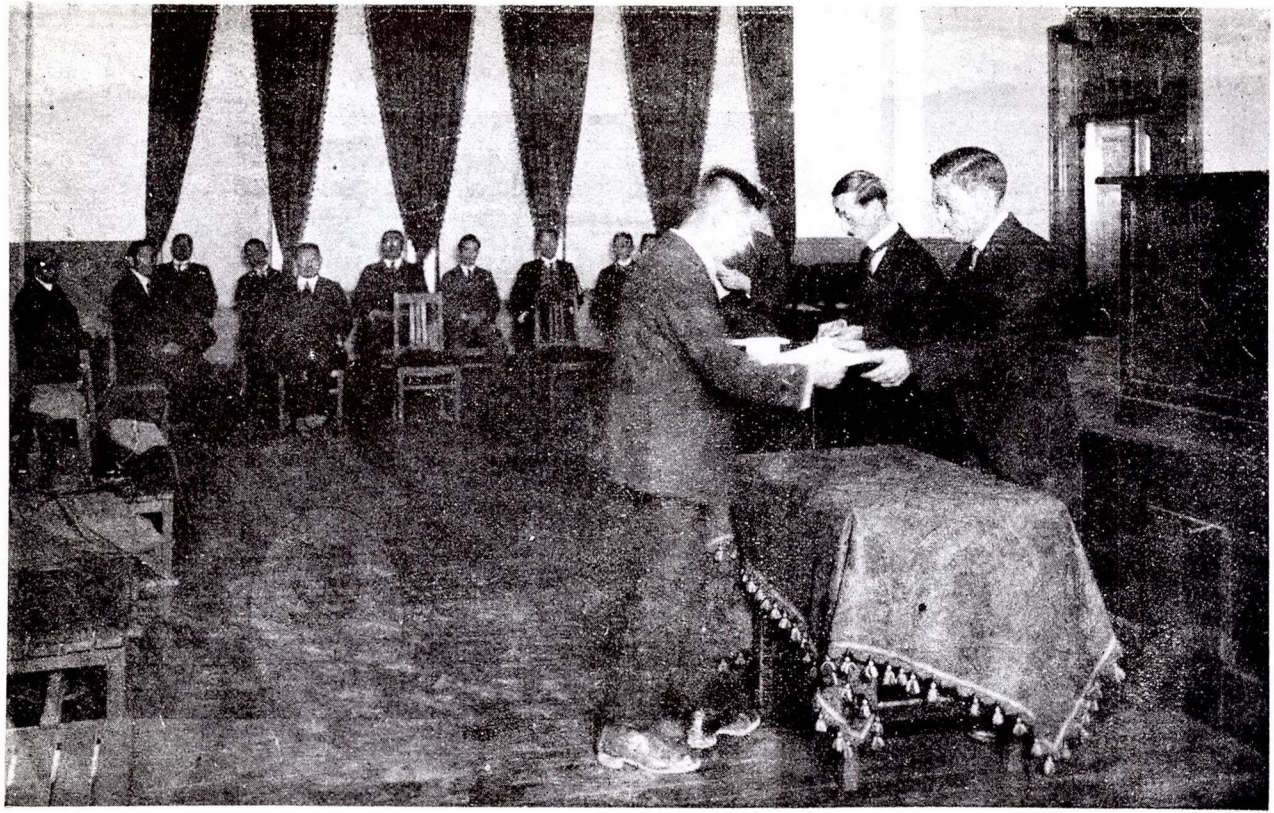
其の一



其の二



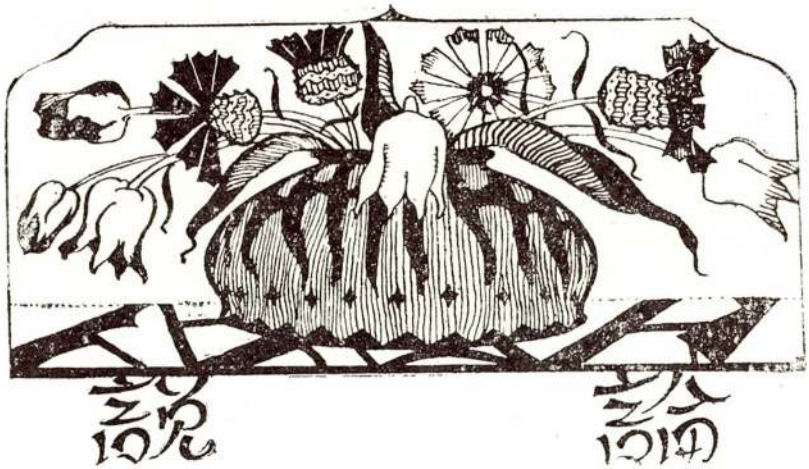
日本建築協會主催鐵筋混凝土工講習會に於ける修了證書授與式の光景
其の一



其の二



予は唯此一事務をむ



『住』

工學博士　佐藤功一

凡ての問題に亘つて、理想と、其の理想に基いて、現家に如何に處理して行くべきかと云ふ二つの問題がある、住宅の問題に付ても、其の理想があつて後、初て現在の住宅を如何にすべきかと云ふことが生れて來ると云ふことは、誰しも異論の無き所であらうと思ふ、理想が高ければ高い程、其の個人は進歩し、其の國家は隆盛に赴く、もし個人にして理想がなかつたならば、其の個人は堕落し、國家にして理想が無かつたならば、その國家は衰亡に歸する、住の問題も亦同じく、そこに高い理想を有つて、それを如何に現在の住宅に對して處理して行かうかと云ふことにならなければならぬだらうと思ふ、所が私共は固より住宅に對して大きな理想を有つて居るが、併し私共の取扱ふ所は、住宅を生産して之を一般の人に供給すると云ふのが私共の職業である、然るにあなた方の住宅に對するお考は生産の問題でなく、消費の問題である、從て私の述べやうとする所と、あなた方のどう住宅を改良し

やうかと云ふことは、自からそこに差異があらうと思ふ、と云ふのは、私共が住宅を論ずる時には、何時でも新しい住宅を造るのに、それを如何にすべきかと云ふことが先づ以て論ぜられるのであるが、併しあなた方が住宅をどうしやうかと云ふお考は、主として今現に住んで居る住宅に於て如何にして良く住むべきかと云ふことであらうと思ふ。

そこで其の如何に良く住まうかと云ふことに二つある、一つは今現にお住みになつて、御所有になつて居る在來の住宅を如何に改善しやうかと云ふことである、先程葛野君がお話になつた通り、押入が多う過ぎる、或は流しが高過ぎるとして、如何に押入を少くし、又流しを低くすべきか——或は疊敷の部屋では不便であるから、椅子の部屋にしたいとして、其疊敷の部屋を如何に改良すれば、椅子の部屋として最も適當であらうか——斯う云ふことが問題である、否もつと主な問題は他にあるのではないか、——と云ふのは、失禮ながら、あなた方の大部分は私は貸家にお住ゐの方だと思ふ、そうすれば、貸家にお住ゐの方が如何に住宅を直さうとされた所が、大屋がやつて呉れなければ、自分では何とも仕方がない、故に都市に於ける中流の住居者の大部分は在來の住宅の中で如何に良く住むべきかと云ふことが一般の都市居住者の要求であるべき筈だと思ふ、所で私共生産者の立場に在る建築家が茲にお話をするとして、單に其の理想だけしかお話が出來ない、從て今あなた方が現にお住ゐになつて居る住宅の中で之を如何に良くすべきかと云ふことは、寧ろ私共を離れて、專らあなた方に懸かつて居ることだらうと思ふ、勿論先にも述べた通り、理想は先であつて、其の理想に基いて、現實を如何にすべきかと云ふことは後であるから、理想を述べることは出來る、併し今述べたやうな關係から、私は要所々々の細かい問題に對して述べることは避けたい、從て私の述べることは、あな方に取ては、大變迂遠なことになるかも知れないが、極めて基本的なことをお話する積りである。

先程葛野君も一般に住に對する趣味が少いと云ふやうなことを述べられたが、それは葛野君の言はる

ゝ通りであつて、一口に衣食住と云つても、衣食に付ては誰でも注意を向けるものであるが、住は最も閑却され勝である、先づ子供がさうである、子供が一番先に要するものは何であるかと云ふ、食物である、其の次が衣で最後が住である、此の世に於て住を望むのは餘程進んだ人でなければ、なか〳〵そこに到達し得ない、一般の勞働者が金を得て、何を使ふかと云ふと、先づ甘いものを食ふ、殊に東京の勞働者ならば宵越しの錢を持たぬことを誇りにして、直ぐそれを食物に換へてしまふ、次に金が入れば、マア娘に綺麗な着物を着せてやらうと云ふやうな譯で、衣に換へる、併し住の方は出來るだけ辛抱しやうと云ふのが一般の人の考である、是が子供から大人になるに從て、又知識が進んで來るに從て、段々住に注意を向けるやうになる、從て中流の知識階級者に於ては比較的住に注意をする人が多い、所が、歐羅巴大戰中の好景氣が生んだ日本の一般の風潮ではあるが、住に對しても、近來は隨分贅澤な氣持を有つやうになつて來た、又一方に於ては外國の住宅其の他の刺戟から、段々贅澤を離れた、本當に合理的な住宅を求めやうと云ふ思想も出來て來た、更に一面には戰時に金の澤山入つた所から、從來同居して居た、者も各戸に分離するやうになつて、自然住宅の不足が感へられるやうになり、是等の問題が集つて、現在の住宅問題となり、其の言ふ所は所謂文化生活、文化住宅と云ふ言葉になつて現はれて居る元來此の文化と云ふ言葉は單に合理的の生活と云ふ意味ではない、獨逸のクルツールと云ふ文字の起りには、單に物質的の合理的生き方と云ふ以外に、人格的の生きると云ふ意味が入つて居る、併し私は今假に其の元來の文化と云ふ意味から離れて、今日世間で普通に云はれて居るやうに、文化住宅の意味を椅子に腰掛けたり、ペンキを塗つたりするやうな新しい家と云ふことでお話をしやうと思ふ。

先程葛野君も、住宅に注意を向けるやうになると、先づ贅澤な方面にばかりに考は向けるが、それは甚だ可しくない、それよりも、もつと合理的な生活をしなければならぬ——斯う言はれたが、それは御尤もな次第である、が、併し最も重要なる問題は文化住宅の問題ではない、寧ろ、最も重要な問題は、

在來の家に於て如何に良く住まはうか、成べく良い貸家を借りて、其の貸家でどうして良く暮さうか、又彼何に悪い貸家から離れて、如何に良い貸家を選定しやうかと云ふのが、第一の問題だらうと思ふ、次には貸家でない、自分の有つて居る在來の住宅を、如何に便利に、そして如何に近代的の情緒を滿足せしむるやうに、如何に之を廉く改造しやうかと云ふことが第二の問題である——固より建築家の問題としてではない、一般の人に取つての問題である——更に又如何に理想的な住宅、或は理想に近い住宅を成べく經濟的に造らうか——是が第三の問題であらうと思ふ、元來日本人は合理的生活と云ふものから離れて居た、此の生活の樣式を合理的に充實させて、それを高めて行かうと云ふのは西洋人の思想であつて、段々今日のやうな充實し纏つたものが出來たのであるが、我々東洋人の思想は、極めて簡易（シンプル）なそして自然（ナチュラル）と親んだ生活をして、西洋人とは違つた方面の文化に向ふと云ふやうな行き方であつたらしく思はれる、所が、それならばそれで可いのであるが、金が出來るに從て、其の極めて簡單な住宅を充實させることなしに、簡單な儘贅澤生活に引延ばしたと云ふのが、東洋、殊に日本の住宅である、或は檜の柾の柱を使ひ、或は非常に立派な天井板を使ひ、或は黒塗の床框が使つてある、が、併しそれは西洋の生活に比べると、殆ど原始的生活と云つても可いやうな、極めて簡易なものであつて、要するに簡易生活を贅澤生活に引延ばしたと云ふに過ぎない、是が日本の住宅の缺點であらうと思ふ、私は縱令それが原始的な生活に近くあつても、其の通りにあるならば、差支ないと思ふ、併しそれが贅澤生活に引延されてしまつて、それだけの金を要するならば、もつと經濟的な、合理的な生活が出來、住宅が出來ると云ふならば、在來の日本住宅は甚だ忌むべきものだらうと思ふ、他の例を擧げれば、私共の穿いて居る下駄にしても、最初は木片や藁を編んだものを足に付けて歩いたもので、原始的とも云ふべき極めて簡易なものであつた、それが金が出來、文明に進むに從て、段々と便利な靴のやうなものに變つて來たかと云ふと、さうでなく、足に附けた木片一足三十圓もするやうな糸柾の下駄に變つた——私はそん

なことはしないが――又藁を編んで造つた草履は、精選した竹の皮を以て編んだ一足是も十五圓とか何十圓とかする草履に變つた、斯う云ふことは單に履物ばかりでなく、凡てのものがさうである、唯原始的な簡單なものであると云ふだけならば、まだ可いが、其の極めてシンプルな生活の法式を其の儘贅澤な生活の法式に引延したのが可けない、是は第一に打破しなければならぬ、普通あなた方のお住ゐになつて居る貸家にでも、さう云ふ風のことが必ずあるだらうと思ふ、さう云ふ點は私は是非改めたいと考へる。

併し又文化生活などゝ云つて、西洋其の儘の間取を日本に持て來て行ふと云ふことには大不賛成である、日本の住宅にも自から日本に便利な所がある、例へば、一つの部屋が何にでも使へると云ふやうな點などは實に可い所だらうと思ふ、客を通して、客に挨拶をした所で、客に食事を出すことも出來るし又客が泊りたいと云へば、其處に泊めることも出來る、こんな便利な部屋は西洋には無い筈である、若し其處に寢臺が、一つでも置かれてあるならば、其の寢臺のある部屋へは、まさか客を通すことは出來ない、又客に食事を出すことも出來ない筈である一つの部屋が色々の目的に使はれると云ふことは、私は日本住宅の最も良い所だらうと思ふ、さう云ふ例は其の他にも澤山あるが、もう一つは、家の中に間仕切があつて、平生はそれが各個の部屋に使われて居るが、一旦冠婚葬祭などに際して、それを大きく使用せんとする時には、間の唐紙を外しさへすれば、大きな部屋として使ふことが出來る、こんな便利な家が他にあるであらうか――是等も日本住宅の大變良い所だらうと思ふ、徒に近來謂ふ所の文化住宅の名に泥んで、斯う云ふ便利な部屋を挨て、食堂で獨立し、客間は客で獨立した家を造るのは、餘程考へものだらうと思ふ、食事の場合僅かの時間しか使はないものゝ爲に、態々獨立した食堂などを造ると非常に多くの面積が要る、從て小さな食堂を造ると云ふやうなことになつて、家を壓搾したやうに縮められるだけ縮めて、其の中で窮屈に住まはなければならぬと云ふやうなことは、私は甚だ可怪しな話だ

らうと思ふ、尤も相當に金の有る人がするのならば、それは自由な話で、且つそれだけの地位を有つた人々は、各部屋が獨立して居る便利が得られる譯であるから、それは別問題である。

更に又一面に於ては日本の住宅には非常に惡い點がある、例へば、便所の如きものであつて、是等は一品進歩しない、曾て臺灣の土人が内地へやつて來た時に、其の酋長が非常に皮肉な奴で、日本人の生活狀態に付て皮肉に嗤つたことがある、當時日本の新聞などでは、臺灣の酋長は文明のことは、何も解して居ないから、馬鹿なこと言つて居ると一笑に附したのであるが實はさうでない、少し汚い話であるけれども、其の酋長は――内地へ來て、大變意外に思つたことであるが、日本人と云ふものは可怪しな國民だ、何故ならば、糞便を一つ所に溜めて、其の臭ひを嗅ひて喜んで居る――斯う言つたさうである尤も國民だとは云ふまいが、言ひ換へれば、何故日本人は糞便を一つ所に集めて、臭ひを嗅んで喜んで居るのか、あれは俺の國の者には解らない――と云ふやうなことを云つた、それを聞いた一般の人は生蕃は何と云ふ私に云はせると、それは非常に皮肉な言葉である、何處の國々で糞便を一つ所に溜めて、其臭氣を嗅(故意に嗅ぐ譯でもあるまいが)いで居るものがあるか、是等は第一に改良しなければならぬものだらうと思ふ、又是等の改良に付ては近來は色々相當なものが工夫されて居るやうである、水で洗ひ流す程の金を要けることの出來ない場合には、唯中を眞暗にして、竹の筒を下げて置くと云ふやうに簡單な工夫をしたものもある、それは竹の筒の面積だけしか上に出て居らぬから、臭氣の出方が非常に少い、殊に中を眞暗にして置くと云ふことは蠅の發生を防ぐ、そんな便利な良いものがある、日本住宅の缺點として、もう一つ擧げたいのは寢る裝置である、是は長い間の習慣で、あなた方は何でもない當然のことのやらにお考へであらうが、疊の上に床を敷いて寢ると云ふことは非常に惡いことだと思ふ、何故ならば、恰度疊の上の所は埃りや黴菌などの落ちて居る謂はゞ重い空氣の溝のやうな所である、そんな空氣の溝の上に寢て居つては、害のあるのは當然である、どうしても一段高い寢臺の上に寢るやう

にしなければならぬ、併し唯寢臺を其處へ置き付にすることは不便である、其の爲に又近來は色々なものが工夫されて居るが、最も便利なのは、東京の神田今川橋の生活改善器具販賣所と云ふ所で賣出して居る鐵製の寢臺である、それは二つに折れるやうになつて居て、一尺二三寸位の深さの押入があれば、葉蒲團も一緒に入つてしまふ、從來の夜具を用ひれば、押入が澤山要るけれども、毛布敷布を用ひれば數人の家族で、三尺角の押入が一つあれば、十分だらうと思ふ、寢轉ぶのは不体裁であるが、低い長椅子に腰掛けるのは体裁も好く、便利である、併しそれよりも、一日の中八時間として三分の一である、一生を假に七十年として、年數まで數へるに及ばぬが、一生の三分の一を暮す所の寢床の方の改善がより多く必要であるまいかと思ふ、尤も理想は變化する——と云ふよりは、進歩するから、又進歩するかも知れないが、私は今の所、椅子や卓子の問題よりも寢臺の問題の方が最も重要なものでないかと考へる。

さう云ふやうに、日本の住宅には一面に於て非常な缺陷があるが、他の一面に於て又非常に良い所もある、此の良い所を捨てずに、何とかして、其の缺陷のある所だけを補つて行くことは出來ないか——先に述べたやうなことだけならば、半分は貸家住ゐの人にも出來るし、住宅を有つてお居でになる方なれば直ぐにも改造することも出來る、現在の住宅問題としては、さう云ふ方面の考察が最も必要ではあるまいか、在來建つて居る家が不合理な住宅であるからと云つて、壞してしまふことは出來ない、又それをスッカリ壞してしまつて、建て直すと云ふことは國家經濟に於て非常な損失である、卽ち在來の住宅を如何に良く改造し、如何に樂しく住むべきかと云ふことが最も考慮して戴かなければならぬ點だらうと思ふ、之に對して私は建築家として終始理想は發表して居る、併し在來の住宅を如何に改造し、在來の貸家に於て如何に良く住むべきかと云ふやうなことは、私共生産の方だけを主として研究して居る者の問題ではないやうである、專ら其の中には住む方々の問題であり、殊に御婦人方の主として考慮

されべき問題だらうと思ふ、然るに此の問題に對する考慮が比較的閑却されて居りはせぬか――或は又家の手入の如きも甚だ疎かではないか、小學校の教科書にも手入さへ良くすれば、住宅や器具のやうな物は何時までも保つものであると云ふやうなことが書いてあるが、其の手入の方法である、例へば年に一回の大掃除をする、あれを私は唯年に一回の大掃除と云ふことだけに止めず、年に一回の家の檢査と云ふことにしたいと思ふ、あの時に柱を叩いて見るとか、屋根の樋に壞はれて居る所が無いかと云ふやうなことを調べて、掃除をすると同時に住宅の檢査をすることにしたら、どうか、大掃除と云ふのも矢張り一つの住宅の檢査であるが、大掃除と云ふ名に於てするよりも、市なり、其の他の公共團体が進んで行ふ住宅の檢査と云ふことにしたいと考へて居る。

尙住宅の裝飾的方面に付ても、何も好んで西洋の眞似をする必要はない、我々には我々の貴い傳統がある、而も世界に擢んでた工藝美術を有つて居る、尤も實際の必要上さうしなければならぬものは仕方がない、例へば船の煙出しの如きものは、あれは煙を出す爲に、實際上必要なものとして、あゝ造るのであるが、單に裝飾であるとか、或はさうでなくとも、日本固有のものとして可いやうなものは、何もさう云ふ一つの構造に支配されることはない、或は船の帆柱の如きも裝飾ではない、あれはどうしてもあれより仕方がない、あれは日本風にしやうと云つて、妙な飾りを付けたら、可怪しなものであらう、あれは飾りの無いあの儘で可い、さう云ふ實際の必要上、理學上から來る問題は別として、さうでない部屋の中の色々な裝飾や、屋根の形、或は瓦のやうなものは、何も好んで、獨逸の何スタイルであるとか、英吉利の何スタイルであるとか云つて、眞似をする必要はない、尤も建築のさう云ふ問題に付ては二つの言ひ方がある、一つは物の形体と云ふものは、恰度動物の形のやうに、合理的に押詰めて行けば自から定まるものである、故に一つの家には窓が幾つ必要であつて、天井の高さは幾らにしなければならぬ、或は雨がどんな風に降るから、屋根の形はどうしなければならぬと云ふやうに、家の形の問題は

其の用途と、構造の上から自から定まるものであつて、それを面白く装飾をしやうなどゝ云ふことは間違ひであると云ふ説である、所謂ファンクショナリズムと稱するものであつて、私は之を歸納主義（此の譯語は拙いと云ふ説もあるが）と譯して居る、他の一つは、そんなものではない、人間は極く幼少の時代から、物の形を造らうと云ふ心の衝動（本能と云つても可い）を有つて居る、例へば幼兒に粘土を與へると、何も知らない子供が、それを以て繩のやうな長いものを造つたり、團子のやうな丸いものを造つたり、又それを積重ねたり、色々なことをして遊ぶ、稀には泥で以て犬の形や人形のやうなものを造る者もある、或は又木片を與へると、それで以て土の上に何か畫いて居る、是は誰も教へるのではないが、人間の自然に有つ心の衝動からである、此の泥を以て人形のやうなものを造ることが彫刻の素をなし、木片を以て何か畫くのが繪畫の素を成して居る、更に他の木片を以て物を畫くにしても、物の形を畫かず、唯にゝや角や線を畫くとか、泥を以て物を造るにしても、人形を造ると云ふやうな事はせず、圓い物を重ねて一つの形を拵えると云ふやうなのは、是は繪畫でも彫刻でもなく、即ち建築の素を成すものである、建築は人間であるとか樹であるとか云ふやうな宇宙の物像を藉らずに、平面に物を畫くが如く、立体的に一つの形を造る學問である、獨り建築もさう云ふ人間は本來有つて居る心の衝動から發達して來たのであるから、屋根の形にしても、屋根は雨露を凌ぐと云ふ實際的必要から出來たものであるが、其の出來た屋根を更に又何とかして見やうと云ふ氣持が起る、即ち實際に必要とする心と、更に實際の必要を離れて、一つの物を建築的に住ひ形に作つて見やうと云ふ心と、二つの心が働いて總ての建築は成立つたものである、——斯う云ふのである、そこで私は屋根を作るにも何も西洋の屋根を眞似ずとも、日本のもので可いぢやないかと云ふのであるが、併し日本の在來の屋根の儘で可いかと云つて必ずしも日本の屋根の詰らない傳統を其の儘追へと云ふのではない、たゞ瓦にしても、赤瓦より黑瓦が廉かつたら、黑い瓦で葺いても可いぢやないか、又棟の所が關東のものは重苦しいと云ふならば、關西

のやうに輕くすれば可いぢやないか、何も西洋のものを其の儘眞似る必要はないぢやないか――斯う云ふのである、是は公館であるから、別であるが、幾ら獨逸派の表現主義の流行る世の中だからと云ふて住宅のあゝ云ふ所を厚く重くしてぎざ〳〵を付けると云ふやうなことは可怪しなものじやないか、奇を好んだ流行ぢやないか、流行は人の心を支配するものであるが、流行を遠ざかると云ふことも偉いものであるまいか、流行を批判して、良いものなら、取入れる必要はあらうけれども、單に流行を追ふて進むだけならば、個性と云ふものがないぢやないか、私共建築家としてどうも流行を追ひたい、獨逸の新しい書物が來て、何か非常な刺戟を受けると、それをやつて見たい、併しそれは餘程考へて見なければならぬ、本當に合理的な新建築が目指す行方ならば、それは可からう、さうでない單なる流行であれば避けなければ可けない――私は斯う云ふ説を有つて居る、感能的の藝術、感覺的の藝術――例へば繪畫彫刻の如きものは古代に於てスッカリ完成してしまつて居る、今日は何とか變へやうと變へやうと焦りながら、彼方を引繰返して見たり、此方を引繰り返して見たり、唯古代のものをクル〳〵引掻き廻して居るに過ぎない、物質文明は駸々として進んで居るが、精神文化の方は物質文化の如く進まない、古代の方が相當進んで居る、之に就いては問題が住宅を離れて大きな議論になるから、私は其の議論の道程は述べない、甚だ獨斷的であるが、斷定的に云ふ、物質文明を離れた精神文明は古代に於て最上に達して居る、彫刻は希臘に、繪畫はルネッサンスに於て、又東洋の繪畫は宋明の時代に於て、陶器は明の時代に於て其頂上に達して居る、どうしたつて、それより進まない、今日はそれを追かけ追かけして、唯弄り廻して居るに過ぎない、建築家が古代の建築を眞似ることは十九世紀の末頃まで流行つた、其の反動として、我々は古代のスタイルの受賣人ではない、古代のスタイルを切賣するものではない、と云ふやうな言葉が流行つて來た、即ち十九世紀末までの建築家は――『如何でございませう、どうか一つルネッサンス式でやつて呉ませぬか――可しうございます、ルチッサンス式でやりませう』――『どうでムいま

せう、圖書館を建てたいのでございますが、何の式が可しうございませう？此の前はルヰッサンス式でやりましたから、今度はゴジック式でやりませう』――斯う云ふ狀態で個性と云ふものがない、之を稱して樣式切賣商人（スタイルモンガー）と云ふ――斯の言葉が非常に刺戟して、十九世紀の末になると、是も建築の發展の道程を述べて居ると長くなるから、ドグマ的に斷定的に云ふと、何でも新しく行かうとした、然るに其の結果は埃及を探り、支那を探り、日本を探ると云ふやうに、唯方面を變へて昔を低徊する樣になつた、即ち自分は定つたスタイルの切賣商人では可けない、何とかしなければならぬと云ふ所から、恰も紺屋が古紋帳で商賣をするやうに、今日までの古紋帳を澤山集めて、如何でございませう。是でお染めなさいませぬかと云つた樣な行き方をするやうになつた、約そルヰッサンスとかゴジックと云ふ樣なものは、捨てゝしまつたが、他に據るべきものが無い、そこで是は西洋ばかりでは可けないと云ふので、埃及を探り、支那を探り、日本を探つて、こつそり新しい古紋帳を調べて、新しい奇抜なものだとして居るのであるが、矢張り昔のものを引繰返して居るに過ぎない、そこでもつと先へ行かうと云ふので、一生懸命に、顯微鏡で昔の模樣の研究をして、顯微鏡模樣と云ふものを作り出したが、矢張り可けない、相變らず昔のものを引繰返して居るのだ、而も其の或人が昔のものを引繰返して拵えたものを又珍しそうに眞似るものがある、それなら、寧ろ昔のものを眞似た方が可いと思ふが、それを眞似て喜んで居る、個性が無いのも甚しい、尤も是は誰のことを云ふのでもない、實は自分のことを云つて居るのであるが、反省はしても、まだ知行合一の境に至らず、知識的には知つて居るが、行ひが之に伴はない、甚だお耻しい次第であるけれども、私自身もそれをやつて居る、兎に角さう云ふ譯であるが、而も其の歐羅巴でこつそり拵へた新しい古紋帳の中には大分近來は日本のものが入つて居る、然るに東洋藝術に對して何等の訓練を受けることなしに、單に西洋の藝術を學んだ人達はそれを知らずに眞似をして居る、之を喩へて云へば、日本の國民史に對して殆ど訓練を受けることなくして、世界史ならまだ可いけれども、獨

逸の國民史、或は英吉利の國民史だけを學んだ人達は、直に獨逸或は英吉利人の眞似をしやうとする、慨しいことではないか、實は獨逸の新しい表現主義の模様だと云つて居るものも、日本の或種の金細具の形から出て居たり、或は刀の切羽などから出て來て居るものがある、それを御存じがないのか知らぬが喜んで眞似て居る、それは眞似ても可い、即ちそれが自分の頭にぴんと來て、其の刺戟に依て本當に俺は是で行くんだと云ふやうに、自分の思想が練れて、出て來たものなら、新しい時代には又自から、新しい精神があるものであるから、可しいけれども、さうでなく、何か新しい奇拔な人をアッと言はせるやうなものはないだらうかと云ふので、新刊雜誌などを探し廻つて、それの眞似をしやうと云ふに至ては沙汰の限りではないか、それは個人として個性の無いものであり、國民として國民性の無いものである、個性の無い藝術、個性の無い創作物が、藝術として、創作物として何等の價値の無いと同じやうに、國民性の現はれて居らぬ住宅を首めとした建築物が我々に取て何等の價値があるだらうか——斯う言ひたい。

それで大變私は偉らさうに語氣を強めて言つて居るが、實は自分自身を叱つて居るのであるから、其の積りで御承知を願ひたい——私も知ることは出來ても、まだ〳〵行ひに到達しない、何故かと云ふと私が敎つた敎育の方法が惡い、日本の藝術に對して何等の知識の無い者が大學へ行つて、西洋の建築の構造（構造は科學であるから、西洋から學ばなければならぬが）と共に、西洋の藝術を無批判に頭へ入れられてしまつたのである、それから後に纔に古社寺の實測位から出發して、日本の建築術と云ふものが頭に入つたのであるから、日本の建築の實際の研究と云ふものをこゝに打建てやうとするものとの間に何等の連絡が無い、私はそれを慨いて居るが、それも時代でむを得ない、他の問題に就いても斯うした事が多からうと思ふ、願くは敎育の任に當られる方は深く此處に留意して貰ひたい、建築の方の方々も私が斯う考へて居ると云ふことを御注意願ひたい。

郊外地の土地區劃整理に就いて

加藤善吉

一

土地區劃整理は都市構成の根本要件であるが、既成市街地に對する土地區劃整理は種々なる情勢、種々なる障害物に累せられて非常なる困難の伴ふものである。今や復興途上にある東京市の土地區劃整理問題に關し永田前東京市長の述懐談に曰く土地區劃整理は實に結構な、良い方法であるが、いざ是れを實際に施行するに當つては却々むつかしいもので非常なる困難が伴ひ實際やれるかどうかさへ始めは疑問であつた、それが關係者或は專門家の間に種々論議討究せられ愈々之れを實施すると腹を極めたのは最近のことであると言はれたやうに記憶する。之れは勿論既にバラックを以て充滿されたる今日ではあるが之等とても燒野原の上に建てられたる假建築であつて都市計畫の必要に應じて當然撤廢さるべき運命を以て居り之れに依る損害の如きも始めより豫期されたるものなるに不拘區劃整理に當つて非常なる困難に遭遇して居るのである。然るに未だ都市化せざる郊外地に於ける土地區劃整理問題に關しては前述の如き困難の伴ふこと尠少である、如何となれば之等の土地は一部を除き大部分は田畠或は山林等であつて建築敷地造成に必要なる道路其他の計畫實施に當つて其の累せらるゝ障害物が比較的僅少である只土地區劃整理に對する土地所有者の理解と自覺を促すに努力を要することは同樣であるが、之等の人々が公共團體と共に土地區劃整理問題に關し十分の理解を以て一致共力之れに當るに於ては何の苦勞もないことであらうと思ふ。

二

郊外地の將來都市化せんとするものに於て都市に連絡あり秩序ある發展をなすには是非共都市計畫に準據して土地區劃整理を決行するにあらざれば不可能である、殊に大阪に於ては既に都市計畫區域内全部に市街地建築物法の適用を見、又地域制も近く決定を見むとする時に當つては速かに郊外地の市街地形成に必要なる計畫、建築敷地造成に必要なる準備をなすことは最も緊急にして且つ當然なすべき問題であらうと思ふ。

元來都市計畫區域内の土地は漸次建築敷地及之等に隨伴する必要なるべきものとしての利用を見るに至るべき運命を持つて居るのであつて、之等に對しての利用を秩序あらしめ漸次形成さるべき市街地をして健全なる發達計畫に從はしむることは極めて必要なることである。之れがためには前述したる如く都市計畫の道路系統、運河計畫、公園計畫に準據し地域の關係を考慮して一定の系統的方針のもとに區劃整理をなし、之等に必要なる施設をなさしめねばならぬ、豫めこの計畫施設なくして現在の儘に無方針、無秩序なる發達に放任するに於ては永久に悔を殘すことは現在の實例に徵して明白なる事實である

三

獨逸に於ては早くよりこの點に關し着眼する處ありフランクフルト、アム、マインに於ける建築用地の區劃整理に關しては如何に徹底的に實施せられたるかは『アライケス法』に依つて知り得るのである之れが普魯西の他の都市にも漸次實施せられ遂には建築線法（バウフルフトリエングゼッツ）を發布して之れに依つて建築物の位置を定め、土地の區劃を整理して秩序ある發達をなさしめたのである。

この法律は千八百七十五年二月に制定されたものであつて即ち土地の所有者と雖も自己の土地に自己の欲するが儘に建築することを許さず自治體の公共の利益を主眼として土地の秩序ある發展をなさしめ

むがために個人の自由を制限するの方針を採つたのである。

勿論我が國に於ける市街地建築物法に就ても建築線に關する事項を揭げて之れに依つて街衢構成の基準、土地區劃の整理、不衛生地の整理等に資せらるゝのであるが、然し之れは郊外地の實測完全であらざれば仲々困難なことで、それに加へて土地所有者の混在錯綜し之等の人々が自己の建築造成に必要なる道路を勝手に思ひ々々に築造し、何等の聯絡もあらざるために道路幅員の大小相違、道路の食違ひのための曲折等の弊を生ずる亦止むを得ざることで之れがために我が國に於ける建築線の指定のみに依つて劃然たる道路系統をなさしめ秩序ある市街地の發展を企圖し良結果を期待することは全然不可能である、故に之れには是非共各町村の公共團體が進んで之れを計畫し土地所有者の了解を得又誘導し相共力して合理的なる土地區劃整理を施行して之に供ふるの外道はないのである。

四

最近米國に於ても中央西部の多くの都市は土地區劃問題に關し之れを取締るべき方法に就て大に努力をなしつゝある、市俄古の郊外小都市に於ては新に土地區劃制(サブデイビヨン、オーデイナンス)を採用し、土地區劃を合理的に善導すべき取締を爲すことになつた、即ち土地を區劃なすに當つては先づ第一に都市計畫委員會の承認を經ねばならぬ、然らざれば其の土地區劃内に於ける土地の賣買分合を許されざることになつて居る、而して土地區劃の認可を受けむとするには、土地の現況、そこに現存する建築物の狀態、現存道路と都市計畫道路其他の關係、其の土地の發展の趨勢、土地區劃の計畫要領等を提示して具申せねばならぬ。然れども上下水道の施設不可能なる土地の區劃は認可されないことになつて居る。

五

我が國に於ける土地區劃整理は都市計畫法第十二條に『都市計畫區域内ニ於ケル土地ニ付テハ其ノ宅地トシテノ利用ヲ增進スル爲メ土地區劃整理ヲ施行スルコトヲ得』と規定され又同第二項に『前項ノ土地區劃整理ニ關シテハ本法ニ別段ノ定メアル場合ヲ除ク外耕地整理法ヲ準用ス』とある。之れに依つて土地區劃整理は土地を宅地としての利用增進を圖る目的を以て土地の區劃をなすために　土地の交換、分合、開墾、地目變換等種々なる事業をなすものであるが、其の認可の手續に關しては法文の解釋上種々の議論もあることであるが、現在大阪に於て實際取扱ひつゝあるところに依れば、土地區劃整理を都市計畫、都市計畫事業としての土地區劃整理と、外に都市計畫事業に非らざる土地區劃整理を認め、前者は都市計畫委員會の議を經て内務大臣之れを決定し内閣の認を受けて公告され、後者即ち都市計畫事業に非らざる（都市計畫法には依るのである）土地區劃整理は其の設計に關しては認可申請書を地方長官に提出し地方長官は都市計畫法第十四條に依つて内務大臣の認可を受けて之れを申請者に認可を與へると云ふ順序である。

六

然らば土地區劃整理設計は如何、其の一般方針に就て述べて見やうと思ふのであるが、それに先ち現在大阪に於て行はれつゝある土地區劃整理設計の如きは重大視すべき重要なる事項を閑却してゐるやうに見受ける、一般人はやゝもすれば土地區劃整理は耕地整理の如きものと誤認しその觀念のもとに計畫し、基礎となるべき市街地建築物法を閑却し無理解に計畫されつゝあるの感がある、誤れるも甚だしきものと言はねばならぬ、述べるまでもなく耕地整理は土地の農業上の利用を增進する目的のものであつて、之に引換へ土地區劃整理は土地を宅地としての利用を增進するための計畫である、從つて其の根本に於て既に大なる差があつて其の根底となるべきブロック、ロット等凡て建築物法を基礎とし地域の關

係を考慮しその大小、配列等を決定せらるべきものである。之等に關して無理解なるに於ては其の設計當を得ずして或はロットの奥行長きに失して土地利用上の不經濟を釀し或は實用に適せざる道路の計畫をなして後日非常なる迷惑を惹起する等の例は屢耳にするところである。

元來土地區劃整理は或る場合には都市計畫の全部であり、或る場合には一部であると謂ひ得るのでその設計の方針に於ても都市計畫と同樣種々なる方面に關して考慮を要するのである、然れども大體の基準としては先第一に都市計畫道路運河に準據し、第二には地域に順應して種々異なれる計畫をせねばならぬ、第三には市街地建築物法に依る建築物の高さ、建築敷地に於ける空地面積等を考慮せねばならぬ第四には土地の方位、地勢　風向等を參考とせねばならぬ、之れ何れも重要視すべきものであるが土地區劃の基本となるべきロット(劃地)ブロック(區廓)の大さの決定及其の配列の方法に至つては其の基礎となるべきものは建築物である、故に之等の設計に當つては市街地建築物法を理解し建築物完成の曉を想見し其の利害關係、交通上の關係、或は美觀の點を考慮すべきである。而して從來我國に行はれたる城廓都市の區廓は正方形であつて幕府時代の町割は大抵方四十丈と稱し其の中央に庭を採り一邊を五つ或は六つ位に分割したるものであるが、現在に於ける計畫の區廓は長方形を以て原則としてゐる之れが土地の利用上、交通の關係等に於て合理的である、又區劃の大さの決定に當つては各種地域に依つて其の大さを異にすべきは勿論である。

七

以上述べ來つた如く郊外地の土地區劃整理は大阪の如きは緊急なる問題であつて既に二三計畫せられたるなきにあらざるも其の必要なる土地に對して全般に普及し大に之れを奬勵し、又一方土地經營會社大地主等に於ける計畫も之れを都市計畫法に依る土地區劃整理たらしめ之等を善導して合理的なる計畫をなして以て秩序ある市街地を形成せしめ、衛生保安交通上遺憾なからしむべきである。(一三、一〇、一三)

建築と社會

工學士 中尾保

本誌は『建築と社會』と云ふのである。誰がつけた名稱であるか知らないが、餘程考へたものに相違ないと思はれる。

建築の社會化　社會の建築化――共に望むところである、一體日本人程否現代の日本人程建築に興味を有たぬものはあるまい。勿論中には大にこれを理解し建築に深く趣味を有する人々もあるが、しかしそれは殆ど指を屈する程で決して一般的ではない。

然らば日本人は根本的に建築に沒趣味であるかと云ふに決してさうではない、昔の人々が如何に建築なるものに意を用ひたかは古き建物を見ても、又古書の記錄を觀ても容易に知ることが出來やう。

勿論これ等は宗教、政治、軍事を背景としたものではあるが建築は飽くまでも建築としての生命を存つて居る所にその尊さが見出されるのである。而もそれ等の手法が極めてフリーであり、且夫々の時代思潮が遺憾なく建築物に現はれて居る。

これを以つて見ても、昔往の建築は如何に一般の人々から愛されて居たかゞ窺ひ知ることが出來る。

然らば今日の人々が何故建築を愛せぬ樣になつたか、趣味を忘れたかと云ふに大體下の三つのものに**起因**されて居るのではあるまいかと思ふ。

德川末期の法度の弊その一、西洋模倣時代のあまり永きことその二、次に建築家なるものが一般人士に理解なきことその三、である。一、二は何れも既往に屬すべきもので吾人の今最も考慮を要するもの

は第三の事柄である、即現代の建築家なるものが一般から左程に理解なきことである。換言すれば即世人は建築家なるものが何者であるかゞ解らないのである。解つて居ると思ふのが大きな間違ひで、建築家自身ですら建築家の何たるかを解せぬ人が決して少なくないのである。

これには理由も多々あるであらう、例へば建築家養成機關の不備等の如きもその一大原因であらねばなるまい、けれども歸するところこれは全く社會と建築家者の間に互に理解がないからである。

而して建築家達は社會に『建築』なるものを知らしめんと努力して居るのである、本誌發行の目的も主として此所に存するものと思惟す。誠に喜ばしいことである けれども社會の人々に徒らに建築を理解せよ、建築に趣味を有てと口で云つたところで筆に記して見たところでそれは無理である 大都市を歩いて見ても現今の建築で建築らしい建築は殆ど見られぬ今日いくら世人に建築の眞髓を解いたところでそれは蛇足であるラスキンのエジンバラ講演ではないが我輩は敢てそれを云ふのである。

兎に角建築らしい建築を世人に見せてやることが第一である。世人は案外正直なものである。

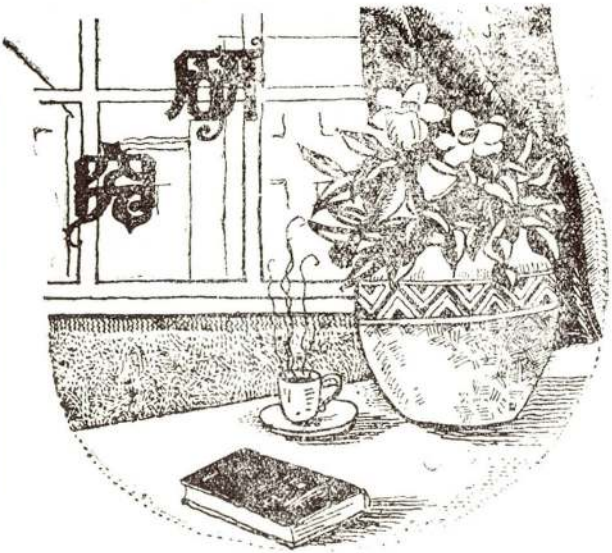
その建築らしい建築を造るには先づ建築家が社會と云ふものを知る必要が確にあると思ふ。教會堂を造るには建築家よりも宣教師の方が上手、お寺を建てるには技師よりも坊さんの方がうまい、貸家の設計は大家さんに限ると云ふことを時々耳にするが何たる皮肉であらう。これ等は畢竟建築家なるものが眞の社會を知らないからである。社會に建築を知らしめるのも結構ではあるが、それより前に先づ建築家に社會の何たるかを教へてやる必要はありはすまいか、敢て我輩はこれを云ひたいのである。

× × ×

大阪源流考

——都市計畫の見地より——

田中清志



一、建　都　三、市區改正
二、開發と整理　四、都市計畫

一、建　都

高津ノ宮——四天王寺建立——長柄豊碕ノ宮——難波ノ宮——大阪の繁榮——戰禍——大阪城修築——再び荒涼

凡そ都市の發生は時代によつて事情を異にして居る、宗教の全盛時代には宗教中心の都市が、又同じ意味から教育我は政治中心の都市が生れ、戰亂時代には軍事本意の都市が起る、而して一たび其中心を失へば亦廢滅するのを自然の勢とする。然し只一つ例外として依然存續し、寧ろ繁榮するものに地位が交通の要衝に當るか又は商工業の適地に位するかのものがある。此例外こそ實に我大阪のそれである。

今日世に冠絶せる大阪發達の發端は、遠く紀元九百七十三年仁德天皇が其即位元年、輕島豊明ノ宮から難波高津ノ宮に遷都されるに及び、政治の

中樞地として萠芽したによる。帝崩御後履仲天皇亦大和盤余ノ稚櫻ノ宮ニ遷都され、僅々八十八年間皇居の地たるの榮を持し、爾後孝德天皇に至る迄三百三十餘年間、舊都たるに止まつたに拘らず其繁榮の滅滅せなかつた所以のものは一に内外交通の要衝に當つて居た爲めである、即ち當時に於ける我國文化の啓發を補導した韓半島との交通は何れも大阪の地に發着し、其接待休養に充てる爲め此所に難波館が建設されて居た、他面其移植文化中我れに至大の影響を與へた佛敎の隆盛は、聖德太子の壯大なる四天王寺の建立（紀元一二五三年）となり、兩々相俟つて大阪の發展を強いたのである。

孝德天皇即位元年十二月都を飛鳥板蓋ノ宮より難波長柄豊碕ノ宮に遷されるに及んで更に其繁榮は灼熱した、即ち天皇は將作ノ大匠荒田井ノ直比羅夫に命じ宮地界標内の居宅墳墓を徙して建てしめられた大内裏は、前後八年を費して成り、宮闕以外に八省百官の官廳を包括し朱雀門をさえ造られた、其輪奐の美と規模の廣大は想像に難くあるまい、然も京師の制を定め一坊に長一人四坊に令一人を置いて戸口を按檢し好非を督察させ、又五十戸を一里とし五戸をして相保らしめられた。

白雉五年十月（紀元一三一四年）天皇崩ぜられ齊明天皇重祚（皇極天皇）せられて、飛鳥板蓋ノ宮に遷都されたが豊碕ノ宮は依然として存し、大阪の地は舊の如く韓唐交通の要路である所から、天武天皇五年（紀元一三三七年）内ノ丹錦下丹比ノ公麻呂を攝津ノ職ノ太夫に任じ、次で此處に羅城を築かせられた、其十一年十二月天皇帝都を飛鳥ノ淨原ノ宮から再び此處に遷さんと企圖されたが朱雀元年正月十四日大藏省より火を失し宮室悉く火燼し、加ふるに其八月崩御あり遷都は遂に行はれず、持統天皇の時藤原ノ宮に遷られ、元明天皇の和銅三年更に彼の莊大なる平城京の造營となつたのである。

其後聖武天皇神龜二年十月（紀元一三八五年）平城京より此地に行幸あり、翌三年十月式部卿從三位藤原宇合を知造難波宮事とし、中納言從三位阿部ノ廣庭を催造宮長官に兼任して難波宮造營の工

事を始め、其後正五位下石川牧夫が之に代つて造難波宮長官となり、天平七年三月其功略成つたが天平十二年十二月(紀元　四〇〇年)突如恭仁京に遷都され、更に紫香樂ノ宮の造營に着手せられた處が又既に成れる難波に遷都の議が起り、天平十六年正月(紀元一四〇四年)恭仁京の高御座及大楯を難波ノ宮に移され、茲に大阪の地は三たび帝都となつたのである。

聖武天皇が十數年の歳月と、莫大な國帑とを費して經營せられた難波ノ宮の規模は相當大なるものであつたが、玉駕長く此處に駐ることなく、天平十七年元旦(紀元一四〇五年)紫香樂ノ宮に幸せられ此地も亦意に滿たず、五月恭仁京に還り更に平城の舊都に還幸せられた。

太阪は帝都として離宮所在地として、又商業交通の要津として、當時が中期繁榮の黄金時代で、天平八の難波大宮は推古式の四天王寺と相對し、兩者を結ぶ一直線の大通りは仁德推古の朝より開發修理を經たもので、依然都市の中心をなし、人口も亦夥しいものであつた。

然るに文永元年(紀元一九二四年)以降寺門の騒亂、南北朝の爭等から、大阪の地は多年兵馬の衢となり、加ふるに天災頻りに起つて、さしもの大都も荒廢の兆を見せたが、後織田信長政權を握る(紀元二二三四年)に至つて、池田信輝をして曩に燒失した大阪城廓を新築させ、又市街の復興に當らせた、天正十一年豊臣秀吉之に代つて治するに及び更に日夜三萬の人夫を使役し三年餘を費して大阪城を完成した。

大阪城は本丸、二の丸、三の丸よりなり、東は大和川、北は大川、西は東横堀川、南は空堀を以つて限り、周圍三里八町にも亘つたと言はれて居る。これに伴つて市街も稍々繁榮を回復したが幾何もなく、豊臣德川の爭は、冬夏の兩役となつて全く戰禍に投じ天王寺の諸伽藍は冬の役に又城内の殿舘は夏の役に、一炬して烏有に歸し市街民衆の兵燹に罹つたもの亦少からず、市民は難を避けて八方に離散し、再び荒涼に向ふの止むなきに當面した。

二、開發と整理

松平忠明の市街整理――寺院墓地の廢合移轉　四天王寺の再建――諸運河の開鑿――河村義通の治水工事――元祿年間の人口――天變地異の續出――天保改革と大阪繁榮策――明治維新

元和元年（紀元二二七五）五月八日大阪城落城し豊臣氏亡ぶや其翌日德川家康は、兩度の役に殊勳のあつた松平忠明を、擢でゝ大阪城主とした、即ち忠明は戰後の第一施設として、市街の整理開發を敢行したのである、卽ち本丸二の丸を以て城地に當て、三の丸は之を壞平して新市街とした。

二の丸の外廓東縮堀川及空堀に至る間の面積は多少の空地を保存するも尙百數十町歩の廣濶さで天滿船場の入口を形すも不可、又自然の充實を待つも容易でなく、茲に於て忠明は伏見町人の移住を求めた處、二十三町卒先して之を諾し爾後合計八十餘町に及び　其一部である伏見京町の町人は遠く下船場即ち今日の京町堀附近に迄横溢した、從來伏見は大阪京師間の要路に當り、太閤は此處に聚樂を制し、家康はこれによつて大阪に對したが、兩者一德川氏の手に歸して後の伏見の價値は頻に減じ、幕府は其城代をさえ廢した爲め　伏見町民の大阪移住は彼我共に利とする所だつたのである。

これらの移住町民は土地開發の目的で、元和三年京町堀川（延長九町五十九間幅上流十四間下流十九間）及江戸堀川（延長十一町四十一間幅上流十三間下流十八間）を開鑿した。

又別に戰前より施工して居た南堀川の開設も、忠明之を斡旋し安井九兵衞、平野藤治の兩名によつて元和三年十一月竣成した、これが今日の道頓堀川（延長二十二町十一間幅上流二十間下流三十四間）で、發起者の一人安井道頓の戰死を憐れみて忠明が命名したものである。

更に寺院墓地の移轉廢合も亦元和初年行はれたものである、卽ち一向宗の末寺以外で市中及近接村落に散在して居た諸寺院を、當時の市外小橋村東西高津村及天滿村の三ケ所に集め、墓地は阿波

座、津村、渡邊、三津寺、上難波等にあつたものを下難波の千日に合し上町にあつたものを、小橋村に又天滿の町家に介在して居たものを葭原村、濱寺、梅田村に移した。

斯うして將來に於ける大阪の發展を豫測し長經路へ當る防害物を邊隅に徙した忠明は、更に元和二年川崎に東照宮社を建て、例年四月十七日大祭を行つて市民の豊臣氏追慕の念を忘れさせやうと企畫した。

一方幕府は戰禍を蒙つた四天王寺の再建を企て寺領を與へ、片桐貞隆、赤井忠泰、甲斐庄正房、小澤休務をこれが修造奉行として、元和四年九月釿始の式を執行したが、規模頗る大であつた爲め幕府の威望と財力を以てしても尙滿五ヶ年を費したのである。

其他生國魂神社に社領を寄進し、津村難波兩院を修造せしめし等、敬神崇佛以外に民心の融和に努力した。

松平忠明の市街整理は實に民本的で、先づ市中の富豪にして町人の信望ある者を選み、之を元締衆として之に町割を爲さしめ、元和二年二月町割完成後更に水帳(土地臺帳)を制定し、地子銀(地租)を徵收させた、今當時の水帳を檢するに各戶の奥行何れも二十間なるを以て之より推せば街衢の奥行は四十間を定制として居たやうである。

地子銀の徵收は元締衆之に當り滯納者ある時は之が代納したと言はれて居る、又家屋敷の賣買に際し、賣買價格の四十分一の帳切銀を收めしめたことは豊臣時代同樣である。

かく大阪の開發と整理に偉大なる治績を揚げ、大阪後年の繁榮を胚胎させた松平忠明が、此地に在ること滿五年に過ぎずして、大和郡山に封ぜられた(元和五年)ことは恨事であるが、之に代つて城代となつた内藤信正(紀元二二七九年)及阿部正次紀元二二八六年)も亦市街の整理開發には少なからぬ功績を殘した、四貫島、九條島の開發と言ひ、海部堀川、長堀川、立賣堀川、薩摩堀川の開設と言ひ重要工事の竣成したものが頗る多い。

寺島(今の松島勘助島(今の三軒屋)の開發、道頓堀川の沿岸家屋建築の奬勵等も此時代のことで

ある。

道路及川筋に關する取締令が發布されたのは慶安二年（紀元二三〇九年）四月のものを以て最初とする、これには兩側の町家より『おだれ』を出して往來を狹むることを禁じ、又下水道を浚渫せしめ塵芥の放棄を禁じ　惡道路は修繕を加へしめ、川筋沿岸の專用を禁じ等詳細迄が規定せられて居る又明屋敷或は崩家の所有者で家屋を建築せざるものは之を沒收して、他に附與するの御觸さへあつたやうである、其後交通の激增、商業の殷賑等に伴つてこれらの取締も亦次第に細微に入つたことは勿論である。

德川幕府治世年中大阪開發の大事業は、前記以外に河村義通に委して成れる淀川の治水工事（紀元　三四四年）堂島川、曾根崎川の浚渫、大和川の治水工事（紀元二三四六年　神崎川、中津川、逆川等の治水事業及之に伴ひ造成された堂島、安治川新地の開發等亦特筆せねばならぬものがある。

元祿十一年　紀元二三五八年）再び淀川の治水工事が始められるに及んで堀江、富島、古川、難波島、川口新田等續々開發されて、夫々町割が定められたのである。

更に寶永元年（紀元二三六四年）には從來屢々水害に惱されて居た大和川の附替工事が着手されて居る。

斯くして大阪の膨脹發展は日に進み元祿二年（紀元二三四九年）の人口三十三萬二百四十四人、同十二年には三十六萬四千百五十四人、寶永六年（紀元二三六九年）には三十八萬千六百二十六人を擁するに到つたのである。從つて道路家屋の取締等も必要を生じ、元祿十年には『一町内に於ける家並おだれの出入、地形の高低は街衢の美觀を損じ、併せて交通の不便を來すこと少からず、是を以て新築又は模樣替工事地形普請は一々町奉行所に届出で地方役の指揮を受くべし』の如き御觸さへ見え、大阪は量に於ても質に於ても着實な發展を示して居る。

然るに享保元年（紀元二三七六年）七月四日夜曾根崎より發した火は、堂島、福島を焦土と化せしめ、更に享保九年三月二十一日より二十二日に亘

る大火は、全市の三分の二を悉く灰燼に歸し、人々をしてその再興を疑はしめた、然し返て屋上制限及火除地の制を定めしめ、而して如何に急速なる復興を爲したかは大火前五年即ち享保四年（紀元二三七九年）の人口三十七萬四千四百九十八人に對して、大火後五年即ち享保十四年の人口三十八萬五千四百三十一人を算する事實が言般の消息を物語る所である。

其後或は寛政三年（紀元二四五一年）の大火、享和二年（紀元二四六二年）文化元年及文化四年（紀元二四六七年）の大洪水、天保五年天保七年（紀元二四九六年）の大火、天保八年の大騒亂、安政元年（紀元二五一四年）の地震及海溢等、幾度か大天變地異に遭遇し消長を繰返したが、更に幕末に到つて國力充實、下民安堵を旨とし之が爲めには一時都市の繁榮を殺ぐとも可なりとする所謂天保改革が斷行せられたことより、人口は天保十三年（紀元二五〇二年）の三十五萬を最高とし、翌十四年には三十三萬となり、嘉永二年（紀元二五〇九年）には三十二萬に、同四年には三十一萬に減じ以て天政二年に至つた。

茲に於て町奉行佐々木顯發、川村修就は市中繁榮、人口復古の策を講じ城代土屋寅直より幕府に之を奏達した、乃ち幕府は「大阪表の義は海内咽喉の大都會にて、此上衰微致候に就ては一體の御差支にも可相成に付き、諸事奉行と談合つて宜しきに從ふべし」との指令を發し、茲に積極的發展策が執られるに至つたのである。

幾何もなふ世は明治維新となり、大阪の地は鳥羽伏見の戰に關聯して、暴民頻りに横行し遂には大阪城の燒失となりて、市中は鼎の沸くが如く、其混亂は名狀すべからざるものがあつた、然し明治元年征討大將軍嘉彰親王大阪に低られるに至つて漸く平定し、一方大政奉還、辭官納地の事は滯りなく行はれ、多望多幸なる明治新政の大阪として發えたのである。

三、市區改正

大阪府區部會の市區改正計畫——市域擴大と市區改正計畫——都市改良計畫調査會——東

京市區改正條例の準用――大阪市區改正設計

街路の部認可

德川幕府倒れて維新の鴻業なるや、明治元年正月太政官令して大阪鎭臺を、舊西町奉行所に置き（次いで大阪裁判所と改稱しのち改めて大阪府とし明治七年七月江ノ子島に移された）明治二年五月從來の呼稱三鄕の名を廢し、東西南北の四大組を設け、大組を分ちて町組とし、東大組二十六番組二百六十四町、西大組十四番組百五十二町、南大組八番組八十八町、北大組十五番組百二十八町合計六十二番組六百三十二町とした。

四大組の制が定められて明治三年及四年の二回町組の改正を行つたが、未だ其宜しきを得ずとして明治五年三月十七日更にゝが改正を爲され、又其後數回些少の變動を見たが現今所謂舊市と稱する大部分の町名及其區域は概して此時に定められたものである。

明治十一年七月郡區町村編制法の發布があり、翌十二年大小組の制を廢して從來の四大組を區とし、四區町數合計五百二十三町となつた。明治二十二年四月一日前年發布された市町村制を實施されるに至つたが、東京、京都、大阪の三市には市制特例が設けられ、明治三十一年九月三十日其廢止せらるゝに及び、始めて市役所を開廳し今日に到つて居る。

これより先東京市が市區改正條例の發布を請ひ將來に備へる大計を樹立するに鑑み、大阪府區部會に於ても其實現を策し　明治十九年十二月十日區部會議長より、大阪市區改正計畫を請ふの建議を時の大阪府知事に提出し、翌二十年三月市區改正計畫の會議を開き、屢々審議の結果、道路橋梁の新設及擴張、工場の隔離、地區の制定　花街の整理等を議定し、就中道路橋梁に付ては具體案を作製し、幅員十五間乃至四間の路線二十九を選び逐次之が實施のことを議決した。然しその實現を見得なかつたのは計畫が餘りに當時の財政狀態と適合せなかつたにもよるであらうが、其出發點が彼の巴里邊りの美觀壯麗に刺戟され、之を模倣せうとしたものに過ぎずして、實際上の必要に準據して居なかつたものとも認められる。

其後大阪四區の町數は久しく異動せなかつたが明治三十年四月隣接の町村、即ち西成郡に於ては西濱町、難波村、九條村、三軒屋村、天保町、北野村、曾根崎村、上福島村、下福島村、川南村、川北村、傳法村、木津村、今宮村、川崎村、野田村、豊崎村の全部若くは一部、東成郡に於ては東平野町、清堀村、玉造町、西高津村、野田村、天王寺村、生野村、中本村、鶴橋村、鯰江村、都島村の全部若くは一部を市部に編入し、元の市部を舊市と呼び、新編入部を新市と稱し、町數合計五百九十七となつて從來の四區の面積〇、九九平方里は一躍して三、六二平方里となり、人口も明治二十九年末五十萬四千二百二十六人であつたものが三十年末七十五萬八千二百八十五人に激增した

而して此擴大なる市域に、健全なる發達を促進すべく幹線街路系統の確立は刻下の急務とせられ工學博士山口半六氏を聘して之を計畫なさしめたが之も亦畫餅に止まつた。

然し都市施設としての上水道設備は、既に明治十九年エッチ、バーア氏によつて計畫され、明治三十四年より三ヶ年繼續事業として實施し、のち發展に順應して第二期第三期第四期の工事を完成して居り、下水道も亦明治二十七年十二月より上水道附帶工事として、舊市に之が敷設を見、明治四十四年には十ヶ年繼續事業として、全市に之を普及せしむべく工事に着手して居る、又明治初年以來數次企圖されて居た大阪港の修築も、明治二十五年十二月初めて大阪築港測量事務所を置いて調査の歩を進め、明治二十九年四月計畫成り三十年十月より工を起して居る、更に市街電車の敷設は前記築港工事に伴つて、九條築港間を明治三十五年起工し、翌年八月竣工、九月十二日より運輸營業を開始し、續いて明治三十九年には第二期工事に着手し、大正五年十二月には第三期工事を竣成した。

公園は明治二十三年中ノ島に三十六年天王寺に公園設立のことが議決せられ、何れも四十二年竣成開園して居るが大正四年更に御大典紀念事業として小公園設置のことを決議し、大小十二ヶ所開園して居る。其他河川の改修、運河、市場、墓地

火葬場、塵芥の處理等、所謂都市計畫事業は姑息的ながらも夫々實施を見て居るのである。

又建築物の制限保護に關する規定も、明治四十二年八月十八日例の北區大火後直ちに大阪府令を以て公布せられて居る。

然るに之を統一的組織的に計畫する近世都市計畫の思想が高調されるに及んで、大正六年四月大阪市に都市改良計畫調査會が設置せられ、助役關一氏を委員長とし工學博士大藤高彥氏、片岡安氏外關係市吏員等九名の委員を任命し、都市計畫に關する基本調査要綱及街路計畫を研究審議の上其一部を決定發表し、一方當局に東京市區改正條例の準用を請ふたのである。

乃ち東京市區改正條例は大正七年四月其一部を改正し、其六月より京都市及大阪市に準用せられるに至つた。

於茲大阪市は市區改正部の職制を設け、工學博士杉山清次郎氏を部長とし、後工學博士直木倫太郎氏之に代つて街路系統、運河、公園、高速度交通機關の系統等の市區改正計畫を立案し、交通運輸の部中街路の新設及擴張計畫を内務大臣に上申し、内務大臣は之を既に組織なれる大阪市區改正委員會（内務次官小橋一太氏を委員長とし委員三十二名）に諮り、其議決を經て大正八年十二月二十三日内閣の認可を受け、大阪市長をして公告せしめた、之れ即ち現在都市計畫事業路線と稱する廣路二十四間道路以下四十七線の街路網計畫である、又其際同時に議定せられたものに鐵道省所管の大阪驛擴張計畫がある。

斯くして都市としての大阪は、近代的發育を培養されることゝなつたのである。

四、都市計畫

都市計畫法及市街地建築物法の發布――都市區域の決定――街路の新設及擴張事業認可――防火地區の指定――自餘の大綱確立

近世都市計畫は大正八年四月四日發布せられた都市計畫法）大正九年一月一日より施行）及市街地建築物法（大正九年十二月一日より施行）を以て開花したものとせねばならぬ。これらは大正七年五

月内務省に設置せられた都市計畫調査會に於て調査審議し、第四十一回帝國議會の協賛を經たものである、これに伴ふ都市計畫委員會官制も亦大正八年十一月二十七日勅令を以て公布せられ、同じく大正九年一月一日より實施された。

仍ち大阪府に都市計畫大阪地方委員會が組織設置せられ、又別に府の機關として内務部に屬する都市計畫課を新設した、大阪市は從來の市區改正部を都市計畫部と改稱し、兩々相援けて大阪百年の大計樹立に猛進しつゝ現在に及ぶ。

今都市計畫大阪地方委員會設置以來の主要なる決定事項を擧ぐれば左の如くである。

一、街路の新設及擴張の事業竝年度割

大正十年三月十九日認可

一、大阪都市計畫區域の決定

大正十一年四月二十四日認可

一、道路新設擴築による受益者負擔の規定

一、路面改良に據る受益者負擔の規定

大正十一年八月七日定めらる

一、受益者負擔に關する區劃及金額

大正十二年八月二十三日定めらる

一、下水道事業竝其年度割

大正十一年六月三日認可

一、防火地區(大正十二年十月一日より施行)

大正十二年七月十三日指定

一、下水道事業の受益者負擔の規定

大正十二年七月三十一日定めらる

一、第二期下水道專業竝其年度割

大正十三年五月二十九日認可

卽ち都市計畫の第一着手たる都市計畫區域は決定し、焦眉の急務たる街路の新設及擴張の事業は認可せられ、都市の主たる災害を減少せしむる爲めの防火地區も些少ながら指定を見、從來施工中の下水道事業は都市計畫事業に移管し、之等事業遂行の主要な財源たる受益者負擔の規定も制定せられたのである、又從來其施行が大阪市域内に限られて居た、市街地建築物法を大正十三年四月一日より都市計畫區域全部に適用された。

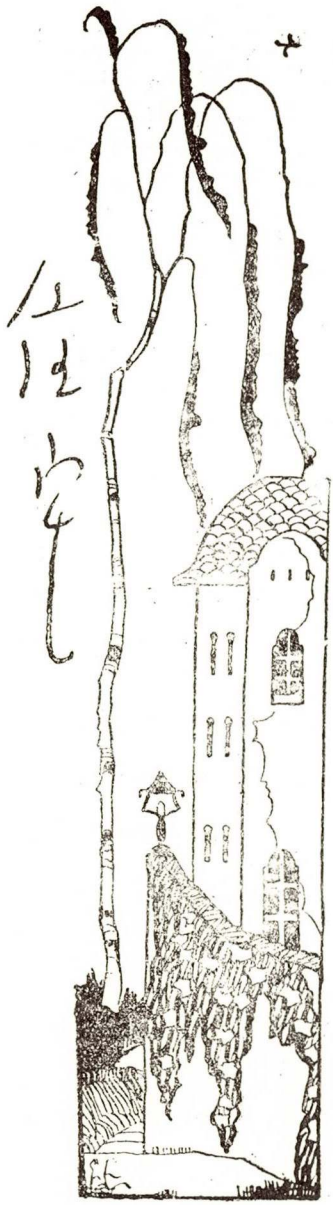
更に未定とは雖も其大綱の確立せるものに、郊外に向ふ十條の大放射路線計畫と之等を連結する

環狀路線數十條があり、近世都市計畫の大眼目と言はれて居る商業、工構、住居の各地域設定があり、市內補助道路の計畫等がある。

尙前記各事業に關聯し又は策應する運河計畫、高速度交通機關計畫、公園系統、大水道計畫、下水處理計畫、塵芥處分計畫等も着々調査攻究を進められ、愈々健實なる都市計畫の結實を想はせつゝあるのである。（了）

大阪と都市計畫の概要を綴る考へで稿を起したものが、ついさした關係を持たぬ方面に迄興味が走り、今稿了後讀み返して見ると前半に於て削除したい部分を多數發見する、後半を簡略に取り扱つたのは埋合せの意味からであるが近來のことで一般に知悉せられて居る事柄が多い故にでもある、圖面等も挿入したく集めて見たが餘り大部となるので省略した何分僅かの時間に草したものであるから誤謬と獨斷あれば乞ふ讀者叱正されむことを。（一九二四、一〇、一八）

新しき俤積みあり初寒な



主として婦人の立場より觀たる住宅

葛野壯一郎

最近の或英國の建築雜誌に『婦人と住宅（ウーメンアンドハウシング）』と題して、極めて短い評論が出て居た、頗る簡單なものではあるが、英吉利の婦人對住宅の實相がはつきり現はれて居て、實は私は大變面白く見た譯である、今夕はお話の前提として　先づ其の短い評論を御紹介したいと思ふ、それは斯うである。

最近ミス、マーガレット、ボンドフイールド――

ミストル、エッチ・ジー・ウエルス、其他知名の人達が、英國の婦人が住宅に對して有つ興味（インテレスト）が甚だ薄いと云ふことをば驚告して居る　それは洵に結構な主張であるけれども、それ等の人達の勢力が全英國の婦人をして住宅設計の上に相當な注意を拂はせるには餘りに微力である、家庭に於ける一員（メンバー）としての英國婦人の住宅に對する

注意は、主に裝飾的方面及び流行的方面の二つに集中され、其の他のことを餘り考へない、又何か仕事を有つて、社會的に働いて居る婦人の團體には斯う云ふ意見を主張する人がある、それは英國の男の建築家は住宅のことに付ては何も知らない、全くイグノーラントの馬鹿者（フール）である――斯樣に英國の知識階級の一部の婦人は男子の建築家を罵倒して居る、さう云ふ人達の意見に依ると、英吉利の男の建築家と云ふものは母もなければ、妻も無く、或は又愛人をも有せず終日を全く家の外にばかり暮して居るものゝやうに考へられる、そこでさう云ふ人達が住宅に對して建築家に教へんとする實際的意見はどう云ふものであるか――それを煎じ詰めボイルして見ると、畢竟住宅の有りと凡ゆる場所に凡ゆる種類の物入　小さな戸棚を無暗矢鱈に取附けよと云ふことに過ぎない、偖てさうした結果どうであらうか――我々から考へて見ると、燒いてしまふか、壞してしまふか、どつちかに處分した方が餘程悧巧だと考へられるやうな物が其の出來上つた戸棚の中に、ぎつしり一ぱい詰め込まれると云ふ結果になるのである、唯こゝに注意すべきは、一部家庭に在る婦人の眞面目な批評（クリティシズム）である。それはどうであるか――一二の例を擧げて見ると、何故、私共の臺所では、毎日使ふ料理釜であるとか、ストーブであるとか、流しであるとか、さう云つたものをば、窮屈に跼んで使はなければならぬか――高さが惡い、大變に不便だ――又何故、私共の家には、格子を持て行つて踏臺にするか、或は梯子を架けるか、何とかしなければ、開けることの出來ないやうな高い窓が附て居るのか――婦人がヘルキュルスの樣に非常に強い者でない限りは、必ず落つこつり、怪我をしなければならぬ――又不思議なことには、英國の婦人は總て同じ身長を有つて居るもの丶如く考へられて居ると見えて、何處の家へ行つても、鍵孔（キーホール）であるとか、挿込鉦（ラッチ）であるとか、さう云つたものが皆高過ぎたり、低過ぎたりして恰うど頃合の高さといふのが無い――又私共の臺所の瓦斯の料理臺が薄

暗い、陰氣な、大變不便な隅の方に置かれて居るのは、一体どうしたことであらう、私共の臺所には唯一の窓より開けてない、そして奥の深い戸棚であるとか、或は階段下の物置であるとか云ふやうな所にも少しも照明のことは考へられて居ない、皆非常に暗くて、物の出し入れが大變不便だ——又フォールディング、ドアーズ（折疊みの出來る戸）の非常に便利なことは誰も能く承知して居る、然るに私共の共同住宅（フラット）であるとか、或は又小住宅に於ては少しもさう云ふ調法なものが應用されてないのは、どう云ふものであるか——其の中でも最も私共の了解に苦むのは、英吉利人は一人の赤ん坊（それは乳母車を必要とする）も、一人の男の子（それは自轉車を欲しがる）も、亦一匹の犬（それは犬小屋を必要とする）も、全く有たないものと考へて居るやうに、私共の住宅が見えることである是だけのことが、婦人と住宅（ウーメンアンドハウシング）として書かれてある、洵に簡單な評論であるが、之を能く味ふと私は現代の英吉利に於ける婦人對住宅の實相が極めてはつきり見えるやうに感ずる、是れによると全体の英國の婦人は私共が日本で想像して居るやうに、住宅に對して深く注意をして居るかと云ふと、實はさうでない、英國の婦人が住宅に付ての興味（インテレスト）が甚だ薄い、そして世の中の識者が其のことに付て色々な警告を與へるけれども、一向利き目が無い、家庭婦人としての英國婦人の趣味は家と云ふことに對しても、專ら其の裝飾的方面（オーナメンタル）及び流行的（フーショナブル）方面にのみ集中されて、もつと他に考へなければならぬ所の、經濟的方面であるとか、或は又衛生的方面であるとか、さう云つた重要な方面の考察は一向閑却されて居るようである、壁紙がどうであるとか、敷物がどんなのが可いとか家具はどう云ふ形に、どう置けば可いとか、或は其の他額の掛け方や花の活け方はどうとか、さう云つた裝飾的方面に興味（インテレスト）を有つと云ふことも決して悪いことではない、必要なことではあるが　併しそれだけが住宅に對する全部ではない、又流行的方面に付て、此の頃はかう云つたものが流行るあゝ云つたものが流行ると云つて、其の流行を追

ふと云ふやうなことだけに非常に注意をして、それ以外のことには餘り注意をしない。

こゝで一寸餘談に亘るやうであるが、住宅の流行(フラッション)と云ふことに付て二三御參考までにお話をしたいと思ふ——衣裳に流行があるやうに、住宅にも亦流行がある、其の最も著しいのは亞米利加の住宅であつて、亞米利加の家には非常な流行がある其の二三の例を擧げるならば、此の頃亞米利加の住宅のプランを見ると、多くの家にはスリーピング、ポーチと云ふものが附して居る、それは二階の一部に吹抜きのヴエランダーやうのものを造つて、或シーズンは其處で寢やうと云ふのであるが元來亞米利加の住宅にそんなものがあつたのではない、最近の發明である、由來亞米利加人程流行の追隨者はない、非常に流行の盛な國であつて、此の點に於ては恐らく世界一であらう、誰か一人此のスリーピング、ポーチと云ふものを發明してそれが家庭向の雜誌か何かで宣傳されると、忽ち全國に行渡つて、何處でも彼處でも此のスリーピング、ポーチが附かないと住宅でばないと考へられる程流行する、又西洋住宅として寢室には衣裳戸棚(ドロープ)を置附けにあるのが普通であるが、どうも置附けにしたものは、埃りも溜れば、入いる物も少い、是は押入のやうなものを拵えて、其の中に仕舞ふやうにすれば、埃りも溜らず、澤山物が入つて可からうと云ふやうなことが何處かで發明されると直ぐそれが流行り出す、或は又パントリー(配膳室と云ふか)の無い臺所(キッチン)——御承知の通り、英吉利風の臺所と亞米利加風の臺所とは多少其の構造を異にして居て、亞米利加風の臺所には必ず食堂と臺所の中間に小さなパントリーがある、所が、さう云つたものを此の間に置くのは、非常に不便だいつそパントリーを除いてしまつて、臺所と食堂を一つにした方が餘程手輕で可からうと云ふので、さう云つたプランが考へられ、それが行はれ始めると、又直ぐあれも是も皆パントリーを除いてしまふ、又住宅のプランを御覽になると、必ずリヴィング、ルームを云ふのがある、是れも新らしい話である、やれ應接室、やれ書齋、やれ居間であると云ふ風に、小さな家に澤山の仕切を

設けて、左なきだに狭い家を尚ほ狭くして使ふのは不便である、いつそ廣い居間（リヴィングルーム）にして、それを色々な目的に使つた方が可い――さう云ふことが何處かで宣傳されると、直ぐ皆それに倣つて、亞米利加の住宅が總てソヴィング、ルーム（居室）化して、一つの大きな部屋の住居になつてしまふ或はサン、ルーム（日光室とでも云ふか）と云つて南東又は南西に向ひたやうな日當りの可い所で、周圍を窓で圍んだ温室樣の部屋を設け、其處で十分に日光を受けると、非常に氣持が快く、衛生上大變良いと云つたやうな宣傳が行はれると、忽ち又亞米利加の何處の家へ行つても、サン、ルームが附て居るやうになる、斯う云つた種類のものは皆近年の亞米利加の住宅に於ける一つの流行である、尚ほ最も新しいことを云へば、例へば照明の如きものでも、天井から一々電燈を吊下げるのは不經濟である書物を讀むのならば、デスクの上、食事をするならば、食卓の上、お客と話をするならば、茶卓の上と云つたやうな、それ〳〵必要な場所に照明があれば可い、それには上から下りる電燈よりも、臺ランプが可い、住宅の照明には臺ランプを以て理想とする、斯う云つた意見が何處かに現はれると、忽ち亞米利加の多くの住宅が中心から照明を取る電燈を廢めて、臺ランプに變つて來る、是が極く最近の一つの傾向である、又最も新しいのは、ワン、ルーム、アパートメント（唯一つの部屋より無い共同住宅）と云つたやうなものが當春あたり紐育に一つ出來た、それは寢室も別に設けてない、唯一つの部屋で、晝間は色々の目的に使ふシツティング、ルームとなり、夜は、機械的裝置で小さな折疊みの寢床だ極めて手輕に出て來るやうになつて居て、それが寢室になる、又小さな臺所（キチエン）があると、簡單なランチョンとか朝の一寸した食事位は其處で調理が出來る、斯う云ふ極めて手輕なアパートメントが出來て居るが、何れ又さう云ふものが彼方此方に建築されることだらうと思ふ。

さう云ふ風に住宅にも色々流行があるけれども英吉利の婦人はどつちかと云へば、保守的で、餘りさう云ふた流行を追ふ傾向はなからうと私は想

像して居たが、どうも前述の小さな評論なんかを見ると英吉利の婦人にも矢張り住宅に付てさう云ふ流行を追はんとする傾向が多分にあるらしい、又其の何等か自分の仕事を有つて社會的に働いて居る或一部の知識階級の婦人の意見では、英國の男子の建築家は全然無能であるとして、非常に鼻息が荒く、男子の建築家をして顔色なからしむるやうな大氣焰であるが、併しさうゝふ人達の住宅に對する實際の意見はどうであるかと云ふと是亦唯三角とか八角とか色々樣々な恰好の戸棚を無暗矢鱈とくつ付ければ大變便利だと云ふやうな改良意見で、餘り感心されたものではない、併ながら第三の家庭に在つて實際家庭の仕事に當つて居る婦人としての住宅に對する眞面目な批評即ち先に列擧したやうに、流しの高さが適當でないとか或は非常に高い所に窓があつて、不便だとか、或は又臺所が暗くて困るとかいふ種類のもので有るさう云つた樣々な注意に付ては、我々が一寸考へて見ると、流しが一寸高からうが、低からうが、そんなことは、どつちでも可さゝうに思はれるのであるが、併ながら主に家庭に在つて、朝も晝も晩も三度々々其の流しを使ふ婦人の立場から云へば、それが一寸高いのと、一寸低いのとは重要な問題にならうと考へる——非常に上の方に窓が附て居ると困ると云つても、一寸椅子か何かを持て行つて開ければ可いぢやないかと云ふやうなものであるけれども、併し男の手の無い家庭で、さう云つた窓が附て居ても、それが可なり必要なる窓だとすれば、それは二六時中絶えざる一つの煩ひに相違ない、又男女が一軒の家を有つて共同生活をすれば、子供も生れる、其の子供にも男の子もあれば、女の子もある、犬も飼ふだらう、併し其の犬小屋の置所が無い、又自轉車を買つて來ても、自轉車を仕舞ふ場所が無い、或は乳母車を買つたとしても、其置場が無い、已むを得ず不体裁だがそれ等のものを玄關先へ置いておくと云ふやうなことになる——是では困る、それ等は洵に簡單なことであるが、一家の整理をする上に於て、中等程度の家庭婦人の立場から建築上當然の要求だらうと思はれる。

斯様な事情が前述の英國の一建築雜誌の小さな記事から想像されるのであるが、偖て日本の婦人對住宅の實相はどうであらうか——日本婦人の立場から見て、住宅に對してどんな意見があるであらうか——恰度先に述べた所と日本の婦人の實情は甚だ相似たるものがあると私は考へる、一般に日本の婦人は住宅に對する興味が甚だ薄い、殆ど興味をお有ちにならないやうに觀察される、又稀に興味を有たれる方があつたとしても、矢張り前述のやうに、其の興味が主として趣味的方面に偏し、成べく家を綺麗にしやう、さう云つた裝飾的方面に限られて居るやうである、朝から晩まで、閑さへあれば、はた〳〵掃除ばかりして暮して居る婦人が隨分ある、綺麗にするのは、結構なことである、併ながら家庭の婦人として、朝から晩まで掃除をして居つたからと云つて、どうもそればかりぢや實は困る、或は又無暗矢鱈と家の中を飾り立てゝ、恰も家を玩具のやうに心得て居られても困る、恰度美しく白粉を塗り、立派な衣裳を着けて、外出して、他に綺麗に見せやうと云つたやうな心持が住宅の上に現はれる、そんな風では甚だ面白くない、それだけでは困る、矢張り日本の現狀に鑑み、住宅に付ては大に考慮を要する重要な部分が澤山あることをお考へ願はなければならぬ、又殊に婦人は流行の追隨者であつて、どうも流行に追はれる傾向があるやうである、何處かで何か紫の色が流行れば、忽ち痩せたのも肥つたのも身長の高いのも、低いのも、凡ゆる婦人が皆同じやうに紫色のものを盛に使用される、日本の婦人も一行と云ふことに付てはなか〳〵鋭敏な方だと私は觀察する、今日の住宅に對する流行は果してどうであるか——此の點に付ては米國の婦人のやうであるまいが、併し最近は日本の住宅にも隨分色々な流行が出て來て居る、青い瓦を使つたり朱い瓦を使つたりする西洋風の家や、或は西洋風を眞似た家が隨分彼方此方に出來て居るし、又日本風の家にしても色々新しい考案が運らされて、さう云つたものが一つの流行とならんとして居る從て婦人の注意がさう云ふ方面に向けられて居るといふことも隨分あり得ることだらうと考へる、

特に知識階級であり、又社會的に何かして居る婦人達の住宅に對する意見と云つたやうなものも、日本に於ても相當あることゝ思ふ、私はツイ忙しいものであるから、さう云ふ御意見を詳しく調べて居る譯ではないが、其の二三のものを拜見しても、さう云つた意見の大体を知ることが出來ると思ふ、併ながらさう云ふ意見の多くの主張者は實は住宅其のものとは餘り緣が無い——と云ふ譯でもないが、實際日々家の中で働いて、色々なことを經驗されて居る家庭婦人としての意見ではないやうである、殆ど一日の中に一度も臺所を窺いても見ないやうな奥さん方から臺所の改良意見を伺つても、それは何の權威にもならない、未だ曾て一人の赤ん坊すら產んだことのない若いお嬢さんから子供部屋の設計を示されても、それは餘りに潛越であると、どうも住宅に關する婦人の意見としては矢張り始終住宅の中に在つて、自から家庭の仕事に專ら携つて居る所謂家庭婦人の立場から見た實際的意見でないと、私は本當のものではないと考へる先に述べたやうに、英吉利の婦人は盛に物置を欲しがつて何でも彼でも物置を附ければ家は便利なものゝやうに考へて居るが、さう云つた人が矢張り日本にも多い、即ち日本の婦人は頻に押入を欲しがる、無暗矢鱈と押入があれば、御機嫌が好い、私共が住宅のプランを作るのに、婦人の御機嫌に副ふやうなプランを作るのは、實は甚だ簡單なことである、成べく押入を多く附けて置きさへすれば、それは必ず奥さんのお氣に入るは重寶だ、大變能く出來たと仰しやるに違ひない、偖て其の押入が出來て、其處に何が詰め込まれて居るか——矢張り英吉利の建築家が云つて居るやうに、燒いてしまふか、捨てゝしまつた方が可いやうな物がざつしり一ぱい詰め込まれる、煙草の空箱でも、着物の破れたものでも、何でも皆押入に投込まれる、實に遺憾であるが、其の點に於ては日本に於ても首肯せざるを得ない、若し諸君にお疑があれば、お歸りになつて、一度押入をお調べになつたら可からう——私は此のことを讀んで、是は婦人の通有性であると感じた、又眞面目な家庭の婦人として、實際住宅の中に在つて、

日々働いて居られる婦人方の眞面目な批評（クリティシズム）――

さう云つたやうなものも日本にも澤山ある筈である、殊に日本の住宅にはそれが多くなくちやならぬ、我々の家の臺所は皆暗い、明るい心持の好い臺所を有つて居ると云ふ住宅は恐らくあるまい、是だけ山お集りになつて居るが、お歸りになつて、臺所を一度お見直しになつたら可からう、皆薄暗く、じめ〳〵して居る、さう云つた所では愉快な仕事は出來ない、住宅としては臺所の仕事が最も愉快に、如何にも手際好く運べると云ふことを第一の條件として考へたい、總て仕事の能率が擧がるのには先づ明るいと云ふことが必要である。臺所の改良意見としては何は偖て措き光線が十分に入つて、明るい愉快な臺所にすると云ふことをば第一の條件としたいと思ふが、不幸にして日本の臺所は一向明りの注意などはしてない、又其の設備されたものゝ高さ（窓や流しなどの）も實に區々まち〳〵で、殆ど地面に這ひ蹲つたやうな風をして仕事をして居るのが隨分ある、臺所の物の高さなどにも能く注意して、仕事が圓滑に運べるやうにすると云ふことは、私共男の立場からは見ては、大したことではないやうに思はれるが、終生臺所でお働きになる婦人の立場としては、此の臺所の問題は私は生涯の一番大切な問題でないかと思ふ、又物置や戸棚、或は押入のやうな所の明りが不十分である、何處の家でもさうでせう、押入の中が非常に暗い、隅の方には何があるか分らない、懐中電燈か何かを持て來て、隅の方を捜さなければならぬ、さう云つた所が隨分多い、矢張り押入のやうな所にも相當な明りがあつて、何が何處にあつて何がどう刻んで居るかと云ふことが明に分らなければ不便である、臺所の床に上げ板と云ふやうなものがあつて、一つの物を洗ふにも上つたり下りたりしなければならぬ、日本の家庭婦人は一日の中も何遍其處を上つたり、下りたりして居るか分らない、從て能く粗相が出來る私は女中が粗相をすると、奥さんが無暗と叱り付けるのを隨分見受けるが、あれは女中が惡いのではない、寧ろ臺所が惡いので、どうも日本のやうな上つたり下りたりする臺所では粗相があり勝で

ある、是は婦人の立場より見て、隨分考へなければならぬことだらうと思ふ、或は又先にも一寸述べたことであるが、乳母車や自轉車の置場の問題も、既に子供があれば、是非必要なものであつて又相當始末に困るものだらうと思ふ、玄關先でも何處へでも置いて置けば可いと云ふものではないそれでは困る　是は直接奥様方が感ぜられる問題であらうと思ふ。

兎に角住宅と云ふことに對しては、殊に日本のやうな國情では、婦人の立場から見て、色々な御註文が是非出なければならぬし、又實際それは澤山あることゝ私は考へて居る、併しながら不幸にして、私共が直接さう云つたやうな方々に接する機會が少いから、一々御意見を伺ふことも出來ない、どうか御婦人の方から進んで、さう云ふ實際的御經驗の上から出た御意見を私共にお示しを願ひたいと思ふ、婦人問題に付て最も革新的意見の所有者であるエレン・ケイ女史ですら、婦人の本領は家庭にある、如何に婦人が怜悧で、平和會議に出て、喋々と平和論を唱へるとしても、若し其の婦人の家庭が能く治らず、亂れて居るならば、それは婦人としての價値は全く零である、斯様に述べて居る、私も亦婦人の本領は何處までも家庭にあると信じて居る、男は外に働き、女は内に守り、内外相呼應して、こゝに人間生活の一つの共同事業が行はれ、そこに又眞の文化が生れて來る、即ち婦人が家庭に働くと云ふことは、婦人の天分として最も大切なことであり、又最も意義の深いことである、既に婦人が家庭の指揮者であり、生活の指導者であると云ふことが、婦人の天分であるとすれば　住宅は男子のものでない、實際住宅の八十パーセント乃至九十パーセントまでは婦人のものである、從て住宅に付ては男の考へる部分よりも、御婦人がお考へにならなければならぬ部分が非常に多いのである、建築家の如きも、どつちかと云へば　住宅建築の如きは、婦人の建築家が出現されて、實際住宅の設計に當られることが餘程好ましいことであり、又それが適當でないかと私は密に考へて居るやうな次第である。

少し時間が延びて申譯がありませぬが、要する

に私の申上げたいと思ふことは、英國の現狀は先に申上げたやうな次第でありまして、それを以て日本の現狀に對照して行くと、餘程能く似たものがある、日本の御婦人が尙ほ一層住宅に對して興味を有ち、又直接間接に私共をば刺戟して戴きたい、日本の建築家も矢張り英吉利の建築家のやうに、餘り住宅のことは知らない——どつちかと云へば、イグノーラントのフールが多いかも知れませぬから私は此の機會に於て日本の御婦人がもつと建築に興味を有ち、そして住宅に對する實際の御經驗なり、又御意見なりを努めて私共にお示し下されば非常に仕合せだと感じた次第であります

木守柿あか〳〵と夕陽うけてあり

朝霧に塔そびえ見ゆ隣村

住宅雜考

大庭草太郎

○

フリイドリツヒ・ニイチエが、獨逸人への極度の反感の果て、遂には獨逸の料理全體を惡罵して、獨逸料理の不消化が獨逸精神の不消化を招いたのだと斷言し、伊太利のピエモンテの料理を一番上等であると推稱したのは可成り有名な話でありますが　かうして料理の價値を哲學の價値と同列に置いて悔いなかつた彼が、又その住所を酷く重大視してゐたのは興味の深いことです。彼は何よりも精神の活潑を愛しました『ツアラトウストラ』は何よりも先づ快活を說ゐてゐます。彼に依れば、まことの健全なる人間文化は大氣乾燥し天空澄明なる高嶺の地より發生するのです。何故なら、乾燥した大氣と澄明なる天空とは人體の新陳代謝の機能を活潑にし、力を與へ、消化不良を來たさずひいて、精神の活潑を招來するからです。彼は多くの優れた天才達を生んだパリ、エルサレム、フイレンツエ、アテネ等は必ず彼の理想と一致した住むによき地であつたに違いないと言ひ、彼の生地ナウムブルヒを初め、ブヨルタ、ライプチヒ、バアゼル等を彼の安んじて住み得ざる地として酷く嫌惡してをります。ニイス、トリノ、ジルス・マリア等は彼の最も愛住した土地だと言はれてをります。最後は不幸にも狂つてしまはなければならなかつた程敏感銳想であつた彼が、酒を愛さず水を愛し乍ら、健全なる肉體と好適つる住宅とを求めて各地を轉々した事實は、一種の重苦しい感動を充分私達に與へます。住宅の位置並びにその周圍が、不知不識のうちに私道へ働きかける影響は、決して、輕視してはならないものです。曾てミケランジエロも彼の愛したヴアサリに、次のや

うに話しかけたと言ふ記錄があります。『ジオルジョよ、若し私に何かよいことがあるならば、それは私の生れた君のアレッツォ山地の高燥なる大氣の御蔭であらうし、又いつも玩んでは指を切つた鑿や槌の中で飲んだ乳母の乳のためでもあらう。』

○

よき住宅がよき藝術家のよき刺戟となつた例は古來尠くはなかつたやうであります。

ヴイクトル・ユウゴウがルイ・ナポレオンの皇帝とならうとする隱謀を鋭くも看破して、これを國民議會に於いて極力痛撃したのは千八百五十一年のことですが、彼の生命に二千五百フランの賞金が懸けられたため、彼は僞造の旅券でブラッセルに逃げ、翌年ベルギイを追はれて、ゼルシイに走り五十五年、三度びゼルシイを追はれてゲルンセイに逃れました。

ゲルンセイは彼の最後の隱遁の地となつた所ですが、四面皆蒼く美しい海であつたこの靜かな無名の一小島は、過去の繁激な生活から逃避して來た彼には極めてよき住所となつたやうです。

彼は此の地に彼の理想と趣味とに充分適つたよき住宅を營みました。千八百五十六年出版の詩集『瞑想』の原稿料で建てた簡明な高雅な住居なのですが、その設計や室内裝飾も全て彼自らが數奇を凝したのだと言はれ、或る批評家が『この家もユウゴウの作品の一つで、而もなかなか出來のいゝ方である。』と言つてゐる位ださうです。ユウゴウ自身も、『私は詩集「瞑想」の最初二版の印稅で、此處に小さいあばらやを建てました。』とジオウジ・サンドに書き送つてをります。『出來上つたら貴方も是非いらつして下さい。私はこの家を自由亭と呼ばうと思つてゐます。』

彼の日常親しく起居した部室は、屋根の上の樓閣の、玻璃で張りつめた二個の部室で、船室程の小さい方は寢室、大きい部室は著作部室でした。すでに全世界の熱意ある代辯者たらうとし初めた彼は、實に、この部室で『各時代の物語』『レ・ミゼラブル』等著名の著作をしたのですが、毎朝決つて早く起床し、紅いガウンを着、好みの書き物机

に向つて四五時間は傍目もふらずに原稿を書いてゐたと言はれてをります。書いては跳ね書いては跳ねした原稿紙が、少時の間に床一面を純白に掩うたさうです。千八百六十一年には、彼はこの同じ住宅内に附近の小兒を集めて、實に育兒院の濫觴となつたところの彼等のための集會を有ちました。

よき住宅は當然よき生活を育くみます。よき生活は必ずよき藝術を生まないではをきません『レ・ミゼラブル』がこの好適な住宅に瑣僅も剌戟され影響されなかつたとは、何人にも確言能きないでありませう。彼が明るく樂しんで終日仕事の能きたのは、確かに、このよき住宅の惠みであつたでありませう。何にもまして、よき住宅を有ちたいものです。『私は妻を初め其の他の家族と倶に平和に暮してゐる。』と彼は一友人に書いてをります。『第四の追放命令もこゝまでは達することが能きはしない。私の周圍には犬がゐる小禽がゐる。草花がある。來年は馬を飼ひたいと思つてゐる。私の幸福はクウデエタアに依つて殆んど破壞されてしまつたが、『レ・ミゼラブル』に依つて幾分は償はれた。私は朝早く起きて、夜も早く寢る。私は終日働く。折々は海岸の方へ散歩して、私の好きなファアメン灘の方へも行く。私は自分の周圍に營々として働いてゐる人が好きだ。彼等も亦私達に懷いてくれる。烟草は吸はない。併し、英吉利人のやうにロオスト・ビイフも食へば、獨逸人のやうにビイルも飮む。

○

在來の日本住宅の疑ひ得ない大きい缺陷は、外部の煩瑣な音響に對する防禦機關の完備してゐなかつたことです。日本住宅の長所はその光線の透射、空氣の流通等の良好であり得ることにありますが、外部より混入して來る不快な雜音に對してあまりにも開放的に無關心であることは、確かに大きい缺陷であると言つても過言ではありますまい。或る部室の一つの部室としての機能は、その部室が他の部室から完全に獨立してゐることに依つて完全に發輝されます。部室と部室との連絡は勿論、充分尊ばれていゝものではありますが 雜

音と騒音との不要な交流は決して喜ばれませぬ。近代人の一つの矜持は、その全らゆるものへの感覚が極めて鋭敏にふるえてゐることにありますが、社交と事務とを逃れて、自分の部室に獨りうち寛いだ時にも、完全に神聖なる孤獨の愉快を味樂し得ないとすれば、その生活は言ふまでもなく禍ひです。讀書は豫想しない調子外れな雜音に依つて妨げられます。談話は隣室の不要な談話までが不遠慮に漏れ聞えることに依つて落ち着きませぬ。かうした狀態が繰りかへされて、神經が病的に鋭くならないで健全に成長し得やうもありませぬ。睡眠の時間に於いてまでも、外部や隣室の瑣細な音響に禍ひされては、かうした生活はあまりにも惠まれてゐないと言はなければなりませぬ。

ひいて、今一つの日本住宅の見逃し得ない缺陷は、その部室と部室との交渉があまりにも自由で放縱すぎると言ふことです。小さい部室を思ひのまゝの大きい部室に代用し得ることは、確に優れた特質であるに相違ありませぬが、部室の有つ靜かで落ち着きある雰圍氣が、このために始終こはされやうとする傾向を有ちます。私達がその部室に在つてその獨りを樂しむ時にも、隣室からの思慮なき闖入者を豫想しなければならないのは、一つの不快となります。日本人は一體にノックを辨へない人達です。

古來日本人が思索的に深くはなく、その文化に雄重なる落ち着きがなかつたのは、一つはこの住宅の大きい缺陷の無意識的な影響に依るものではなかつたでせうか。一考の餘地は充分ありませう

○

庭園が住宅の一部分或はその延長と考へられなければならないのは、言ふまでもありませぬが、庭園が所謂築山や泉水でのみあると考へることは非常な誤謬です。在來の日本住宅には必ず附隨したやうに單に、何時あるかわからない來客への誇示のためのものしく凝つた築山や泉水も無いよりは有る方がいゝのは當然でありませうが、住宅は先づ居住してゐる家族を本位とすべきであることを考慮に入れなければなりませぬ。庭園は住宅の單なる裝飾ではありませぬ。觀賞のみの庭園

が、決して、將來への住宅の一部分や延長であつたりすることは能きないでありませう。從つて、庭園の思慮深き充分なる利用は、往宅の有つ興趣を必ず二重三重にしてくれませう。そこには、利便と愉樂、實利と趣味とが親しく調和さるべき充分なる餘地があります。

果樹や花辨や蔬菜等の栽培が、先づ、試みられなければなりませぬ。手入は充分安易です。生活の風調が破れ、喜ぶべき複雜が招來されます。美しい趣味が自ら芽生えます。生活が艶やかにされ雰圍氣は士と大氣とに親しく觸れて和やかになります。養鷄、養兎、養羊等が、好みに依つて計畫され得ます。趣味が實利への愉快な一致を發見します。主婦や小兒達の世界が賑やかにされ、生活が輝かしく動き初めます。家族の團欒が自然への等しき愛好に依つて一層濃やかになります。住宅の品位と舊趣とが確かに高められます。人性の高貴さが當然そこに成長します。從つて、生活の光輝がそこに活氣をもち初めます。

庭園を戸外室としての充分な設備で完成させることは、一層望ましく好ましいことです。不快にも人間の狹さを現はす程ではないさり氣ない墻塀の中に、見るから柔かな美しい芝生、水々しい新緑の木立、時として、趣味深い日時計、可愛いい小禽の水盤、小禽の家、或は水草の風致、野花の趣味等一切が人性と教養との良さを現はしてゐるのはまことに愉快です。美しい草花、麗はしい陽の光、親しき理解がこゝにあります。死んで挽かれた木材の代りに輝いて生命ある自然が、好適な建築材料となつて、壯重優麗な美の殿堂を築きます。採光や通風は、當然、充分完全に行はれて、全てが保健への好適なる條件を滿足させてくれます。休息や運動や、思索や運動がこゝで充分快く得られます。お茶を飲んだり、話し込んだり、編物をしたり、樂しい空想をしたり、一切の家庭の有つ愉樂と清淨とがこゝに育まれます。まことに戸外室は人と自然、心と心との麗はしき團欒の部室です。

庭園を忘れたり蔑んだりして住宅を語る資格はありませぬ。庭園を有たぬ住宅は不具な住宅です

庭園を愛しないで住宅を愛することは僭越です。土と大氣とを感しないで人間生活を愛しやうとの希圖は無駄です。明るい生活は明るい庭園から招來されます。生活の愉樂は、必ず、明るい生活から來るものです。庭園の効果を今少し重要視しなければならないかと信じます。

○

住宅の價値と生命とは、言ふまでもなく、單なる外觀にのみありませぬ。他の何物にも增して、住宅の眞の効果はその內部にあります。單に外觀を空しく飾らうためにのみ無意味な失費をかけ、內部を塵埃の堆積で掩ふのは賢いと言ふことは能きませぬ。資產の巨大は多く虛飾の善美にあせらうとする誘惑を伴ひます。客間に惡趣味の善美を亂積しやうとする風潮は、所謂成金の住宅に於いて時々見かけるところです。黃金と美とが直接的な交涉を有つてゐるやうに考へ易いことが、すでに、救ひ難い誤りです。美は黃金に依つて自由に購ひ得るものでは決してありませぬ。住宅の美は黃金に依つて多くの場合死滅し果てます。調和ある好ましき雰圍氣はこゝには釀成され得ませぬ。美は完全なる調和です。よき住宅とは調和よき住宅との謂です。住宅の生命と價値とは、決して黃金や表皮の裝飾には關せず、その雰圍氣の高貴性に親しき交涉を有つものです。住宅の眞の美は、その建築者と居住者との美への慧敏なる感覺とよき意味での好奇心とに依つて深められます。住宅の價値はこの意味での美の價値です。美がものゝ表皮から立ち去つていゝ時代はすでに來てをります。いつまでも住宅が表面の輕淺な美と美に似たるものとに卑しく禍ひされてゐる時代ではありませぬ。建築家がまことの美を理解していゝ時代は今日です。まことに、住宅の價値が正當に高められていゝ時代は今日です。價値は內部にのみ與へらるべきものです。生命は內奧にのみ芽生えるべき素質を有つてをります。內部に一杯の內質を有つた住宅こそが、當然生れなければならない正しき住宅なのであります。



象嶋見物——開路市歸着

——續埃及遊記（一一）——

工學博士　天沼俊一

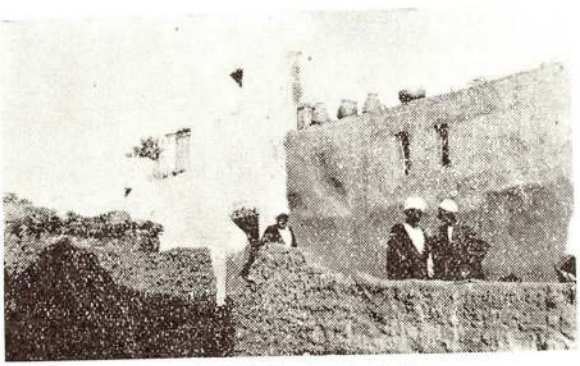
十一月二日　木曜・好晴

朝食後私は案内人に今から Elephantine Island（象島）の民家を見に行くつもりだと言つたら、彼は『喜んでお供致します』といひ、先に立つて往來へ飛び出し向ひ側へ渡る小舟を雇つた、そして私と一所に島へ上陸した事はしたが、舟夫も一所に上陸して而も一番先きに立つて歩いてゐる、何か質問するといつも舟夫に一度きいてから返事をする、彼は此島の部落に就いては何一つ知らぬのである、即ちこゝでもまた案内人に案内人が入用であつたのである。部落は其名を El-Ramla と呼び民家は大概泥土煉瓦を以て築き白堊を塗り、出

入口の上等には色彩を以て幼稚な唐草等をかいてあるのが北米の Pueblo Indian や南米秘露あたりから發堀さるゝ土器の文様と同じく、私にはおそろしく氣に入つたが併したゞ夫れ丈けの事で、村としては他に何にもみるべきものは無い様である記念として此村の寫眞を二つ許り掲げておく、人の歩いてゐる方はたゞであつたが、子供を二人立たした方はこれでも一人前十錢づゝやつたのである、案内記によると此島では Begging is common とある位だから仕方がない。

時間の關係上島の南端を漁つてゐるひまはないから、直に舟に戻り少しく河を溯つて、昨日裏からみておいた Nilometer を表からみる、日が一ぱいあたつてゐるし寫眞には丁度よかつたが、惜しいことには種板全部をつかひ盡しもう一枚もない仕方がないので我慢して了つたが、こゝには昨夕象島から寫した裏の寫眞を出しておかう、序ながら此水量計は約千年間すてゝ置た後明治三年に修繕したのださうで、時恰も Ismāil Pasha の時代であつたさうな、内流河の各所にある水量計の中で私のみたものでは一番立派であつた。

宿へ戻つてから馬車の都合が悪かつたので荷物は宿の男にかつがせ、徒歩して驛へ行きこゝから開路市の牧羊舘へ明朝七時歸着の旨電報を打つておいた、豫て旅行に出る時十一月三日に歸着の旨いひ殘し且つ荷物も預けてあるから、大概大丈夫であらうが念のため打電したのである、電報料一語金十錢づゝであつた



象嶋 El-Ramla 村風景

今夜は汽車の中でねるのだから、どうしても一小間占領せねばならぬ、尤も此の汽車はルクソル迄で、そこから乘りかへるのだからルクソル迄は

二等でもいゝが、寢臺車があれば無論とるつもりであつたし、夫れが今夜はないにしても無事上埃及の旅行を了つて祝意を表する爲め、けちな眞似をせず初めから一等を奮發に及んだのである、そこで初めて熱帶の一等へのつたのであつた。

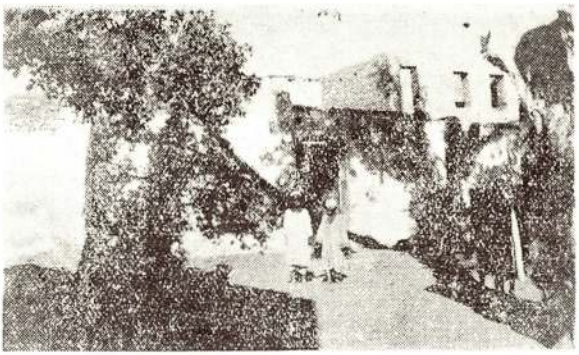
客車は何人乘か知らぬが大分廣く二室に分れ、中央に手洗場がついてゐる、ところが其客車には客は唯二人きり、私が一室にゐて手洗場を隔てた隣室に異人が一人ゐる丈けであつた、何にしろ大きな場所に一人は都合がよろしい、薄い靑紫色の窓硝子を全部閉ぢ切り扇風機を廻轉させておくと砂も大分に防げるし、色眼鏡もいらぬ。

頭の抑へ手がないのでいゝ氣になり、得意になつて納まつてゐると、發車して間もなく洋服を着た鐵道の從業員らしい男が來て馴々しく話しかけるまた金が欲しいのだらうといゝ加減に相手になつてゐると、遂に彼は『先日もお國の方が見えましてゝ、丁度私の勤務時間だつたので出來る丈けお世話をしましら大層喜んで居られました』とそろそろ催促を初め出した。金がほしいならやるがこちらでも利用せねばならぬ。遂に彼は確かに車掌である事をムスタファからきいたので、晝食の爲め食堂車へ行つてゐる間私の荷物を氣をつけさせる事にして一片の銀貨を與えたら、器用な手付で隱して入れてしまつた。

例令窓を閉ぢてあるにせよ、十一月の二日に扇風機を廻し通しでやつと暑氣を凌いだのは、此時が初めてゞあつたから珍らしく思つたが、これは後に南印度を寒中に旅行した時、夏服と扇風機と氷菓子とでやつと其日其日を送つた以來珍らしくも何ともなくなつて了つた。一昨年の五月十三日北米のロス・アンゼルス市よりソートレーク市への汽車中、我國だと氣の早い者は白地の單衣をきる樣な時分に、終日蒸氣暖房で蒸されたには隨分閉口したが、夫れと比べてみて甚だ面白かつた、但しこんな時には緯度の相異なんて事を考へてはいけないこと勿論である。

食堂車から給仕が晝食をきゝに來たから早速申込んでおいた、そして時間に出かけたら客は唯二人きり、これは內地外國を問はず少ない方の親玉

であつた　去る八月十日巴里から倫敦へ歸る時客の多い事を豫期し、發車前食堂車の座席券を給仕頭からとつておいたが、私が食堂車へ出て行つた時既に滿員だつたのに、座席券を持つてゐたお陰で給仕頭が無券の異人を立たせ私に席を作つてくれたので漸く食事にありつけたが、此れが多い方のレコードであつた、私はこの事を思ひ出して季節前の明日庵ルクソル間と巴里カレーとは隨分の差があると思つた、そしてたつた二人客に對し給仕の總數四人で彼等も用がなくて如何にも手持無沙汰らしく見えた。



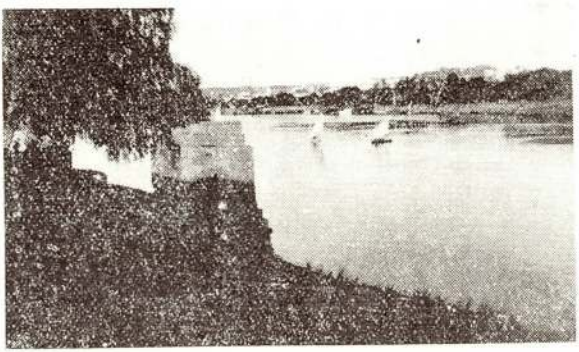
象嶋 El-Ramla 村の民家

汽車がエドフウ驛へついた時、先日贋物らしい銅貨を買への冷しラムヂを飲めのとうるさく勸めた例の肥つた男が車内へ入つて來た、先日の銅貨は未だ賣れなかつたと見えて再び買へといふ、いらぬといつたら埃及へ來て一つ位古代の貨幣をもつて歸らぬと恥辱ですといふ、うるさいから『おれは羅馬時代の銅貨なんかいらん、もつと古いのを持つてきたら買はぬでもない』といつてやつたら持合せがないと見え銅貨は思ひ切り、また冷したラムヂを抜いてもいゝかといふ、知らん顏をしてゐるうち汽車が出さうになつたので遂に諦めて下りていつて了つた。

午後四時半ルクソル驛着、歩廊にルクソル館の給仕頭がゐて宿へ來て休憩してはどうか、此所から先は食堂車はつかぬから宿で夕食辨當を作りませうといふ、宿迄行くのはいゝがまた例の辨當を作つた給仕や玄關にゐて靴の塵を拂ふ役の小僧等が金をねだるだらう、出發の時は用のない者共が集つてきてつき纏ふだらう、と思ふともう行く氣がせぬ。驛にも食堂はあるが折角だから給仕頭に

辨當丈けこしらへて來る樣に命じ、驛の食堂へ入つて紅茶をのみ、去る二十六日以來雇び入れて連れて歩いたMustapha Kharilには金を拂つて去らしらしめ、此所から新に仕立た開路行上り列車の一客車のすみの小間を占領した、丁度そこへ辨當と炭酸水とをルクソル舘から持參した、此時窓外に折から立つてゐた若い車掌を給仕頭は指し、私に向ひ今晩は誰もあなたの小間へ入つて來ぬ樣この男が取計ひますといつたら、其男は私に一寸會釋をした。金をやりなさい、さうさへすれば一夜樂にねられます。人に金を出さしておいて自分は樂にねられます。人に金を出さしておいて自分はいゝ顏が出來る、こつちも僅かな鼻藥で一夜安心が出來るので、やらなくても恐らく誰れも入つて來はしまいが、安心を買ふのだと思へば大して腹もたゝぬ、兎に角斯の如くにしてのべつにExtraがあるのである。

次に記すのは印度での話であるが、十二月の二十六日午後九時Luchnow發の夜行でBenaresへ向つた折、朝態々驛迄行つて豫約をしてをいた寢臺車へ入つたら、そこへ車掌が來て何か不都合はないかとか席の工合はどうかとかきく、知らぬふりをして何をいつてもたゞ『うん、うん』と返事をしてゐたら、遂に從僕の席をつくりませうかといつたが、夫れでも尙不通の樣な顏をして、あの男はいつも自分で席をさがすから捨てゝおけばいゝといつたら一時消えたが、暫くしてまた來て愈よ發車しますが御用はありませぬかといふ、もうこれ丈け調弄へば充分だから、別に用はないが出來たら入口の扉へ鍵を下ろして貰ひ度い、私はベナレス迄行くのだが、今夜不要心だからといつたら、彼は一寸躊躇したが、



計量水るけ於に端南嶋

よろしい閉ぢませう、客があつたら私があけに來ます、といつて鍵をかけたから四人のところを完全に一人で占領したのであつた、尤も今夜は殆んど客はなかつたが盜賊の心配がなくもなかつたので要心したのである。そこで其報酬として一ルーピー（當時約我が六十五錢）の札一枚與へたら喜んで去つて了つた。

翌大正十二年一月三十一日マドラスより孟買への寢臺車でこんなことがあつた。私は前日の朝忠竹林を發車今朝マドラス着直に寢臺を保留をすべく係員に談判したら、殘つてゐるのは上段ばかりと確かにいつた樣に思つたが、延期も出來かねるので上段でもいゝから豫約をし、夕刻乘車するとこれはまた意外なことに下段で而もまた一人きりだから、大分喜んでゐたところへ土人の係員が一人入つて來て、寢臺は私が要意しました、今夜は誰もこゝへは入つて來ませぬ、といつて金の催促をする、實のところ上段と計り思ひ込んでゐたのに下段で而も一人なので、直に金をやる氣になり一ルーピーの札を例の如く與へたら、禮をいふと思ひのほか『たつた一枚ですか』(Only one ?)といつたのには開いた口が閉がらず、餘りに意外だつたので急には文句も出なかつたのであつた。

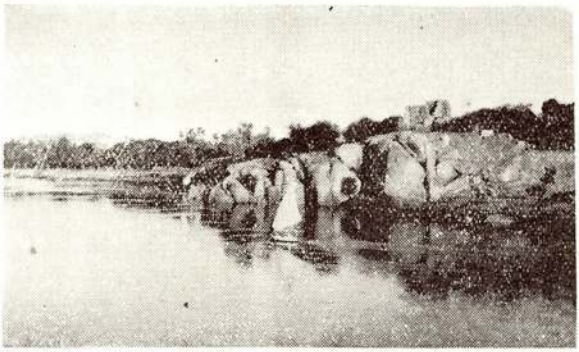
印度に於いては寢臺は無料である、たゞ晝間六人乘のところが夜は寢臺四つになる、二つが下段で二つが上段、だから何れにしても早く席丈け決めておく必要がある、其豫約も無料である、夫れ丈けに係員が袖の下をとる事が公然(?)と行はれてゐるらしい、時には一寸握らせねば得られぬ事さへなくもない、だから金をほしがるのは無智な下級從業員だから仕方がないとしてもOnly one ?にはあきれざるを得ぬ。埃及でも印度でもこんな點はよく似てゐる、臺灣も朝鮮も關東州も行つた事がない、支那へも行つた事がないから知らぬ、だから埃及と印度の事ばかりは言へぬが、これ等は確かに亡國民根性であらう。

六時十分ルクソル驛發もう暑くはないから砂が少し入る位がまんして窓をあけ、暮れ行く景色と續て月夜の景色を觀賞しつゝ、汽車が內流の鐵橋を渡り東岸より西岸に移ると同時に窓を閉ぢ就寢

した。

十一月三日　金曜・霧・好晴

硝子窓とガラリ戸とを閉ぢ上衣丈けぬいてねたのに、朝四時頃大變に寒くて目がざめた。當國着以來かゝる寒氣は初めてゞあつた、のみならず窓をあけてみて驚いたのは濃霧の爲め線路の附近が薄ぼんやり見える許り、今迄の連日の好晴は今朝全く一變したのである。併し私はもうすつかり目的を達したも同じだから曇つても降つても差支ない。七時豫定通り開路驛着、宿のOmnibusで牧羊館に入る、先達中は階下



象鳴よりの東岸を望む

第十七號だつたが今度は其一つ隣りの第十六號。

午前九時半約束通りAhmed Salahが來た、彼と一所に宿を出て出發前の約束通り、上埃及旅行中に寫した寫眞全部を El-Manakh 通りの寫眞師A. Sarkissan 方へ現像せしむる爲め持つてゐつた。

次に動物園へ行つた。上埃及旅行中ムスタファは開路の何とかいふ宿の庭に紙草（Papyrus）があるが、サラーがよく知つてゐる筈だといつた、少し變だが或はそんな事もあぬかも知れぬと思ひ、サラーにきいてみたら、彼曰く夫れは宿屋にはないが、動物園にはパパイラスもロータスとあるといつた、そこで夫れでは動物園へ行つてみやうと決め、彼を促して電車へのつた。

動物園は內流河の西岸に沿ひギザにある電車は門前で停るから大に便利である。入園して彼の導くまゝに急ぎ池の邊に出ると、水邊には我國の『ぎぼうしゆ』の樣でもつと葉の大きな植物があり水中には蓮と同じ樣な葉が浮いてゐた、サラーは此れ等を指してパパイラスだといつた、どつちがさうかときいたら、兩方ともさうだといふ、餘り

馬鹿氣でゐるから、時間が無駄になるから下らぬことを言ふなと窘めたら、では別のロータスを見せるといつたから、再びついて行くと今度は恰も夾竹桃の樣な花盛りの木を指して確かにロータスだといふ、かうなると居れば居る程馬鹿にされる樣な氣がしてならぬ、知らなければ降參すればいゝのに何とかして胡魔化さうとする、すればする程駄目になる。


Mohammed Ari. 寺中庭に於ける沐浴用噴水

出口で動物園の平面圖を買つた、一枚は英語一枚は暴夜語で記入してある、これ丈けが動物園行の土産である、そして開路市へ引返しも一度モハメッド・アリー寺へ行つた、大した寺でないのは判つてゐるが、先日は日の暮れ方にみたので天井等全然見えず、ただ東維馬氣分を味はつた丈けであつたが、今日は明るいからゆつくり見やう、そして序に此所の高臺から市を俯瞰しやうといふ考へであつた。

時間も大分にたつたし且つ疲勞もしてゐるから午後は休養ときめ、前に二度許り晝食をしたことのある St. James屋で食事をして散髪に行つた、晝食も散髪も宿屋で出來るが、成るべく安價にあげてフキルム代の捻出をせねばならぬからである散髪料は大概いくら位かとサラーにきいたら自分達は二十錢だが外國人は五十錢とるだらうといつた、散髪屋もサラーのいく家をきいておいてそこへ行つてみた私の髪はいつでもバリカンで刈る毬栗頭だから、物價の高い米國で七十仙英國では一志四片にきまつてゐた、だから開路位と高を括つてゐたのに、たつた五分間で坊主にしておいて八十錢とつた、何によらず外國人とみると高いのだからいやになる。

夕食後十四日目で入浴をした、先月二十日に此宿で入つたきり旅行中は一度も入らず、いつも夕食後部屋で水で拭いておいた丈けだ、其邊は暑いところだから至極便利である。昨夜充分ねてゐぬせいと、一つは開路迄歸つて來て安心したのも手傳ひ、ねむくて仕方がないから九時半に床へ入つた、おそろしくいゝ氣持であつた。

本年一月號以降、上埃及旅行の記事をかいたが丁度一年たつて今月で再び開路へ戻つて來た、もう五日で愈よ埃及を退去するのだから、旅行記もあと二三回ですむだらう。殘りは昨年と同樣親友の八戸成蟲彫君が代つて書いてくれる事に話が纏まつたから、私は今回限り退却する。敬白

（大正十三年九月四日稿了）

老媼の客待つ辻や殘り柿

漫錄



帝展雜感

青山居主人

日本畫は一時小さいものが多くなつたが、今年あたりは又少し大きくなる傾向があるやうだ。六曲屏風は十双位であるが、半双や四曲二曲の一双ものに對幅、三幅對を入れると二十八點ばかりになる。大きくなる傾向は觀る者にとつてはあまり難有くない。

◇

實用的方面、即ち建築の裝飾として用ふるとしても、六曲や四曲屏風は普通の中流住宅には勿論

◇

招待日の十時半頃から一時半まで三時間かゝつてざつと一と通り見たとは云ふものゝ、日本畫の百五十四點でさへ、終の方はいやになる位で、それに西洋畫の百六十九點と彫刻の百六點とでは到底一度には見られない。尤もその合計四百二十九點位でへこたれては、千點以上もある巴里のサロンなどを見ては氣が變になるかもしれぬ。

◇

向かないし、上流の住宅でも、近頃のやうに洋風の分子を多くとりいれてゐる場合には、其の必要を認めない。所詮建築には縁遠きものである。數年前から盛になつて來た横額風のものは、日本風に掛軸としてよし。又額として洋風の部屋へもかけられる。

◇

この横額の形式は、日本畫の洋化の一端であるが、題材、構圖、手法等に於いても益々浄化したものが多い。古屋正壽氏の『水園三趣』などもその一例である。堂本印象氏の『故父』に至つては、隣室の洋畫と一緒に並べても差支ない程洋化したものである。斯う云ふ作品は、日本畫であつても掛軸として床の間に掛けるよりも、額仕立として西洋間の壁に掛ける方が適してゐる。

◇

傳統を追ふ日本畫、掛物風の形式に於いて、題材に於いて、構圖に於いて、手法に於いて、在來の日本の傳統を追ふものも固よりあつて差支なく又これに多少の新味を加へ、所謂新日本畫として日本室の裝飾となるべきものも必要であるが、日本畫にして西洋間、少くとも椅子を置く部屋に適する形式、題材、構圖、手法をとつたものが、もつと增加し、その中に傑れたものが出て欲しいと思ふ。

◇

荘重な西洋間に於いては、どうしても洋畫、それも油繪でなければ釣合はない。併し輕い西洋間又は日本間に椅子と卓とを置いて洋風に使ふ場合の裝飾としては、油繪では重すぎる。どうしても水彩畫でなくては調和しない。その水彩畫といふ意味は洋風の水彩畫でもいゝし、日本畫の中で前に述べたやうなものでもよい。

◇

住宅の洋化は服裝の洋化と相待つて今や動かすべからざる傾向として實現されつゝある。此の時に當つて、これが裝飾として應はしい日本畫の現れない筈はない。日本畫家、殊に青年畫家は、此の點を意識し、念頭に置いて描いてもいゝと思ふ必ずそこに日本畫の新用途が開かれ、自ら日本畫の新生命が拓かれる事と思ふ。

◇

西洋畫は百六十九點あるが、日本畫の十六室に對して、僅かに七室に納まる位で、大作はない。しかも大作の多い日本畫よりは、見應へがある。此の二三年の洋畫の進歩は著しいものである。これは佛蘭西へ行つた者の多いのも一つの理由であらうが、三年間も佛蘭西現代美術展覽會が開催せられ居ながらにして刺戟を受け、教育された結果である。最近の歸朝者は別として、洋行したも者五六年以上を經過したものは刺戟を與へられなければ眠つて了ふ。その點でも我が美術界は佛蘭西現代美術展覽會作品の將來の者デルスニス君に感謝してよからうと思ふ。

◇

洋畫の進歩したのはいゝが、價格の高いのは考へ物だ。買ふ人にはそれならば佛蘭西の繪を買はうと云ふやうな事になり、結局畫家も困るだらうと思ふ。展覽會値段といふやつかも知れないが、日本ではまだ洋畫のマーケットプライス(市價)がないのだから、畫家の勝手につける展覽會値段を標準にする外はない。さうすると買ふ人はマア考へるだらうと思ふ。どうせ賣れないと思つて高くつける人もあるだらうし、高くつけて置かないと畫家としての値が下るやうに思ふ人もあるだらうが、洋畫發展の上からもう少し安くつけて貰ひたい。

◇

彫刻も日本畫のやうに概して大きく、等身以上のものが多く、それが狹い會場へ自白押に並べられてゐるので、まるで物置みたいで、鑑賞の氣分になれない。場所の狹いのは無論よくないが、一方でもう少し小さな作品にして、建築物の裝飾に使へるものも多少あつてはどうであらう。大きくなければ見應へのあるものが出來ない譯でもなからう。勿論大きくても、齋藤素巖氏の『空』のやうなものは別である。私の云ふのは男女の種々の形の像についてゞある。院展の藤井浩祐氏のなどはいつも小品だが、中々面白いではないか。

◇

以上主として建築といふ事を眼中に置いて、日本畫も洋畫も彫刻も之れと結びつけて雜感を述べたので、單に展覽會の作品としての批評ではないからそのつもりで讀んで頂きたい。(十月十六日)

比叡山

文學士　黑田鵬心

一

高野山、室生寺、中尊寺、その外奈良京都の寺々には大低一度は詣でゝゐながら、叡山だけはつひ機會がなくて今まで殘してゐた。

ことし八月の末、神戸、大阪の用も終つたので其の晩は京都か宇治へ泊らうかと、梅田から四時何分かの汽車に乘つた。腰を落つけて、ふと前の方を見ると、少しうつむき加減の頭の恰好が神戸のT氏らしい。聲をかけると果してT氏であつた氏は急に用が出來て、坂本の御寺へゆくのだと云ふ氏とは一昨夜神戸で晩食を共にしたが、其時別に何の話もなかつたので、偶然の會合を喜ぶと共に、叡山行をすゝめられた。私も必ず京都か宇治へ行かねばならぬ譯でなし、豫ねての望の叡山上りには絶好の機會だと思つたので、東京迄の切符を持つてゐたのを幸ひ、T氏と同行する事にして色々な話をした。T氏は前の汽車にするつもりであつたのを、用の都合で間に合はず此の汽車に延ばしたのだといふ事を聞いて、ます〳〵偶然の會合に驚いた。

大津で下車、自働車で若江鐵道の出發點たる三井寺驛にゆく。此の汽車は汽關軍なども少さくて可愛らしいが、速力も遲い。車窓の右に琵琶湖、左に叡山が見える。日吉驛で下車し大阪から漸く薄暮に迫つて來た。徒歩數町で戒光院に着く。私は突然の客だが御寺の事だからそんな事は平氣らしい。住職堀惠慶師に迎へられ、一風呂あびて、精進料理の御馳走になりながら、天台の宗教や高僧に關していろ〳〵有益な話があり、明日は堀師同道で、T氏も一緒に三人登山する事となつた。私はよい先達と道づれの出來た事を喜んで寢についた。

二

翌朝は、また天台高僧の話などが出たので、出

發したのは九時過ぎであつた。『腰おし』なる者が三人來てゐる。高野の『尻おし』が若い女で、手でおすのと違つて、屈強の若者が、T字形の木で腰をおすのである。

先づ日吉神社の參道へかゝる、中々立派な參道で、氣持がよい。有名な日吉の三橋を見る、それは日吉神社社殿の建築と同じく天正十四年に出來たもので、特別保護建造物となつてゐる。三つとも形の違つた石橋である。寛永十一年建造のこゝの東照宮橋も特別保護建造物となつてゐるが、橋としては珍らしい。宮島の嚴島神社にも長橋や反橋が特別保護建造物となつてゐるが、それは社殿に聯絡したもので、建築の一部と見られる。日吉の三橋には、本宮橋、文神橋、走井橋といふ名がいつてゐる。

日吉神社は延暦寺の鎭守として、應仁時代に創建され、其の形式は日吉造又は聖帝造と稱せられ神社建築の一形式であるが、春日造や流造が上代の神社建築の直前の形式であるのと異り、日吉造には佛寺建築の形式が加はつてゐる。即ち入母屋造、向拜附の背面を出し切つたやうな形であつて此の入母屋造といふのは明かに佛寺建築の形式から來たものである。延暦寺を創建した佛敎大師の天台宗が、支那の天台宗と異り、日本的複合佛敎であつて、神佛融合思想が行はれた當時に於て、佛敎建築の形式が神社建築の形式に入りこんだ事は、宗敎並びに思想の具體的發現として甚だ興味ある事だと思ふ。

尤も現在の日吉神社は、天正十四年の再建で、桃山時代の建築であるが、形式は創建當初のものを襲うてゐる。從つて日吉造又は聖帝造の標本となるものである。外に攝社の大神神社・樹下神社は何れも日吉造で、同時の建築である。他の攝社たる宇佐宮、牛尾神社、三宮神社等の社殿も同時の建築であるが、形式は流造によつてゐる。

三

それから上りとなり、路は老樹の蔭をひた上りに上り、中々急坂で、例の腰おしが大に役立つ。所々眼界が開けた所にベンチがあるので休んで見

下ろすと、琵琶湖の景色が中々よい。

二十五町汗をかいて上りつすと、石階の上に文珠樓がある。

これは慈覺大師創建の樓門であるが一段高い所に建てられ、前後に石階があり、根本中堂は、其の後に低く建てられてゐる。山中の伽藍で、堂宇が高低隨所に建てられてゐる狀は、奈良や京都の平地の伽藍とは大に趣を異にしてゐる。

文珠樓を見、石階を下り、根本中堂に詣でる。これは延曆七年、宗祖傳敎大師によつて創建されたもので、天台宗伽藍の標本的のものであるが、現在の建築は、寬永十九年の再建である。併しその平面は大體當初の儘で、十一間六面、入母屋造單層の大建築である。中堂の直き前に中門があり それから回廊が起つて、中堂の兩側に及んでゐる

中堂の內部は、前の二間を外陣とし、床を板張としてあるが、後の四間の內陣は石敷で、外陣よりは七八尺低くなつてゐる。內外陣の境は板戶を以つて區切り、內陣の中央に佛壇を置き、壇上の厨子內に本尊が秘められてゐる。これを內外陣の境が單に柱ばかりで、本尊もあり時々拜める前代南都六宗の伽藍や、後代淨土敎の伽藍に比べると非常な差で、宗敎建築の特色がよく現はれてゐる又同じ宗敎でも眞言宗伽藍の平面とは多少相違がある。

堀師と同道してゐたので、特に內陣まで入つて拜見する事の出來たのは幸であつた。中堂の前が比較的狹く步廊で圍まれ、坪庭のやうな感じのあるのも、敷地が山中の狹い平地を選んだ爲めであらう。他の佛敎とは違つた感じがする。

四

宿院で晝餐の饗應を受け、大講堂の前に出た。大講堂は藤眞和尙の創建で、現在のものは根本中堂と同じく寬永十九年の再建である。九間六面、重層、入母屋造の大建築で、所々に『唐樣』の手法が用ひられてゐる。根本中堂と大講堂とは、叡山東塔に於ける二大建築であるが、他宗の伽藍の建築と比べても大きい方で、恰好もよく、德川時代初期の代表的建築とするに足りる。唯兩堂が離れ

て建ち、中堂は東面し大講堂は南面し、個々別々になつてゐるのが、山地佛教建築の特色で、一望のうちに兩者をねめられない點が遺憾である。

それから戒壇院堂を見る、これは天長五年藤眞和尙によつて創建され、現在のものは、天正年間の再建である。壇上に建てられ方五間、重層、寶形造の建築で、屋根に寶珠、露盤をのせ上層に軒廣風をつけてゐる。次に淨土院に詣でたが、これは敎祖傳敎大師の廟で、土塀に圍まれた清楚な殿堂である。

これを過ぎる頃から西塔の方に入り、やがて堂行堂と法華堂との前に出る。これは二堂を廊でつないでゐるので、俗に荷下堂と云はれてゐる。法華堂は藤眞の後をついだ圓澄(寂光大師)によつて創建されたものであるが、建築としては別に特色もない。次に釋迦堂に詣でる。これも圓澄の創建で、現在のものは、豊臣秀吉が三井寺の本堂を移建したものと傳へ、七間九面、單層、入母屋造のやゝ大きい建築で、室町時代以前のものらしい。これは西塔に於ける主なる建物である。猶本覺院相輪樘まで行つて引かへした。

叡山は、以上の東塔、西塔の外、橫川と無動寺の四ケ所に分かれ、東西南北の四嶺となつて居り橫川には橫川中堂、無動寺には明王院などの建物もあるが、歸途を急いだので、橫川は又の時に讓り、もと來た道をひた下りに下つて、戒光院に歸着したのは、四時であつた。それから夕食をよばれ、堀師とT氏とに分れを告げ、京都へ向つた。

五

此の行全く豫期しなかつた事だつたので、何の準備もなく、しかも急いで見たのであるが、叡山美術の一般を了解する事が出來た。同じ山上の美術でも高野山、關山中尊寺、上の醍醐寺などゝは趣を異にし叡山には叡山の特色がある。他のものが比較的古い建築と優秀な彫刻や工藝美術品を持つてゐるのに比べて、叡山は大に劣るけれども、其の山上の所々に狹い平地を求めて建築し、概して山間の趣に富んでゐる。從つて自然の幽邃な氣分に充ちてゐる點は特色とするに足り、天台宗發生の地として參詣するものに、一種の深い感じが與へられる。

建築饒舌

泉　線　郎

×　×

シエルドン・チエネエがその名著『劇場革命』に於いて、『正しき劇場は、宗教に於ける教會、若しくば教育に於ける大學の講堂のやうに、藝術に於ける殿堂である。』と斷言してゐるのは充分妥當でないかも知れないが、『一番困ることは、建築家達が、教會、圖書館、大學等の傳統的な尊嚴、及び繪畫藝術、彫刻藝術等の尊嚴さを認めてゐ乍ら演劇の有する本質的なる眞摯な精神美を認めないことである。彼等は劇場を氣晴らしの揚所として又事業場所として具體化し、藝術の場所として具體化しやうとはしなかつた。』と言つてゐるのはそのまゝ至當である。單に劇場からとのみ言はず、全らゆる建築から無思慮な空隙や無意義な裝飾を排拒しなければならぬとの主張乃至理想は、良心的なる藝術家である建築家にとつては、すでに、輕易で當然なる常識である筈なのであるが、過去の劇場建築に執念く附き纏ふ非藝術的な因襲と傳統とを無視し、更革しやうとの希ひは、餘程の勇氣と果斷とを以つてのみ、よく成就し得るのである。劇場が單なる虚飾と煽情と卑樂との小屋になり下つてがら、すでに久しい世紀が經つ。曾て、華美と虚幻とは劇場の矜持であり、卑俗と安逸とはその特權であるかのやうに平然と讃賞された。演劇か單なる見せ物であり、劇場が畢竟肉樂場でしかなかつた、藝術の光榮ある長き屈辱時代がそれである。時代は激しく幾轉變する。演劇は永劫の藝術史への輝やかしい更新の一歩を踏み出す。全らゆる藝術のまことの黎明はすでに目近く近づきつゝある。美は千古に高められ、眞は永劫に深

められる。華美と金粉とが劇場の零圍氣を傲岸にも醸生した時代はも早や急いで去らうとする。劇場は華美であることをすでに要しない。その建築が虚麗でなければならぬ理由は今はなくなる。こゝに於いて、劇場建築家は單に仕事好きな計畫者である以前に、純情慧眼なる藝術家であることを要する。藝術の正しき効果は單に煽情的であり、迫心的であることに依つてのみ強められはしない劇場が建築家の裝飾の巢窟であつたり、仕事師の營利の倉庫であつたりしてはならないのは、すでに、饒舌を俟つまでもないところである。藝術家の眞に滿さるゝことのない悲哀は其作品が如何に賞揚されないかにあらずして寧ろ如何に誤り賞揚されるかにある。求められるべきは、粉飾と虚構とにあらずして、藝術の眞と美とである。劇場設計者としての技巧にあらずして、劇場藝術家としての人格である。藝術は、疑ふまでもなく、人格の反映である。建築はその時代精神の表現であると同時に、その建築家の人格の反映である。人格の墮落はすでに、藝術の死滅でしかない。藝術は遂に人格である。

× ×

ジユリア・カアトライトをして、『萬人を魅し去つた人格的の美や英雄的な力、才智溢るゝ對話や恍惚たらしむる態度、其等は奇しき鋭敏な洗練された智や他に比肩する者なき心的活力の唯外部への現れに過ぎない。人類の記錄に於いて、過去も將來も、此の素晴らしい人物と同じく、智識に對する熱望が美に對する熾ゆる愛に併合されたことなく、又同じ程度で、藝術的技倆と科學的技倆とが結合されたこともない。』と語らしめ、ヴアサリをして、『天の幸福なる賜は時として同じ人に注がれ、美や優雅や天才は珍らしくも一人に併せられるために、如何なる事にその身を委ねても行爲は全て神の如く、他の者は皆彼の後方にある。』と記かしめたダヴインチが、彼の踏み込まぬ人間の分派は殆んどない程富才多藝で、建築、彫刻、繪畫文學、哲學、數學、地理、天文、動水、航空、生理、解剖、其他の科學と藝術とに單に通ずるのみでなくて、全てに渉つての創見者、或は革新者、

即ち何等かの意味での師表となり、ロドヴイコ・スフオルザへ送つた彼自身の有名な手紙に依るまでもなく、壁畵を描き、寺院を設計し、運河を立案し、彫像と刻し、水蓮の利用を發見し、庭園の小亭を計畫し、航空機を組成し、ロドヴイコ公夫人の浴槽を熱くする巧妙なる考案までした眞に驚嘆すべき事實は少時をき、カアトライトに依つて『彼は解剖學の學理も遠近法の法則も知らなかつた。』と說明し去られたる彼のジオツト・デイ・ボンドウネが、如何に建築への深き理解と愛とを有つてゐたかを知るは深き喜びである。

その型式と均勢とは、今日より見ては、時として稚拙古風ではあるが、その驚嘆すべき豊富な奔放な獨創力と深き人間的魅力に充ちた清淨な情熱とを以て、ジオツトはすでにチマブエの有たなかつた溫かき人間性と鋭き表現性とを美の世界へ寄與した。彼は聖フランシスの畵家と稱ばれる程多くの聖フランシスを、フロレンスサンタ・クロオチエのバルデイ禮拜堂に於ける壁畵の聖フラスシス一代記、アッシジの上院に於ける壁畵の聖フランシス一代記、下院に於ける聖、フランシス光榮の寓意畵等を、又其他の多くの聖書畵等を描き、フロレンヌ文藝復興の最古の史家ロレンツオ・ギベルテイをして、『エトルリヤの一村に繪畵は生れた。』とまで記かしめた程、純朴なる一畵家に過ぎないのであるか、彼の形貌と構造とに對する鋭細なる感覺と精到なる觀察とは、彼をして在來の誤れる美の傳統を放棄せしめ、繪畵上の形貌と構造とを改革せしめたのである。單に繪畵とのみ限らず、彼の建築への深き理解と豊かな天分とは、數枚の畵中に取入れた穹窿、圓柱、柱廊若しくは拱廊、塔等に依つて充分悉知することを得るであらう。其處には單なる純直なる數條の線があるだけなのであるが、そこに充分收められたる壯嚴單華なる藝術的効果は、彼の技巧がすでに寫實の深奥にまで到達してゐることを示す。畵家が單に繪畵きである間、不幸にも彼は優れたる藝術家であることを得ぬ。建築家が單に仕事師である間、不幸な彼には最後まで藝術が理解できないであらう。謂ふところの純眞なる藝術家とは、彼の生活とせ

る或る特種の藝術以外の藝術への無智慮なる藝術家を指すのではなく、全らゆる藝術へ對つての正しく素直なる理解を有つてる藝術家を稱ぶのである。ダヴンチはすでに驚異である。ジオツトは近代の建築家にとつてもよき友である。

× ×

『生活は藝術よりも少い努力で創造することが能きる。』と考へることは、ヴンサン・ヴンゴッホを幾分汨喪させたのであるが、『自分が病氣になればなる程、自分は藝術家になる。』とまで言つた彼の藝術を、私達が彼の人間としての生活と離割して考へることは殆んど不可能である。疑ふまでもなく、彼にとつては彼の藝術の創造はすぐそのまゝ彼の生活の創造であつた。彼にとつては、その自然の觀象も自我の探求も、決して、藝術の遊戯や人生の餘技ではなかつた彼は彼の生活を創造すると等しく彼の藝術を創造した。彼の藝術への愛は直ぐそのまゝ生活への愛となつた。生活への愛はひいて人類への愛となつた。藝術を愛する前に、彼が如何に人類を愛したかは、彼がボリナアヂユの鑛夫へまつしぐらに基督の福音を說くために赴いたことを以つても充分知り得るのである。

彼はベルナアルへ宛てゝ手紙を書いた。『自分は人類を描きたい。彌がうえにも人類を描き度い。小さい身體を大きな着物に包んでゐる赤兒からソクラテスに到るまで、色白の皮膚に黑い髮を有つてゐる娘から金髮に煉瓦のやうな陽に焦げた顏貌をしてゐる女に到るまでと言ふ、これ等足の二つある生きものゝ數々にも增して自分の愛を緊ぐに足るものは他にない。』彼は又彼の弟へも書いてやつた。『人間は他の何物にもまして重要なものである。自分が畫に就いて苦しめば苦しむ程、畫は冷やかに自分から去つてゆく。』『基督は全ゆる藝術家の中で一番偉大であつた。』と彼は又言つた。『何故なら、彼は藝術の作品ではなしに、不滅の人間を作つたから又偉大なる王君としての彼が書きつけることを輕視してゐたその言葉は力として、他の上に大理石よりも繪畫よりも力強く迫つたからそして、自分の生きてゐた其の有樣が遠く去つてしまつても、それが、永劫に殘るべきことを彼は

知つてゐたから。』

ゴッホにとつては、確かに、生活は藝術であつた。極めて勇敢直情に、彼は赤裸を赤裸として、僞りなき人間生活を執拗に餘すところなく生活しつくした。彼は人生に就いて昂奮すればする程眞實を見、眞實を見れば見る程、人生に就いて昂奮したことまで言はれてゐる程、その生活は情熱的戰鬪的だつたのである。グレエフエに依れば、『彼が描くところを見るのは戰慄に値する。躁宴のやうである。繪の具は血のやうに周圍に跳ね散らされるのであつた。彼の藝術は決して、藝術の藝術ではない。彼の藝術は彼の生命である。彼の藝術は彼の人である。彼は生活し、生活しつくした。描き、描きつくした。描くことは、彼にとつて、生活することであつた。生活することは、人類を愛することであつた。愛することは。描くことであつた。彼の發狂を彼の畫の不健全の證左とし、反辯否議する者は、曾て、愛を知らない者であるに相違ないであらう。彼がその生涯學者を描きたがつてゐたことは、充分、御の胸奥を語るであらう。』ゴッホは新しい國へ進擊した。』とグレエフエは書いた。『そこで、全らゆる條件は彼自身の有つてゐるものと鋭く對抗した。焰は焰に出遭つたのだ。全て、彼の畫は戰鬪である。字義的の意味に於いて戰鬪である。烈風に吹き擊たれ乍ら、彼は描いた。その求める効果は、或る時は實に少時の間しか續かず、そして、一度描いたきりでそれを得てしまはなければならなかつた。それよりももつと一途に、彼は上に燃えてゐる空の下で、高く燿いてゐる內面の狂激な焰に依つて前方へ惹かれた。創造しつゝ、創造しつゝ……（速かに、速かに、恰かも燃ゆる太陽の下におし默つて、麥を刈り倒すのに心を集中してゐる收穫者の如く、速かに必迫して。——ゴッホの手紙——）』

藝術と等しく生活を創造したいものである。藝術は生活でなければならぬ。

× ×

藝術家の內的要求が、三つの神秘要素から成立すると言つて、カンデインスキイのあげた三つの要素は大略左の通りである。

(1)各種藝術家は、自ら一個の創作者として、是非表現しないではをけない何物かを有つてゐるものである。――個人格の要素

(2)各藝術家は、時代と環境との子として、時精神とその代環境との表現を強ゐられるものである。――樣式の要素――

(3)各藝術家は、藝術の單なる下僕として、藝術本來の目的を助成しなければならぬやうに要望されてゐるものである。―純藝術性の要素―

完全とは言へないかも知れないが、この摘出は至當である。

藝術は生活である。生活は全的な意味に於いての人生の肯定である。從つて、藝術は人生の肯定である。藝術が先づ藝術家の自我の肯定にその出發を初めるのは當然である。自我は自ら希求して動き、進み、昂まる一個の熱意ある信である。藝術家が、どうでもこうでも表現しないではをけない必至的なる自我を失つた時、彼は即座に泥人形のやうに硬化し果てるのである。

時代は當然時代の藝術を創造するが、藝術家はその時代の藝術的意慾を表現することに依つてしばしば時代を創造する。藝術は永劫のものゝ時代化であるよりも、しばしば時代のものゝ永劫化である。從つて、藝術家の自我は永劫化された自我としての表現を有つ。時代の精神の表現は、畢竟時代の永劫精神化である。同じ意味のことを、その環境に就いても言ふことが能きるであらう。

藝術の眞の發達は、言ふまでもなく、純藝術性の內的要素に依つてのみ發達するのである。この內的要素のみは、時代を超えて永劫に、自我を超えて全我的に、絶對の價値を世界に有つ。かゝる場合、藝術家はしばしばその藝術に依つて忘却され滅殺される。この時、藝術にとつて、藝術家は單に價値なき下僕にしか過ぎなくされるのは當然である。

(I)(II)の場合は有限的流轉的であるが、(III)の場合こそは眞に永劫的であると、カンデインスイも附言してゐる。

× ×

藝術にとつて、全らゆる材料は深く內感さるべ

きもので、決して安逸に外感されていゝものではない筈である。建築がその表現の主體を構造にとるため、單に無事なる効果を求めて、外への稀薄な表現に焦燥され勝ちであるのは危い。材料は手早く平板に並列さるべきためにではなく、藝術内觀の選ばれたる具として考慮深く用ゐらるべきものである。眼から眼へ安易に移さるべきものではなく、必ず、一度は心で培ひ育まれなければならないものである。材料の酷使は材料を傷ける以前に藝術の生命を滅す。過多な材料を以つての、冗漫な表現や尨大な虚構は、藝術にとつての異邦人を驚し惹きつける効果は或はあるとしても、藝術の生命を不滅の世界へ確立しやうとの眞力は有たぬ不朽の構造は、單なる奇嬌の表現に依つて、恣に創追され得べきものではない。奇嬌は僞善である材料の掻き集めは、すぐ、生命ある藝術とはなり得ない。構造は創造さるべきものであつて、組成さるべきものでは斷じてない。材料を過度に尊重し要視することは全らゆる種類の藝術にとつても等しく危險である。

初冬や案山子殘れる田面あり



都會の黄昏

別所悌一

『……人を馬鹿にしてやがるよ。……』

『……あいつ、今度も亦落選しやがつたつてな。……』

どこかの私立大學の學生らしいのが二人、大急ぎで入れちがひに純三の側をすれて外へ出て行つた。

燻んだ柱時計は五時三分過ぎを示してゐた。純三の小さい懐中時計の針もきつちり同じ時刻を指してゐた。

俊子の乘つて來る筈の汽車は四時五十七分に茨

木を出るのだから、今丁度、彼女は大阪への途中にあると考へてよかつた。心配したやうに行き違ひにはならなくてよかつたとは思つたが、外へ出て待つてゐるのも何だか氣がきかぬやうでもあるし、今日は少々風が冷たくもあるので、彼は下り三等待合室の汚ない雜沓の中へ仕方なしに紛れ込んだのである。

言ふまでもなく、待合室は混んでゐた。騒がしかつた。氣にすればいやに氣になるやうな快くない空氣が、濡つて生温るく、一種の人間臭い香ひをもつて、人一倍潔癖な純三を氣味惡く包んだ。目にはよく見えないでも、空氣の濁りははつきり感じられた。田舍から出て來たに違ひないうす汚ない老婆や、馬のやうな勞働者風の男などが無遠慮に吐いた息を、そのまゝ自分がまた吸はされるやうで、この待合室の氣分はどうも嫌やなのであるが、さうかと言つて、二等待合室のストウヴへあたりにゆく程のずるさも彼にはなかつた。で、彼は心持だけ首を縮めてオオバアの襟を立て、それで口元を輕く掩うた。

——生活つて、畢竟氣まぐれなものなのだ——

彼はこんな風に考へることに依つて、思はず微笑まされた。

考へてみれば、俊子がこの寒い十二月の夕暮にショオルをたつた一枚買うために、わざわざ大阪まで出て來ると言ふのも氣まぐれなのであるが、今朝、彼女にショオルを買つてやらうと遂い言つてしまつた彼自身も確に氣まぐれなのであつた。彼は今日一日をこのショオルのために暮らしたし俊子も多分この氣まぐれなショオルを樂しんで、今日一日を送つて來たに違ひないのである。

『あら、兎がをらなくつてよ。二匹ともをらなくつてよ。』といふ俊子の吃驚したやうな聲を庭先に聞いたのは、今朝の六時頃であつた。一寸嫌やだが起きて探して廻らなければならないなとは、直ぐ考へたのではあるが、彼が未だ起き澁つて寢床でぼんやり考へ込んでゐる枕元へ、直ぐ兎のやうに跳び出して來たのは俊子であつた。

「それごらんなさい！』彼女は早速純三を責めにかゝつた。『兎が二匹ともをらなくつてよ。犬に

られたのかも知れないわ。二匹ともよ！あなたのすることは何でもかうよ。誠意がないのよ。あんなにあたしが頼んでゐるのに、昨夜は兎をちやんと戸内へ入れといて下さらなかつたからよ！』

『箱を入れて、ちやんと藷を掛けといたのだよ。』初まつたぞと思ひ乍ら、純三は慌てもしないで笑つて答へた。

『兎は生きてゐるのよ！藷ぐらい食ひ破つてしまひます。』

『兎が生き物なら仕方もないよ。向ふが逃げ出したい氣なら逃がしといてやるんだね。』

『あなたはそれだ。いつもそれだ！鶏にだつて、あなたは近頃餌一つやらうとなさらないぢやありませんか。あたしの頼んだことはいつもいゝ加減にしかして下さらない。誠意がないのよ！』

純三は俊子がいつもの癖で、直ぐ自分をわる者にしてかゝる無邪氣さは可愛いゝとは思ふのであるが、こんな些細なことに直ぐ本氣になつて、自分を不誠實呼ばはりをし初める彼女が、幾分は淺つぽくも思へて、女つて、どうしてかうものにむきになるのかしらと、可笑しくもなり初めた。が兎が彼女を早朝から不氣嫌にしてしまつたのは事實であつた。

二人が大阪の騒がしい街を嫌つて、茨木驛からまだ十丁程も山手の方へ家を借りたのは、彼等が仲人なしの結婚をしてから少時後であつた。新しい結婚生活と珍らしい郊外生活とは、貧しくはあつたが二人を充分幸福にさせた。狹い畑を借りて夏は茄子や胡瓜を植えて、意外にも見事に熟つた野菜の數を數へたり、冬は附近の百姓から二三錢で分けて貰つた水菜やしやくし菜などが大きくなつて、充分役にたつのを友人達への自慢の一つにしたり、黑色ミノルカのよく肥つたのを五六羽飼つたりして、二人はすでに三年程を暮らして來た去年の秋には葉子が生れた。人には目だゝないが二人の生活は充分平和で、幸福であつた。葉子のためにと言つて二匹の可愛いゝ白兎が貰はれて來たのは數日前であつた。俊子の希ひで、純三がその兎のための小舍を作らへる筈であつたのを、つい〳〵時間がなかつたり、氣が進まなかつたりし

て今日まで延ばして來たのであつた。で、兎は假りにサイダアの空箱の中で夜は寢かせてゐたのである。

朝食の時も俊子は氣嫌わるく拗ねてゐた。内心はちつとも怒つてゐなくても、純三の方から氣嫌をとつて貰はなければ、自分で自分の氣分を自由に轉換し得ない程、彼女は小心で一途な女であつた。今日まで決して彼女の方から氣嫌をとつてくれたことがなく、いつも定つて自分の方から彼女をあやしてかゝらなければならないのを、彼は今朝も一寸は淋しく思つたが、このまゝ自分が大阪へ出てしまへば、その留守の間を獨りくさくさした氣分で夕暮まで送らなければならぬ彼女の氣持や、夕暮社から歸つて來て又彼女の不氣嫌の續きを見せつけられる自分の氣持などを想像すれば、少しはこごもらしくて馬鹿らしくもあるが、彼女の氣嫌を今のうちに眞つ直ぐにしてをかなければならないのであつた。

『今日の夕暮葉子を連れて大阪へお出でよ。』

彼は和解しやうとかゝつた。『今日は暖かさうだ。』

『嫌やです。』彼女は一言で答へた。

『年末の賑やかな街をぶらぶら歩いてみるのも亦一つの趣味だよ。』

『一人でどこへでもいらつしやい。』

『ショオルを買はうよ。』彼は勢ひに乘つて言つてしまつた。『新しいのを買はうよ。あれで二年も我慢して來たぢやないか。』

『あれで結構です。』彼女は幽かに笑つて、そんなお金がどこにあると言ふ顔をした。

『ふん。今度のは毛糸の手編みぢやないよ。も少しましなのさ。』

『あれでも絹入の毛糸が二ポンドも要つたのですよ。』

『三十圓もあれば、一寸した平常用のが買へるだらうね。』彼は狡猾らしく微笑つて、彼女の目の動きを覗つた。

『ようもまあ、平氣でそんな出鱈目が言へるのね！』彼女は釣り込まれて微笑つてかゝつた『三圓のお小遣ひも有りやしないのに！』

『無いやうで有るのが僕の甚さ。』下らない洒落だ

とは思ひ乍らもありもしない髭を觸つてみせた。』

『今日午後、或る雜誌社から少々原稿料を受け取る筈なんだよ。』

『そんな貧相な髭でショオルが買へてたまるものですか。』彼女はくつくと笑つた。

『兎がショオルになるのさ。』

これでいゝ、これでいゝと、純三もつい上氣嫌になり乍ら、午後四時五十七分發の汽車で必ず大阪へ出て來るやうに、彼女に强ゐて約束させた。夕食も久しぶりで大阪で御馳走を食べやうと話したで、彼女も不承々々に氣嫌を直してやつたといふ風をして、彼を玄關に送り出したのである。が、二人には互に相手の胸中が察しられて、充分幸福であつた。

後に殘された彼女が、まだつい此の間初めての誕生祝ひをすませたばかりの葉子を氣嫌よくあやし乍ら、一日の仕事をせつせと片付け、午後二時から沸く町の錢湯へも第一番にはいり、葉子には先日編んだレスタア糸の帽子や服を着せて、こどものやうに樂しんで早くから停車場へ驅けつけ、間違ひもなく約束の汽車に乘つて來る有樣が、彼には樂しい氣分ではつきり。想像が能きた結婚生活の樂しさと言ふやうなことを、今日まで特に意識的に考へたりしたことは彼にはなかつたのであるが、あゝだつたかうだつたと考へてゆくと、つういうかうかと過して來た今日まで三年間の二人の生活も、相當幸福で、樂しく、明るいものでもあつたと、靜かな滿足の情が彼をしんみりさせた。たつた一枚のショオルを俊子に買つてやるのでさへ、かうして二人を充分幸福にしてくれるのだと思へば、誰もが一言で言ひ切つてしまふ生活と言ふ言葉の內容が、隨分複雜であるのに今更らのやうに驚かされた。

彼は大阪へ出るなり直ぐ、彼の出てゐる新聞社の學藝部から、一應はその雜誌社へ先月の原稿料を頂き度いと電話してみた。半分は豫期してゐたやうに、もう少時待つてゐてくれとの返辭であつた。で、彼は直ぐ同じ電話で某與信所にゐる友人に、原稿料がはいれば直ぐ返すからと、金の都合を賴んだ。夕暮どこそこのコオヒイ店へ來てくれ

るなら、その時までに間違ひなく、都合してをくとの答であつた。で、夕暮、彼は五時でないと出られない社を四時過ぎには出てしまひ、途中でその友人とコオヒイを飲んで三十圓の金を受け取るなり、大急ぎで、停車場へ驅けつけたのであつた——生活つて、畢竟、氣まぐれなものなのだ。——。

朝から可成りこだはつて考へて來た生活と言ふことが、今では、畢竟、氣まぐれなものだと言ふ安易な結論へ落ちて來てゐた。大抵のことは、人間は自分の氣まぐれ一つで遂行してしまふのだ。人を愛したり憎んだりするのも、一つの氣まぐれだと思へば思へなくもない。氣まぐれに勿體振つた名を付けたり理由を考へたりするのが、大抵の者の生活だと言へるやうな氣がし初めてゐた。こゝにゐる大勢の旅客にしても、是非とも行かねばならぬと言ふ突き詰めた事情があつてゞはなく、唯その時々の氣まぐれで、行つたり來たりしてゐるのだらうし、自分が望みさへすれば、向ふにぼんやり立つてゐる青年と自分とが非常に親しい友人同志になれるかも知れないし、自分の出方に依つては、彼を激昂させて自分を殺させることが能きるかも知れない。自分がそんな氣にさへならなければ、自分と俊子とも生涯結婚しないで濟んだらうし、自分がさう言ふ風に希ひさへすれば、向ふに座つてゐる婦人と自分とが死ぬ程親密な關係にならないとも限らない。氣まぐれがその度を恣に越え初めては、手が付けられない程仕方がなくなる。悸ろしくなる。氣味惡くなる。不思議になる。わからなくなる。嫌やになる。結局、世の中と言ふものは、自分が滿腹の時と飢えた時との氣持の相違に依つて、どうにでも作り變えることが能きるものだといふ氣がし初めてゐた。自分にそんな自信があると言ふのではないが、俊子を自分の好むやうな妻にしあげることも能きやうし、すつかり嫌やな女にしてしまふことも能きさうで、幾分自分と言ふものが氣味惡くもなり初めた。で今夜のこれからの數時間を、自分と彼女とが氣嫌よく夫婦らしい氣持で樂しまふと思へば、それも容易く能きることに氣がついて、彼には、數分間

後の妻との會合が非常に愉快な氣分で待たれ初めた借りて來た三十圓の金を無駄にしたくはないと彼は獨りで意味深く微笑んだ。

彼は汽車の到着の三分前から、改札口で彼女を待つた。汽車の着いた時は、彼は母に遭ふ少年のやうな懐しさで、我れにもなく伸びあがつて、動く人混みの中を彼女を目で探した。

につこり笑つて片手を擧げた者があつた。彼女であつた。彼はその邊の人々を横切つて彼女に近付いた。

『さうれ、父うちやん』彼女は負んぶした葉子を先づ彼に見せた。

『うむ。よう來たね。』彼も思はず微笑んで、葉子の紅い頰を指先で愛撫した。

葉子は新しい帽子を着て瞳を大きくしてゐた。俊子は朝のことはすつかり忘れて女らしく上氣嫌であつた。彼はしみじみした明るい氣分で、妻と愛兒とを見比べた。

外には風が少しあつた。空は低かつた。冬の早い夕暗が、すでに大きい街の上へ靜かに下りて來てゐた。久しぶりに見る街の激しい雜沓を、俊子は珍しいものを見るやうな風に見廻はした。純三は、一寸意外な顏をして躊躇する彼女を、タクシイに乘せて、自分も彼女の側へゆつたりと腰を下ろした。小型のタクシイは早くもなく遲くもない速力で、夕暗の中を靜かに走つた。

少時の時間を、二人は妙に默つてゐた。

戀愛時代と言ふやうな限られた或る特種な時代が、ほんたうに人間の生活にあるものとすれば、彼等にも相當樂しかつた戀愛時代があつたと言つてもよかつた。が、その頃の一つ一つの懐ひ出にも、唯二人で夕暮の街をタクシイで散步に出かけたと云ふやうな場景は思ひ出せなかつた。で、一寸したこの氣まぐれが、二人に或る仄かな感動を強ゐたのは明らかであつた。

『すみません。』

少時して彼女が目を伏せて愼ましく囁いた。

『氣まぐれ者だね。』

彼は微笑つて彼女を凝視めた。

『あたしの我儘を宥して頂戴。』

彼女は彼の手をおづおづ唇へ持つていつた。彼は默つて彼女のするまゝにさせた。彼女の人より長い睫毛が仄暗い光にきらきらした。車體の一寸した動搖に、彼女の涙は砂つぶのやうに搖れ落ちた。彼女は兩手で急いで顏を掩うた。彼の胸はいつにもなく情熱的にかあつとして來た。

二人がタクシイを棄てたのは日本橋の南詰であつた二人はすでに朝の二人ではなかつた。二人は互に全部の信賴を投げかけ合つてゐた。二人は再び二人を戀し初めてゐた！他のどんな男女の連れよりも親しさうに、彼等は肩を並べて歩いた。

街燈は酒のやうに濁つて亂れてゐた。斷つてをくが、純三は所謂原稿生活者には不似合のやうだが、酒や煙草には性來少しの趣味も有たず、金の有る時など、日本橋筋の古本屋を何を探すともなくぶらぶらと本を見て歩く位が、極めてよい意味での彼の道樂の全部なのであつたが、今見る街筋の明るく目まぐるしい灯は、彼には何故ともなく濁つた酒のやうだと言ふ印象を與へた。で、當然のやうに、彼はこの街の灯に輕く醉つて、愉快に昂奮させられたのであつた。

——俊子が自分を愛してゐるのは、決して、彼女の氣まぐれからではない。——

不圖、かう考へることに依つて、彼は二人のこの幸福を强く意味付けないではをれない氣分にされた。かうまで快い滿足が單なる氣まぐれから得られたとは、今の彼には考へられなくなり初めてゐた。さうだわかりきつたことだが、俊子は自分を氣まぐれで愛したのではなかつた。自分は氣まぐれから彼女と結婚したのではなかつた。二人はさうしないではゐられない。同志だつたのだ。二人の生活は氣まぐれな遊戲ではなかつた。二人はかうしないではをられなかつたのだ。二人がかうしてこゝを歩いてゐるのも、單なる氣まぐれではなかつた。二人が激しく愛してゐるからだ。二人は他の誰よりも必然に二人であつたのだと彼には考へられ初めた。さうだ。自分にかうまで信賴しきつてくれる者はこの騷がしい雜沓の中に俊子唯一人だ、自分がほんたうに愛し得る者もこの廣い都會に彼女一人だといふ感動が、續いて彼の胸を

衝いた。彼は今更らのやうに俊子を可愛ゆく思ひ初めた。俊子程自分に似つかはしい妻はないと考へ初めた。俊子程美しい女はないとさへ眞面目に思ひ初めた。彼女は行き交ふ同年輩の女達のやうに、充分美しくはなかつた。否、完全に美しくはあつたとしても、充分他の注意を奪ふ程派手やかに装うてはゐなかつた。勿論、葉子を負んぶしてゐたからではあるが、よし葉子を連れないで唯一人で街筋を歩いてゐたとしても、一見人妻だとわかる程着實な風を彼女はしてゐた。が、彼は、この生地のまゝで美しい横顔を、一杯の滿足をもつて眺め乍ら、多くの美しく派手に装うた男や女の混み合ふ中を歩いてゐたのである。

彼等は或るレストランの食卓に向ひ合つて席をとつた。温いものをとり乍ら、二人は微聲で親しい會話を續けた。

『葉ちやんはもうねん寝してしまつたのね。御馳走が食べさせてやれないわ。』

『うむ。ママが二人分食べればいゝさ。おとなしい親孝行な奴だね。眞つ赤な頬つぺたをしてゐるよ。』

『えゝ。暖たかでいゝ氣持なのよ。』

——さうだ。人が聞いたらつまらないことを話してゐやがると思ふだらうが、こんな些細な輕い會話も、自分達には充分な意義があるのだ。——と、彼は滿足して彼女の言葉をしみじみ味つた。

『あのね。怒らないで言つて頂戴。』彼女は近々と彼に笑顔を寄せた。『あの、……今夜のお金ね。ほんたうにどうなすつたの。』

『先月「蒼空」に書いた小説の原稿料さ。今日は半分しか貰へなかつたが。』

『どうする心算で書いたの。』

『どうする心算つて、……あのね、近頃『近代劇大系』と言ふ全集の豫約募集をしてゐる本屋があるのだ。それが欲しかつたから、餘分に五六十圓働かうと思つたのさ。』

『ぢや、ショオルなど買はないで、是非それをお買ひなさいな。あたし、もう一年このショオルで我慢するわ。』

『否や、本なんて言ふものはいつでも買へるさ。

なければならないと言ふ程のものでもないさ。シヨオルを買つとく方がうんと家庭圓滿だよ。』

『おぼえていらつしやい！』

食後の果物を彼は注文した。

『あ、さう、さう、自家ぢや今日はいゝことがあつたのよ。』

『指輪でも拾つたのかい。』

『いゝえ、冗談ぢやないのよ。……兎つて、ほんたうに果物の食をよく食べるのね。』

『兎が又どうかしたのかい。』

『えゝ、ごめんなさいね。』彼女はこどものやうにくつくつと聲を忍ばせて笑つた。『あたし、隨分腹が立つたから今日は朝つばらからあんなことを言つてしまつたでせう。……その兎が、あなたが出なすつて少時してから、無事に歸つて來たのよ。』

『なあんだ。』彼は馬鹿らしい程愉快になつて來るのを覺えた。『それを今まで故意と默つてゐたのかい。』

『つい忘れてたのよ。』彼女も輕く燥いだ。『近所の百姓が連れて來てくれたのよ。二匹が揃つて、その百姓の納屋の中へはいり込んでゐたのですつてで、あたし困つてしまつて、思ひ切つて、鷄小舍の中へ兎を放してやつたら、鷄と兎とがとても仲がよいのよ。鷄は兎をつつ突きはしないし、兎は鷄の餌まで美味さうに食べるのよ。兎が小麥なんかを食べるとは知らなかつたけれど、鷄にやつたのを平氣で嬉しがつて食べるのよ。唯林檎の皮を投げてやつたら、鷄がめんくらつてゐる間に、兎がさらさうに食べて見せるのよ。』

『それで目出度し目出度しさ。家庭圓滿なのが一番いゝよ。』

レストランを出て、二人はその邊の雜沓の中をぶらぶら歩いた。年末のこの邊は、而も丁度人の一番出盛る今の時間は、すでに二人の想像以上の人混みであつた。何も彼もが露骨に銘々の自我を主張しあつてゐた。都會といふものゝ美しさと淺ましさとが、同時にそこにあつた。都會をまぶしい灯のかたまりだと決めてかゝるには、あまりに騷がしかつた。都會を激しい音の集りだと決めてかゝるには、あまりにまぶし過ぎた。都會を一種

の死んだ建築叢だと考へることは、すでに當らなかつた。全ての建築物は、大空が黄昏の光と影とを投げかけると、その藝術の衣を脱ぎ棄てゝ、一つの眞面目くさつた道化になり下つてゐた。何も彼もがごたごたしてゐた。何も彼もがぼんやりした。愉快なのか不快なのかわからないあいまいな感動が、皆を一杯に意地悪く昂奮させてゐた。誰も彼もが、一杯に調子高く話したり覗き込んだり歩いたりしてゐた。都會の有つ魅力が、病的なものだとはわかつてゐ乍ら、何だか懐しく親しいものに思へさうであつた。で、大抵の人々は、極く常識的に考へて、蒼暗い森の奥の墓場の附近を歩かうより、かうした街筋の雑沓の中へ好んで自分自身の感覺をまで晒してしまはうとするのであつた。生活が墓場の側にはないと、彼等は初めから決めてかゝつてゐた。が、今の幸福な純三の意見に從へば、何處にだつて、人々は自分の生活つて言ふものを好みのまゝに發見能きるのである！彼は、すでに、都會の雑沓の中にも、停車場の人いきれの中にも、生活を見付け出してゐた。否。すでに、彼は彼の愛する俊子の胸の中にも、彼自身の生きた生活を發見してゐた。で、自分が幸福に生きやうとさへ希へば、人間は誰でも必ず充分幸福に、五十年を生き通すことが能きるのだと言ふ極めて常識的な平凡な結論へ落ちてゆくのであつた。で、彼は現在の自分自身に文字通りの滿足を感じた。自分達二人が極く平凡な幸福な夫婦だと言ふ感じが、彼をこつそり微笑ませた。

冷い風が過ぎた。空には極めて小さい星が光つてゐた。戎橋を北へ渡る時、彼の手がそつと彼女の手に觸れた。彼女は星のやうに輝いた瞳で、この人のいゝ夫の眼鏡を覗き込んだ。

朝から問題のショオルは、彼がどんなに勸めても、彼女はいゝのを買はうとはしなかつた。自分のを買ふ代りに葉子の靴下や玩具なんかを買つてやりませうと、彼女は言ひ張つた。ショウヰンドウを覗き込んだり、店先きに立止つたりし乍ら、樂しんで歩いてゐる彼女を、彼は珍らしいものを見るやうに見乍ら、同じやうに立止つたり歩いたりした。

すつかりの買物の白い紙包みが、ぶきやうに彼の手にぶら下げられた時、彼女は胸一杯の滿足からにこやかに笑つて見せた。

『あの、終列車は何時？』

『十一時半過ぎだつたと思つてゐるが、』彼はポケットを探つた。『まだまだ時間はあるよ。』

『えゝ、だから、もう一度あと戻りして道頓堀を歩いてみない？……あたし、久しぶりに村から出て來たんですから、今頃歸つてしまふのは惜しいわ。』

『なんだつたら、キネマを見てもいゝよ。』

『ねゝ、屹度見せて頂戴。』彼女は正直に嬉しがつて燥いだ。『ちや、大急ぎであと戻りしませうよ。先刻、どこかで『神を忘れし町』とか言ふのがあつたでせう。……あれを見たいわ。』

――なんだつていゝ、あと終列車までには三時間ちよつとも時間があるのだ。この時間をとも角も充分樂しめばいゝわけになる。――

で、彼等は再び肩を並べて道頓堀の方へ歩き初めた。彼女はこどものやうに急いで歩いた。彼は自分が彼女のいゝ夫だといふことを充分意識し乍ら、大股に歩いてゐた。十七圓五十錢で買つた流行物のショオルの包みが、氣持のいゝ重さでゆらゆら搖れてゐた。

舟を呑むの魚は枝流に遊ばず



◎都計案確定

内務大臣より大阪地方委員會諮問にかゝる大阪市更正都市計畫事業案に對する第二回特別委員會は二十七日午後一時二十分より中之島中央公會堂に於て開會當日は神戸鐵道局の山本改良事務所長も出席したので市側委員として岩田土木部長より路線其他について一應の説明をなし直ちに討議に入つたが前日來修正意見を抱きつゝありし委員も財政計畫の點等に顧慮して原説を保留し左の如き希望條項を附して全部原案を認め茲に十箇年の繼續事業として二億八千九十四萬四千圓を以てする大阪市の都市計畫事業即ち二十四間の南御堂筋線以下四十路線の新設、及び主要橋梁八十二橋の不燃質架替へ並に十八萬坪の道路舗裝、六萬七千坪の道幅整理（軒先切取）事業の根本が決定した譯で之れを來月一日又は三日に開會の豫定である地方委員總會に報告しその答申を委員會長たる中川府知事より内務大臣に申達すれば閣議を經て内閣示を以て發表される空前の大事業は斯くて最後の決定を見るのである

希望條項

一、原案は御堂筋線の工事は大正十四年後に於て難波道頓堀間の工事を施し十五年度に於て（北濱淀屋橋南詰以南）道頓堀間の工事に著手し路線は兩端より各事工を進むる事となれるも此は全部北濱即ち北端より起工して順次南方に及ぼすこと、されたし

二、堂島、十三線は國鐵西成線及び阪神電鐵の交叉が工事上に困難を伴ふべきを以つて、實施に當り附近住民は迷惑を及ぼさゞる樣充分の考慮を拂はれたし

三、泉尾市岡線より東へ（淡町驛南方）を突き切り日本橋三丁目に連絡する新線を適當の時機に於て都市計畫路線として新設されたし

因に此の第三項の新設路線は都市計畫大阪市案の根本となつて居る市區改正委員會に於て既にこれが必要を認めて可決せるも關西本線湊町の驛の擴張を慮りて保留したるものであるから、阪市としては泉尾市岡方面開發のため適當なる時機に本路線を都市計畫中に追加する意見を有つて居ると

◎市街地建築法改正

現在市街地建築物法は六大都市に限り適用されてゐるが都市計畫法施行の其の他の二十六都市に於ても最に各關係各會議の席にて

現行の市街地建築物法を其儘適用することは困難なるばかりでなく實施上中都市の經濟狀態にては不可能であり且つ不必

要なる部分もある依つて吾々は此際市街地建築物法を幾部分か改正の上中都市に適用せられんことを希望するとの旨を述ぶるところあり爾來内務省都市計畫局に於て審議中のところ此程漸く不適用條項につき意見の決定をなしたので愈々本法を緩和の上二十六都市に適用することゝしたので不日法制局に廻附せられる筈である先づ本法施行令に規定せる(一)地域(二)建築線(三)防火地區(四)屋上制限は其儘とし(一)建物の空地面積(二)建物高さに關する規定は除外するに決し施行規則に於て(一)美觀地域(二)工事執行規則の一部(三)構設造備に關する規定を除外して其他を適用する結果除外條項は左の如くであるがこれが爲に經費は要せないことになつてゐる

一、施行令　第四條乃至第十六條

二、施行規則　第七條乃至第二十六條△第廿八條乃至第百四十二條△第百四十四條

◎建築資料展開催

東京府が主催で去る五月に商工奬勵館で開催した復興記念建築資料展覽會は規模が小さかつたのに拘らず、非常な好成績を收め出品人を始め一般から是非もつと大規模な催しをして貰ひたいといふ申込が頗る多かつた、府でも最初からその希望があり出來るなら上野あたりで博覽會を開いて見たいと思つてゐたが、東京府では平和博で八十萬圓からの大穴を明け博覽會には手古摺つてゐるので俄に斷行しかねてゐる、併し豫算は府の豫算とは別にして來春上野で大規模に展覽會を開催する筈でそれには府の外に東京市及び群馬、埼玉、千葉、神奈川等罹災地の各縣も參加する筈で目下計畫を進めてゐる

◎復建會社へ低資

復興貯蓄債券收入金運用協議會第一回を近く行はるべき豫定であるが今回東京商業會議所、東京實業組合聯合會外數種の實業團體を以て組織さるべき復興建築會社の實現に對し政府より低利資金の融通を受くる根本方針が未だ決定しないので開會を見るに至らざる次第であるが大藏當局は既に同會社の設立計畫に對し計畫者側の意見を聽取すると同時に市村市長の意見をも熟知し居るを以て同社に對する低資の融通を行ふことに内定した併し東京市側作成の同會社案に依る時は政府は今後五ケ年間毎年二千萬圓宛即ち合計一億圓の低利資金を融通することゝなり、之を復興債券の收入金中より支出すれば復興債券發行額　億圓中半額を貸付くる豫定なるを以て其割當全部を建築會社に貸付くることゝなり同會社以外の諸方面に對する復興資金の融通は全然不可能のことゝなるので、右會社に對する貸付額は計畫額より遙に少額ならしむる必要がある、而も會社の性質は單なる商法上の一會社に過ぎないから同社が政府より融通を受るべき形式は單純にて借入金として取扱はしむべきことゝなる等、此の間に於て相當に考究すべき餘地を存するものと云はれて居る、尤も同社は政府の援助がなければ成立し得ざる計畫となつて居るので、要求の低資額を減額せしむるか、或は復興債券收入金以外に預金部より支出するか何れかに決定さるゝ筈であると

◎煤煙防止建築令改正

都市に於ける煤煙問題は商工業の發達に連れて發々喧しくなつて來たが殊に最近は諸官廳及ビルヂング等に於てもストーブ又はスチームの設備上各方面に大規模の煙筒を築造するに至り之が爲め都市の美觀を損ふこと甚しいと共に衛生上又由々敷い問題であるので内務省は頃日來右取締に就て種々攻究中であつたが結局本問題は都市計畫法及市街地建築法の精神を酌んで解決するの外途なしとし愈々近く省令（市街地建築物法施行規則の改正）を以て一定の制限を設けるに依つて取締るに確定したと云ふが尚目下大藏省に於て築造中の煙突に對しては各方面から相當非難があるので過日堀切都市計畫局長から其使用上に就き一應警告を發した所既に工事完了に近い爲め根本的に改良は出來ないけれど燃料及内部の設備は十分注意するとの回答があつた而して市街地建築物法施行規則の改正要點は

（イ）煙突築造の程度を各地區に依つて制限し（ロ）且つ煙突に使用する瓷の設備を嚴にし（ハ）更に炭實を制限すること等三點であると

◎木材の規格統一

關東と關西とは昔から材木の長さが違ふ交通の不便であつた當時に各城下々々によつて思ひ〳〵に定めた寸法をそのまゝに踏襲してゐるからで東京の一間材が六尺七寸であるのが大阪では六尺五寸から六尺五寸まであつて從つて建築の上にも大きな違ひが出來てゐる。東京の八疊の間は實に關西方面の八疊の間より一割方小さい之を知らぬ大阪商人が佛震當時にしこたま仕込んで行つた疊が肝腎の東京の間には大き過ぎて大損をしたといふ喜劇もあつて地震後殊に木材の全國的規格統一がやかましくなつてきた東大の右博士等は躍氣となつて運動し木材規格統一案を作つてまづ東京大阪名古屋秋田の木材業者に計り木材の寸法を一定することに話を進めてゐたが地震後更に此を全國的にこの際斷然と統一すべきであると建築學界日本建築士會日本建築協會建築業協會等が政府に建議したところ農商務省の方でも既に調査中のことであつたので直ちに意見が合致し農商務省山林局や山林會建築業者木材業者が歩調を揃へて全國木材の寸法名稱材料の規格統一を行ひ更に進んでは煉瓦瓦石材の寸面規格をも統一すべく農商務省では各地方の大林區署や地方廳に調査方を命じて本月中に意見を申述べるべく照會してきたこれによると今まで一間として取扱つてきた從來の木材の長さは二米に改め厚さも一分板から八分板まで從來數十種類もあつたのを八種類に定める等木材の品等も定めて現物を見なくても賣買の出來るやうにも考へてある、從つてこれが實施の曉には建築物に於ても從來のものより高さに於ても廣さに於ても一割方大きくなつてゐるが實施までには多少の年限がかかるものと見られてゐる

◎新市域の行政區決定

大阪市の接續町村編入區域に新設すべき行政區に就ては過般來府市當局の間に協議中であつたが十七日の府市打合會の結果愈左の五區を設くる事に決定した其の區域は左の如くである

第一區　中津町、豊崎町、神津町、北中島村、西中島村、新庄村、豊里村、大道村、中島村
第二區　鷺洲町、稗島町、傳法町、歌島村、千船町、川北村、福村
第三區　鶴橋町、中本町、生野村、小路村、神路村、城東村、榎本村、鯰江村、榎並村、古市村、清水村、城北村
第四區　天王寺村、住吉村、北百濟村、田邊町、平野鄉町、南百濟村、長居村、喜連村、依羅村
第五區　今宮町、玉出町、粉濱村、墨江村、安立町、敷津村、津守村



役員及職員

副會頭　片岡安
理事長　理事　池田寶
主記　理事　中澤誠郎
同　理事　今林彦太郎
主計　理事　松本禹象
編輯　理事　佐藤彰美
同　理事　本多二郎
同　理事　伊藤正文
同　理事　田中綱
同　理事　谷口雁兒

編輯係　江村邨邨　薦田夏次郎
庶務係　西谷節　鷹取陽
會計係　田村春松　大和榮衛

會員	三六六	會員（地方）	一五三
名譽賛助員	七八	終身賛助員	五六
特別賛助員	三〇	普通賛助員	五二
合計（十一月二十日現在）		一一九五	

本誌及廣告料定價表

本誌	本冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳拾四錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓

特別頁モ料金定シアリ御照會アリ度シ

大正十三年十一月廿八日印刷
大正十三年十二月六日發行
（毎月壹回一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人　江村恒一

大阪市東區內淡路町一丁目廿一番地
印刷兼印刷人　大阪活版所

大阪市北區堂島濱通一丁目一番地
發行所　日本建築協會
電話北四二九一番
振替口座大阪三九七五

大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店　櫛々堂書店
電話（土佐堀四四〇番）
振替口座二一八七番

日本建築協會々報



會報

一、建築職工敎化講習會のこと

豫て報告いたしました通建築業協會關西支部と本協會との聯合主催を以て建築職工敎化の目的で鐵筋混凝土工講習會を南區東賑町大阪市立桃園第一尋常小學校に於て開催をいたしました會期は本月四日より十八日迄二週間の短期間ではありましたが熱誠ある講師の講演と非常に熱心なる聽講者とにより十分の効果を認めました聽講者總員百四十六名内百十五名に對し修了證書とメタルとを授與いたしました、茲に講師並關係諸氏の御骨折を感謝いたします聽講者の科別人員數及時間割左の通

三科(假枠工、鐵筋工、混凝土工)受講者　三二名

二科(假枠工、混凝土工)同　五名

二科(鐵筋工、混凝土工)同　三名

假枠工　六一名

鐵筋工　二八名

混凝土工　一七名

計　一四六名

鐵筋混凝土工講習會時間割

大正十三年十一月四日(火)午後正六時開會

日本建築協會建築業協會關西支部幹部挨拶

講師ゟ各委員列席

日本建築協會敎化委員長古宇田實氏講話

各科共通講話、十一月四日(火)午後七時ー八時波江悌夫氏鐵筋コンクリート起原其他概論、八時ー九時同上、

假枠工科、同　五日(水)午後七時ー八時中島智喜氏假枠用材及器具八時ー九時假枠材仕上方及接手、

同　六日(木)午後七時　八時ト浦光衛氏局部假枠構造法八時ー九時同上

同　七日(金)午後七時ー八時本多二郎氏假枠取外期限並其取外方法八時ー九時同上

同　八日(土)午後七時ー八時八木幸次郎氏假枠施工法ノコンクリート建築ニ及ホス影響八時ー九時同上(實例ヲ示ス)

鐵筋工科、同九日(日)午後七時ー八時井上新二氏鐵筋用材料及其種類ト強度八時ー九時同上

同十日(月)午後七時ー八時渡邊圭吾氏鐵筋用器具並其取扱方法八時ー九時同上

同十一日(火)午後七時ー八時中島智喜氏鐵筋ノ配置ト接合法八時ー九時局部配筋法

同十二日(水)午後七時ー八時八木幸次郎氏鐵筋施工法ノ建築ニ及ホス影響八時ー九時同上(實例ヲ示ス)

混凝土工科　同十三日(木)午後七時ー八時下浦光衛氏コンクリート用材及其調合ト強度八時ー九時同上

同十四日(金)午後七時ー八時渡邊圭吾氏
コンクリート用器具並其取扱方法八時ー
九時同上
同十六日(日)午後七時ー八時谷口廉兒氏
コンクリート施工法八時ー九時同上
同十七日(月)午後七時ー八時堀田清氏コ
ンクリート施工法建築ニ及ボス影響八
時ー九時同上(實例ヲ示ス)
各科共通講話　同十八日(火)午後七時ー八
時波江悌夫氏
震火災ニ對スル鐵筋コンクリート建築物
ノ成績實例七時ー八時同上
大正十三年十一月十八日(火)午後八時
修了證及メタル授與式擧行
日本建築協會建築業協會關西支部幹部挨拶
講師及各委員列席
二、理事中村琢治郎氏(主計擔當)は今回復
興局技師に轉任されました爲理事及都計
委員辭任を届出になり本月十九日の理事
會に於て承認されました
三、今回工政會理事長より左記事項揭載方
依頼がありました爲參考登載いたします

工業組合法建議

農商務省では工業の發達助成のため工業組
合法制定の意嚮あり目下立案中であるが之
に對し工政會では今泉工學博士を委員長と
して研究せる結果左の成案を得て十月二十
五日同會理事長斯波男農商務省に出頭建議
ぜる處大體當局の意見も之に一致せる事明
となつたため尚よく意見を交換して退出せ
る由

工業組合法に關する建議

小工業又は家庭工業にして同種の業者相當
集團せる地方に於ては現行産業組合法に基
きて組合主義を工業上に活用せるもの少な
からず、これ等は將來一層奬勵助成の必要
あるものと認むるを以て産業組合に關する
法制等も漸次工業者の組合組織に適應する
樣補正すると共に、大中工業に對しては
從來組合主義の活用甚だ不充分なるを以て
政府は工業組合法を制定して此の方面の缺
陷を補ひ以て企業組織を整備し産業の發達
を圖り得ならしむるに努められたく而して工
業組合法の制　に當りては特に左の諸點に
留意せられん事を希望し茲に建議候也

大正十三年十月二十五日

工政會理事長工學博士男爵斯波忠三郎

農商務大臣高橋是清殿

記

一、工業組合の目的は共同販賣、購買、利用
資金の調達及び以上に附帶する諸施設の全
部又は一部とする事
二、組合の區域を認めざること
三、加入組合員數は其の最小限を制限せざ
ること
四、出資口數及び一口の金額は組合法に制
限せず定款に於て規定せしむること
五、總資本額を一定するを得ることとし從
て加入脫退に關しては之を定款に規定せ
しむること
六、組合員の議決權に差等を附し得ること
とし之を定款に規定せしむること
七、組合の利益配當は資本に對する配當及
び事業の分量に對する配當(即ち割戻し)
を認むること
八、組合員外に對する事業取扱は之を禁ず
るも特別の場合に限り定款の定むる所に
より之をなすを得しむること
九、其他諸般の規定は産業組合法を準用す
ること

鐵關稅改正建議

農商務省では目下鐵の關稅改正の計畫あり
既に大藏省と交涉中であるが工政會では鐵
のみの關稅を改正して之に關聯せる各工業
品に及ぼさる時は鐵加工品特に一般機械製
造業に大打撃を與ふる慨れあるを以て相關
係連絡ある各種基礎工業品の關稅は同時に
改正するを要する事を決議す月二十五日工
政會理事長斯波男爵等は農相を訪問建議せ
り

基礎工業品輸入關稅改正に關する建議

曩きに本會より基礎工業振興に關し建議せ
る際　礎工業品に關する輸入關稅を適當に
改正せられんことを希望する所あり本會は
政府が重要なる工業振興策の一として速か
に之を實行せられん事を望むものなりと雖
も其實行に當りては各種工業者の關係聯絡
等を愼重に考慮し相關聯せるものは之を同

時に改正する事とし一部の基礎工業品（例へば鐵等）のみの輸入關稅を改正するがために之を主要材料とする加工品の輸入を增加し更に之と密接なる關係ありてしかも關稅の改正せられざる他の基礎工業（例へば機械工業等）に打擊を與ふるが如き事なからんことを希望し茲に及び議候也

大正十三年十月二十五日

工政會理事長工學博士男爵 斯波忠三郎

農商務大臣高橋是清殿

會合

○鐵筋混凝土工講習會講師打合會

△日時　十月二十五日午後三時　九時

△會場　本協會會議室

△出席者　講師井上新二、本多二郎、渡部圭吾、谷口厚兒、波江悌夫、中島智喜、八木幸次郎、增田清、下浦光衛

役員池田理事長、今林理事、中村理事

教化委員小笠原銅、野呂長四郎

△記事　一、開會直に池田理事長より今回開催の鐵筋混凝土工講習會講師として御盡力を願ふことに付一場の挨拶をなし次て野呂教化委員より講習に關し特に注意を願ふ點に付希望を述ぶ

一、夫れより分擔に付協議の結果左の通決定し各分科會を開き夫々打合せをなし散會せり

各科共通講話十一月四日（火）波江悌夫氏鐵筋コンクリート起原其他概論

假枠工科同九日（水）中島智喜氏假枠用材及器具假枠材仕上方及接手

同六日（木）浦光衛氏局部假枠構造法

同七日（金）本多二郎氏假枠取外期限並其取外方法

同八日（土）八木幸次郎氏假枠施工法ノコンクリート建築ニ及ホス影響（實例ヲ示ス）

鐵筋工科同九日（日）井上新二氏鐵筋用材料及其種類ト強度

同十日（月）渡邊圭吾氏鐵筋用器具並其取扱方法時

同十一日（火）中島智喜氏鐵筋ノ配置ト接合法局部配筋法

同十二日（水）八木幸次郎氏鐵筋施工法ノ建築ニ及ホス影響（實例ヲ示ス）

混凝土工科同十三日（木）下浦光衛氏コンクリート用材及其調合ト強度

同十四日（金）渡部圭吾氏コンクリート用器具並其取扱方法

同十六日（日）谷口厚兒氏コンクリート施工法

同十七日（月）增田清氏コンクリート旋工法　建築ニ及ホス影響（實例ヲ示ス）

各科共通講話同十八日（火）波江悌夫氏震火災ニ對スル鐵筋コンクリート建築物ノ成績實例

○臨時理事會

△日時　十月三十日午後五時—八時

△會場　本協會會議室

△出席者　池田理事長、中澤理事、今林理事、松本理事、本多理事、谷口理事

△議事　一、鐵筋混凝土講習會に關する件

本件は講習會總ての講義を速記するや否に付理事長より該計畫を述べ協議の上決定せり

二、職員市內出張に關する件

三、會計錢衡

○定例理事會

△日時　十一月八日午後五時—十時三十分

△會場　本協會會議室

△出席者　片岡副會頭、池田理事長、中澤理事、伊藤理事、

△議事　一、十一月例會に關する件

十一月例會開催に關し左記事項に付協議可決せり

一、時　十一月十九日(水)午後六時
一、所　大阪市中央公會堂中集會室（北區中ノ島）
一、順序
一、講演1塗料に就いて
日本ペイント製造株式會社技師長
工學士　伊東　貞興氏
2大阪に於ける公園計畫に就いて
都市計畫大阪地方委員會技師
農學士大屋靈城氏（主記交渉の上決定）
二、研究　請負入札の方法改善に就いて
三、報告1秋季大會報告
2敎化委員會報告
3會務報告
二、評議員設置に關する件
評議員設置に伴ひ會則及細則に變更を生ずるを以て之れが下調査をなしたり
三、會員銓衡

○會誌表紙圖案審査會

△日時　十一月十二日午後五時―九時三十分
△會場　本協會々議室
△出席者　池田實、本田二郎、伊藤正文、長谷部鋭吉、小川安一郎、村野松吾、古宇田實、本野精吾諸氏
△記事　一、先づ審査方法に付協議し審査方針を定む
一、應募圖案總計九十九通に付一々精査の上審査を行ひ一等二等三等一席三等二席の四通及選外四通を選擇して審査決定せり

○臨時理事會

△日時　十一月十九日午後四時三十分―五時三十分
△會場　本協會々議室
△出席者　池田理事長、中澤理事、今林理事松本理事、伊藤理事、谷口理事
△議事　一、會誌表紙圖案審査會審査報告
一、會誌表紙當選圖案中採用圖案選擇の件來年度より會誌表紙として用ゆべき圖案に付選擇をなし決定せり
一、評議員設置に關する件
本件は本日例會開始時間の都合により次回理事會迄延期のことに決定
一、中村理事辭任届出に關する件
中村理事（主計擔當）今回復興局技師に轉勤の爲理事辭任届出に付同意のことに決定
一、會員銓衡

○例會

△日時　十一月十九日午後六時―十時
△會場　大阪市中央公會堂中集會室
△出席者　講演者伊東貞興氏
役員　池田理事長、中澤理事、今林理事松本理事、谷口理事
會員池田宮彦、小笠原銅、大倉直三、小津利一、岡田初太郎、小川安一郎、奥野時三加藤善吉、吉井長七、高橋榮治、田中寛造、高岡與三吉、瀧邦一、坪井誠一、中川彌八、中西六郎、中島智喜、植竹春重、浦英之助野呂長四郎、山中宗三郎、松本儀八、古橋剛丸。藤枚良一、福井義長、小寺彌一、阪井米吉、島田長馨、下浦光衛、姫野武、森篤次郎、森本藤吉、瀬戸文吾、鈴木末尾、須川廉太郎、武田經一、佐藤正次郎、石川寛三、高田利一郎、竹中景一
賛助員堀本兵一、石井久雄、新庄三郎、櫛田藤郎の諸氏
△記事一、定刻を過ぐる十分池田理事長開會を宣し講演開始の旨を述べ伊東貞興氏を紹介す、同氏は左の題下に時餘に渉る有益なる講演をせられ拍子の裡に終了
塗料に就いて
日本ペイント製造株式會社技師長
工學士　伊東　貞興氏
一、講演後松本氏外二三の質問ありて後池田理事長立つて講演者に對し感謝の辭を述べ一同拍手を以て之に和す
一、次で研究會に入り池田理事長座長となる左の問題に付て研究討論をなせり
問題　請負入札の方法改善に就いて
松本理事立つて本問題提案理由を說明して愈々研究に入り小笠原氏ト浦氏池田氏森本氏今林氏松本氏ら他の改善法に付意見を述べられ實に有益なる意義ある會合なりき

○新入會員及賛助賛

會員の部

森田　富君　西區九條南通三ノ三一九
中島　富造君　神戸市永澤町三ノ六六
長島　角二君　兵庫縣武庫郡西宮町宮西二四五
矢木　英夫君　府下東成郡東天下茶屋吉野通二一三〇
笠井　正一君　神戸市西山町四ノ四四
松下甚三郎君　兵庫縣御影町柳ノ川八七二
青柳　貞世君　府下豊能郡岡町幸通三竹中寮内
錦織喜代次君　府下東成郡西天下茶屋橋通四ノ八〇六
鈴木　未尾君　兵庫縣川邊郡小田村長洲石ノ戸一四
鹽路　惣吉君　府下東成郡天王寺村天王寺一二三〇
木村勝次郎君　西區江戸堀上通一大林組設計部(現時入營中)
平尾小三郎君　兵庫縣川邊郡小田村常光寺塚ノ本一四八

地方會員の部

中西　十一君　熊本市米屋町一十八銀行建築場大林組出張所

普通贊助員の部

秋山友次郎君　門司市谷町一
海上　靜一君　府下豊能郡中豊島村曾根二六八
井上利男方
小林鎌太郎君　東京府豊多摩郡大久保町西大久保三九
土井麟太郎君　門司稅關內入藏省建築課出張所

○退會會員及贊助員

會員古谷芳三郎君、同西山良太郎君、同元良勳君、特別贊助員岩本勝君、普通贊助員磯吉一君、同平林龜五郎君、同大野文次郎君、同梶本福太郎君、同川邊次男君

○住所勤務先異動

會員の部

關　鐵男君　府下東成郡今里片江四三八
高柳　宗一君　西區市岡町二九三ノ二一
日比　安平君　京都市下京區本町十五丁目七七二ノ一
松村　次郎君　府下北河內郡枚方町岡谷
小寺　彌一君　府下豊能郡池田町室町七番丁
久木　堅治君　西區春日出町北港住宅八一ノ二
山本　久吉君　西區春日出町三一九ノ一北港住宅六一ノ一
中尾　保君　堺市少林寺町四三丁
山下國太郎君　西區鶴町四ノ一九五
吉田　龍郎君　西區南堀江下通一ノ二八
林　眞三君　府下豊能郡豊中村曙塚四五
原科　準平君　神戸市中山手通一柴田ビル
ヂング內原科工務所(電三宮一四八二)
村上　徹一君　東區淡路町三ノ八船場ビルヂング村上建築事務所
岩崎甚太郎君　鳥取縣西伯郡米子町灘町二山陰電氣米子火力發電所建築場大林組米子出張所
中村琢治郎君　東京市牛込區早稻田鶴卷町二一二

地方會員ノ部

村井　三吾君　神奈川縣鎌倉町大町一二三
石井　宏彌君　東京市外中澁谷三〇九
水上　昌三君　宇治山田市大世古町綠町二一三
三宅萬太郎君　東京市本所區綠町一ノ八松尾合名會社東京出張所
王川　卓一君　千葉縣東金町東金一六二四

普通贊助員の部

原田俊之助君　東京市外千駄ヶ谷町穩田一七三
横田　作藏君　東京府豊多摩郡杉並町天沼中谷一二九
川面　萬吉君　東京市青山南町五ノ五一間山良方
池田長太郎君　北區天神橋筋五丁目大阪合同紡績株式會社天滿支店
佃　忠藏君　三重縣阿山郡上野町丸ノ內七二
渡邊　義三君　府下東成郡住吉村今道一七七ノ三
神戸　重吉君　北區堂島濱通四ノ三大阪建築所
長谷川　眞君　岸和田市堺町一
根岸　元治君　東京市京橋區金六町松井組東京支店

間瀬　昇吉君　大連市惠比須町二一間瀬工務所
田中　重楠君　和歌山市石橋町三
安田　繁藏君　府下中河内郡堅下村太平寺六七
山田　孝君　新潟縣佐渡郡相川町下戶町
物部　庄平君　北區上福島北一丁目一七七
新居　定世君　府下西成郡神津川堀三六一
松村喜之助君　三重縣鈴鹿郡龜山町神戶鐵道局龜山保線區
稻原　幾太君　下關市長崎町二〇八八富田方

○住所並勤務先不明者

會員　高堂　德治　魚住　儀一
地方會員　廣瀨　恭
普通贊助員　伊東　武夫　祠戶山音次郎
同　太田　四郎　同若林　俊一
同　吉本新之助　同植松與右衛門
同　久保　豐　同政安　熊市
同　櫃藤　洗二　同足立瀰一郎
同　酒井紋之助　同小枝　寅
同　木越誠二郎　同江藤　猛夫
同　石津　三吉　同地福　勇吉
同　渡部　三郎　回吉田桑次郎
同　田代　正熊　同野々山政金
同　矢田部喜平　同小林久之助
同　青木　立三　同坂根　秋光
同　清原　佐市　同茂木清太郎
同　田中　儀一

右住所或は勤務先御存じの方は本協會事務所へ御教示を願ます

寄贈圖書

郊外生活　五號　郊外生活社
住宅研究　十一月號文化建築社
工業評論　十號　同社
工業ノ大日本　十號　工業ノ日本社
電氣評論　十一月號同社
人と人　十一號協調會
都人　第十一光都人社
會報　第十九號名古屋工業會
榮ある生活　十號文化創設會
學士會月報　四三九號學士會
建築世界　十一號建築世界社
朝鮮鐵道協會報　十月號同協會
建築の普及　九月號帝國工業教育會
朝鮮と建築　九月號朝鮮建築會
工業之友　第一九七號工手學校同窓會
セメント界彙報第一〇三號日本ポートランドセメント同業會
建築畫報　九號同社
住宅　十一號住宅改良會
建築雜誌　十月號建築學會
工政　十月號工政會
經濟資料　十一月號東亞經濟調査局
中央建築　十一月號中央建築社
土木建築　十一月號土木建築社
建築新潮　十一月號洪洋社
大阪工業倶樂部　十月號大阪工業倶樂部
通俗衛生　十月號大阪府衛生會

●第七集第十二号　掲載広告一覧（掲載順）

ミドリ商会
日本エレベーター製造
飾磨化学工業
大野正営業所
大塚鉄工所
日本ペイント
浅野スレート販売
政正
特許エレベーター製作所
二和商会
南満鉱業大阪出張所
原田商会
福田製作所
石綿スレート
浅野スレート販売大阪出張所
浅野物産
ベニア商会

田村商会
建築金物商会
高田松太郎商店
阿部鉄工所
金剛商会
HANKEN SEISAKUSYO
横河橋梁製作所
大平工業所
東洋コルク工業
日本ホロタイル
阪堺電鉄
鈴木商店
駒崎化学建材研究所
日本アスベスト
湯浅蓄電池製造
共益社
今崎製作所

中村グラニット商会
木下商店
野沢幸三郎商店
森川組
田中昌司商店
大福海上火災保険
大阪鉄管商会
桜興業
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
横河工務所

横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
増田清建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
岡部建築事務所
前田松本建築事務所
船越工務所
西原衛生工業所
大阪窯業
池田勘蔵

大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯工務所
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
藤木工務店
正木工務店
岡本工務店
鴻池組営業所
有山組
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所

辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
油脂化工社
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
須賀商会
大理石工業
栄進社
松尾
山本窯業商店
境川文庫
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
日本木材工芸
高島屋呉服店

コルク工業
城口汚水処理研究所大阪支店
サカイブン建築鉄工所
ベニス工房
浜口商店
岩崎商業
小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所
高田商会
セール、フレザー
星製薬
日米板硝子
東京建鉄
大阪耐火リノリウム工業
日本工剤
内外土木建築材料
大阪ビトロライト工事
河村青写真調製所
長田商店

山中商会
米山製作所
桐田商会
川崎工場
裳華房
日本耐火スレート
田中源太郎商店
極東板硝子工業